

八九二ノ三

子二月十四日

大樹公御直筆御請写

去月二十七日拜見被

仰付候

宸翰之

叡旨は

御即位以来

皇国之災禍ヲ悉ク

聖躬之 御上ニ 御反求被為在候、

勅諭ニテ誠以恐惶感泣之至奉存候、情幕府従前之過失ヲ

自反仕候得は多罪之至奉存候、臣家茂不肖之身ヲ以徒ニ

重任ヲ辱メ、紀綱不振、内外之禍乱相踵キ、頻年奉惱

宸襟候而已ナラス、去春上洛之節攘夷之

勅ヲ奉スト雖モ、其事実遂ニ難被行、横浜鎖港之談判ス

ラ未タ成功之期限モ難量折柄、再

命ニ依テ上洛仕候上は、極メテ逆鱗ニ触レ敵譴ヲ可相蒙

は素ヨリ覚悟仕候処、意外之

宸賞ヲ奉蒙候而已ナラス、至仁之

恩諭ヲ以臣家茂并大小名ヲ赤子ノ如ク御親愛、将来ヲ

御勸誠被為在候条、臣家茂一身之上ニ取り、海岳之

鴻恩実以可奉報答様モ無之候、自今以後万事之旧弊ヲ改

メ、諸侯江兄弟之思ヲ成シ、心力ヲ合セ臣子之道ヲ尽シ、

勉テ太平因循之冗費ヲ省キ、武備ヲ嚴ニシ、内政ヲ整ヘ

生民ヲ蘇息致シ、摂海防禦は勿論、諸国兵備ヲ充実仕、洋

夷之輕侮ヲ絶チ、砲艦ヲ敵整シテ遂ニ膺懲之大典ヲ興起

イタシ、御国威ヲ海外ニ輝耀スヘキノ条件等弥以勉励仕、

乍恐

宸衷ヲ奉休憩度奉存候事ニ御座候、乍併膺懲妄奉仕間敷

トノ

叡慮之趣は堅ク遵奉仕、必勝之大策相立候様可仕奉存候、

尤横浜鎖港之義ハ既ニ外国江も使節差出候儀ニ御座候得

は、何分ニモ成功仕度奉存候得共、夷情モ難測候得は、

沿海之武備ニ於テハ益以奮発勉励仕、武臣之職掌固守仕、

大計大議は悉ク国是ヲ定メ

宸断ヲ奉仰

皇国之衰運ヲ挽回シテ、外ハ慢夷之胆ヲ吞、内ハ生靈ヲ

保テ奉安

叡慮、上は

皇神之靈ニ報ヒ奉リ、下ハ祖先之遺志ヲ継述仕度奉存候、

是則臣家茂之至誠懇禱ニ御座候、依之此段御請奉申上候、

臣家茂誠恐誠惶頓首謹言、

一火消之事、

鴻臚館

泉涌寺

般舟院

神祇官

学集院

修学寺

講武所

御春屋

御修理小屋

後院

御下御殿

御産屋

三条大橋

五条大橋

禁中

女御様

拾六ヶ所

一以呂波四十八組

一滝口

一带刀

一北面

一西面

一日御門

一南門

一公卿門

一御台所御門

一女御之門

一北門

御請

臣家茂

文書原寸 縦一七・五種 横一八六・三種

ハニ 山階宮御箇条書

(端裏朱書)
「甲子山階宮御書留」

一攘夷之事、

一皇子皇女之事、

一諸寺院之事、

一 菊門

一 石薬師門

一 清和院門

一 寺町門

一 堺町門

一 蛤門

一 乾門

一 下立壳門

一 中立壳門

一 今出川門

一 御階番

御常御殿

紫宸殿

御清所

一 洛陽七口

粟田口

長坂口丹波江

鞍馬口若狭江

大原口若狭江

近江へ

御学文所

内侍所

对之屋

伏見口

鳥羽口

丹波口

小御所

神嘉殿

参内殿

清涼殿

清涼殿

参内殿

一同間道十一口

龍花越 八瀬より近江大溝江出ル口

志賀越 將軍地蔵より近江叡山へ出ル口

山中越 白川より近江坂元へ出ル口

青山越 一乗寺より叡山へ出ル口

如意越 如意山より三井寺へ出ル口

小関越 粟田より三井寺へ出ル口

江石越 大仏より山科へ出ル口

狼越 藤ノ森より山科へ出ル口

唐櫃越 老ノ坂より丹波へ出ル口

松尾越 杉坂より丹波へ出ル口

滑谷越 清水より山科へ出ル口

一 柳ノ間万石以下之事、

一 公儀御医師之事、

一 付家老之事、

一 諸門跡江急達之事、

一 尼御所同断、

- 一 供御所領之事、
- 一 仏法之事、
- 一 行幸之事、
- 一 陵之事并陵ノ一員官位之事、
- 一 齋宮齋院之事并一員官位之事、
- 一 神宮御伝之事、
- 一 臨時祭之事、
- 一 公武礼節之事、
- 一 火元見之事、
- 一 京師守護職之事、
- 一 御馬之事、
- 一 敏宮之事、
- 一 大坂海之事、
- 一 衣服之事、
- 一 参府之事、
- 一 大廻船之事、
- 一 交易之事、
- 一 無人島之事、
- 一 蝦夷之事、
- 一 京地大炮之事、
- 一 有栖川宮之事、
- 一 良御築地之事、
- 一 禁仙復道之事、
- 一 荷前使之事、
- 一 御里坊尼御所御借上之事、
- 一 勲位之事、
- 一 初位之事、
- 一 武家六位之事、
- 一 諸大名実封之事、
- 一 太政大臣之事、
- 一 知太政官事之事、
- 一 儀同三司之事、
- 一 鎮守府將軍之事、
- 一 秋田城之介之事、

- 一五畿七道觀察使之事、
- 一大式少式之事、
- 一四国九州中国探題之事、
- 一関八州管領之事、
- 一北道藩鎮之事、
- 一南海追捕使之事、
- 一八省院代之事、
- 一豊楽院代之事、
- 一神祇官代之事、
- 一真言院代之事、
- 一座主之事、
- 一長吏之事、
- 一惣法務職之事、
- 一仁和寺別当之事、
- 一東大寺別当之事、
- 一興福寺別当之事、
- 一東寺長者之事、
- 一法務并權法務之事、
- 一醍醐寺座主之事、
- 一天台真言山伏之事、
- 一浮化僧之事、
- 一時宗之事、
- 一宗門之事、
- 一猶子之事、
- 一僧官之事、
- 一松殿之事、
- 一堀川殿之事、
- 一北畠家之事、
- 一行宮之事、
- 一御土堤之事、
- 一二条城之事、
- 一三坂城之事、
- 一伏見・青龍寺・槇之島・下加茂・如意山・嵐山城之事
- 一八幡・稻荷・叡山之事、

一与力同心之事、

一方内以下之事、

一敦賀・鳥羽・宮津之事、

一京地惣堀之事、

一同升形之事、

一洛中西北地面之事、

一遊所芝居之事、

一町々門々之事、

一禁中御堀之事、

一梵鐘之事、

一金仏々具之事、

一仏書・袈裟衣屋・仏師・仏画師之事、

一学文所之事、

一調練場之事、

一火薬之事、

一御修法之事、

一楠 名和 結城 菊池 和田 千種 越智 土居 得

能 児島 新田之事、

一五百石之事、

一地下官人肩入奉公之事、

一社人町人一身二名官位奉公之事、

一株ニ而売買之事、

一官人・坊主・遊女屋之事、

一姦夫之事、

一女中奉公人之事、

一法体家来之事、

一局方地方之事、

一二代奉公之事、

一御黒戸之事、

一御当座管絃小御所御小座敷自次之事、

一御殿御門号之事、

一僧服之事、

一社家官之事、

一勸学院・学館院・淳和院・埏学院之事、

一 施薬院之事、

一 悲田院之事、

一 神泉苑之事、

一 長州之事

上浪人 中長門守
下大島

一 七人之事、

一 穀倉院代之事、

一 江戸城之事、

一 三卿之事、

一 評定衆之事、

一 国老之事、

一 関白之事、

一 將軍之事、

一 堂上之事、

一 員外官之事、

一 文政官・武政官之事、

一 僧尼奉行 巫祝奉行

一 盜賊火付改之事、

宗門改 百姓奉行 町人奉行

大小能小
一目付・横目付之事、

一 触頭・組頭之事、

一 伝奏・所司代之事、

一 徳川家法之事、

一 諸大名国替之事、

一 有海無海并遠近大小差別之事、

一 隣交使之事、

一 立后立坊之事、

一 親王撰家夫々官位之事、

一 武家官位之事、

一 秘密三か条之事、

青 無 柳

一 准門跡之事、

一 大名家号之事、

合百六拾三か条

右山科宮御存付之御箇条以 御自筆之本写之、

子正月廿六日

ハニ 喜入撰津ヨリ在京小松帶刀へ

暲姫ノ婚儀、長州使者來訪ノ件

一 暲姫様黄疸御煩、追日御快被為成難有奉存候、御内婚御日取之儀も先便ニ申上置候通、御煩ニ而治定不相成、御日取相替、大奥江差廻置候処、二月十二日御決定相成候付、其段三郎様江御申上可被成候、

一 函書殿登 (鳥津久治) 京ニ付、御家老座書役畠山吉十郎被相付候

儀ハ、先便申上候通、自然御中途より御用封御仕出被成候儀有之節、御差支可相成候付、可相成ハ御家老座書役一人ハ被召付度、御付御小納戸より遮而内意申出尤之事ニ付奉

伺、右之通為被仰付義ニ御座候、然処中山次左衛門ニも一昨夜致着、御家老座書役又は御用部屋書役も不被召付旨、右同人より致承知候、就而は最早跡越ニ相成被致事候、東郷八郎ニ茂中山同舟致着候、右八郎儀も

爰許御用濟次第致帰京候様被申越候付、右同人ニ而畠山場ハ可相濟事ニ御座候得は、今更御覽と申儀も難出来、八郎儀を被召付と申儀ニ而は無之候得共、函書殿御同舟より帰京被仰付、御中途ニおひて御用筋之儀ハ、吉十郎共へ申談相勤候様被仰付、差返申答ニ候、左候而吉十郎義は、函書殿着候上ハ御差返被成度御座候、乍然其御許江御用有て被留置ニ而も何分御吟味次第御座候、尤御用部屋書役之義ハ初筈より不被召付賦ニ御座候、

一 南泉院内江御造立之

御神殿之義、御案内之通、英夷襲來之時分より何と無御取止相成居候付、旧冬掛り御作事奉行より御用部屋江御取付可相成哉と伺出候由、其時分迄ハ兵火ニ逢候者共、居宅造作之最中ニ而、大工等別而相少く砌ニ付、今暫く御見合之段達し為相成由、最早一統家作も濟寄候付、懸り御勝手方御用人江御取付相成候而如何可有之哉、致吟味候様相達置候処、御取付相成可然、御作

事奉行江も相達候所、切込等も半方位ハ出来居、御作
事方ニおひて御取付相成何も差支無之旨申出候旨承候
付、則御取付相成候様相達置申候、海江田・中山等
も承知致候付、是迄之成行及御答よし、自海江田より
御直ニ申上候様達置申候、市中引直し方之義も巨細申
上筈承候、書面ニ而はとふも難解義候間、是以右同人
江相含ませ置申候、

一長州より桂讓助と申者^{使審物頭}、御使者として、上下拾
位^{之よし}

人位ニ而参り候段、園田彦左衛門申遣候^{去十七日、黒崎渡海}、御城

下江為入込候而は、如何と致吟味、本田弥右衛門^(親赴)・海

江田武次^(信憑)此方より、十院又は阿久根辺迄も参り御口上

承候様申付、昨廿四日被差出候、右兩人江相含ませ差

出候趣は、此節御使者被差向候段、^(アキ)被致承知候、就而

は旧冬蒸艦及焼失候一条ニ付、年若之者共致奮激居候

間、城下元迄罷出有之候而は、甚被致懸念候付、是迄

被差越、御使者御引請被申段申述、御口上承候様達置

候、尤奉伺右通取扱申候間、為御心得申上置候、御使

者御口上振も参り候上ならてハ不相分候へ共、多分御
挨拶之儀かと被察申候、其通之義ニ候てハ、最早公武
御届ニも相成、且又 御上京中之義御座候間、其御許
江可被仰進趣候而、御答相成可然候半と存申候、併此
義ハ私之存慮未為決義ニ而は無之候^{海江田も本田一緒ニ被差越候ハ、其備は勿論成行上京之上御聞取、之節、旁可然致吟味候}

一 大坂よりも被差廻候蒸艦着候得共少々機械も相痛取繕

七日位は可懸と之事ニ候、いまた久留米より相談之舟

も爰許江不相廻いづれ宮之城御乗舟も来月初可相成と

存申候、然処大砲御注文之舟も去ル十二日長崎着舟相

成、彼之方来廿八日方可致出帆由、竹下より^(南右衛門)昨朝申参

候、就而は此舟も来月一二日ニは、着可相成存申候間

是江宮之城御乗舟相成候得ハ、舟も大振ニ而旁可然か

と存候、乍併末不奉 同事ニ而為決儀は、難申上候間

後便申上候様可致候、

右条々申上候間、御申上之義は可然様御奨申参候、

以上、

正月廿六日

喜入撰津(久高)

小松帶刀殿

文書原寸 縦一六・二種 横二九三・八種

將軍へノ宸翰

天下庶政一新ノ聖旨

朕不肖ノ身ヲ以テ、夙ニ天位ヲ踐ミ、忝モ万世無欠ノ金
甌ヲ受ケ、恒ニ寡徳ノ

先皇ト百姓トニ背ンコトヲ恐ル、就中嘉永六年以来、洋
夷類ニ猖獗来港シ、国体殆ド云ベカラズ、諸僞沸騰シ、
生民塗炭ニ困ム、天地鬼神夫朕ヲ何トカ云ン、嗚呼是誰
ノ過ゾヤ、夙夜是ヲ思テ止コト能ハズ、嘗テ列卿武將ト
是ヲ議セシム、如何セン昇平二百有余年、威武ノ以テ外
寇ヲ制圧スルニ足ラザルコトヲ、若妄ニ膺懲ノ典ヲ奉ン
トセバ、却テ国家不測ノ禍ニ陥ランコトヲ恐ル、幕府断
然朕ガ意ヲ拡充シ、十余世ノ旧典ヲ改メ、外ニハ諸大名
ノ参勤ヲ弛メ、妻子ヲ国ニ帰シ、各藩ニ武備充実ノ令ヲ

伝へ、内ニハ諸役ノ冗員ヲ省キ、入費ヲ減ジ、大ニ砲艦
ノ備ヲ設ク、実ニ是朕ガ幸ノミニ非ズ、

宗廟生民ノ幸ナリ、且去春上洛ノ慶典ヲ再興セシコト、

尤嘉賞スベシ、料豈計ランヤ、(三条)藤原実美等鄙野ノ匹夫ノ暴

説ヲ信用シ、宇内ノ形勢ヲ察セズ、国家ノ危殆ヲ思ハズ、

朕ガ命ヲ矯テ、輕卒ニ攘夷ノ令ヲ布告シ、妄ニ討幕ノ師

ヲ興サントシ、又長門宰相皇子父子ノ如キ、其主ヲ暴弄シ家臣ノ狂暴ヲ制

スルコト能ハズ、故ナキニ夷舶ヲ砲撃シ、幕使ヲ暗殺シ

私ニ実美等ヲ本国ニ誘引ス、今ニ至ルマデ謝罪ノ言ヲ聞

カズ、此ノ如キ狂暴ノ輩必罰セズンバアルベカラズ、然

リト雖皆是朕ガ不徳ノ致ス処ニシテ、实ニ悔慙ニ堪ズ、

朕又オモヘラク、我ノ所謂砲艦ハ、彼ガ所謂砲艦ニ比ス

レバ、未ダ慢夷ノ胆ヲ吞ニ足ラズ、国威ヲ海外ニ顯スニ

足ラズ、却テ洋夷ノ輕侮ヲ受ン欤、故ニ頻ニ願フ、入テ

ハ天下ノ全力ヲ以テ、摂海ノ要津ニ備へ、上ハ泉涌寺ノ

山陵ヲ安シ奉リ、下ハ畿内ノ生民ヲ保チ、又列藩ノ力ヲ

以テ、各其要港ニ備へ、出テハ教艘ノ軍艦ヲ整へ、無綏

ノ醜夷ヲ征討シ、速ニ

先皇膺懲ノ典ヲ大ニセヨ、夫去年ハ將軍久シク在京シ、

今春モ亦上洛セリ、諸大名モ亦東西ニ奔走シ、或ハ妻子

ヲ其国ニ帰ラシム、宜ナリ費用ノ武備ニ及バザルコト、

今ヨリハ決シテ然ル可ラズ、勉テ太平因循ノ雜費ヲ減省

シ、カヲ同フシ、心ヲ專ニシ、征討ノ備ヲ精銳ニシ、武

臣ノ職掌ヲ尽シ、永ク家名ヲ辱ムルコト勿レ、

又「依之軍艦砲台ハ更ナリ、大砲一挺ヲ鑄、火藥万斤ヲ

備ル等ノ如キハ、列藩時ヲ以テ幕府ニ告ケ、幕府亦時ヲ

以テ朕ニ告ケヨ、朕亦幕府ト議シテ、二三ノ公武官ヲシ

テ、諸邦ノ実備ヲ巡察セシムベシ」又嗚呼汝將軍、及ビ

各国ノ大小名、皆朕ガ赤子ナリ、今ノ天下ノ事、朕ト共

ニ一新センコトヲ欲ス、民ノ財ヲ耗スコト無ク、姑息ノ

奢ヲ為スコト無カレ、速ニ膺懲ノ備ヲ嚴ニシ、祖先ノ家

業ヲ尽セヨ、若怠惰セバ、特ニ朕ガ意ニ背クノミニ非ズ、

皇神ノ靈ニ叛クナリ、祖先ノ心ニ違フナリ、天地鬼神モ

亦汝等ヲ何トカ云ンヤ、

文久四年甲子正月

(同文書ハ八九一ノ二号文書ト一部ヲ除キ同文ナリ)

文書原寸 縦一七・四糎 横一四一・八糎

ハ空 松平慶永公ヨリ島津久光公へ

一橋公訪問ノ件

〔端裏書〕
「慶永」

寸翰呈上仕候、先以愈御多祥奉大寿候、陳は昨日は

大樹公御參

内、諸侯伯随従、於

小御所

勅筆拝見、実々感泣銷骨銘肝、委細面上之節ニ譲り候、

○今夕七ツ時頃迄ニ、一橋旅館へ御光来被成候様、橋公

被仰聞候、尤其節帶刀・猪太郎(小松)ニも罷出候様御伝声奉希

上候、

右之段乱揮仕候、御海有奉願候、頓首、

春王念八

慶永

文書原寸 縦一六・七糎 横八七・八糎

〇八六 綿船事件ニ付長藩ヨリ井上閣老ヘノ届書

八七 高松三位より島津久光公へ

光格天皇勅点 高松公祐卿詠草 共二通

仕官依頼之件

(包紙ウツ書 総括包紙：包紙①②ヲ包ム)
「光格天皇宸翰入」

勅点 御祝褒有 勅語

極秘不許他散

進上島津少将殿

保実

天保六年正月廿四日

禁中御会始

父故權中納言公祐卿
詠草

包紙原寸 縦二〇・四種 横四二・四種

八九七ノ一

(包紙ウツ書①)

「島津羽林公

内啓

高松三位

(本)誠三ツ同ジ
□ □

□

┌

所勞中前略、誠ニ一昨日ハ態々蒙

御側役、一入御懇切、殊以御名入之御文匣ノ内拝受、誠

ニ難有候、御芳情不輕次第、実以幾久祝納候、乍去御手

数何共却而恐痛千万弁至極、右之段厚く御礼申込度候、

実ニ御家榮之程奉祝謝候事候、扱此詠草一通、是ハ上包

へ委敷認上候通事、

光格帝ノ御代、父故黃門秘詠ニ候、其頃ハ

公武共御合体至極御繁榮之比ニ被為在、御互ニ歎喜之事

何卒々々希クハ 貴侯御憤発、此世ヲ今一際治平ニ取還

し、天保頃ニ相准し度ものニ候、猶又委々心事御側役森

岡殿へ申含置候、御寸暇御聞込被成下候ハ、難有候、

旧臘廿三日於二条家殿中、 貴侯賢情申上候ニ付、拝謁

も申入度候、乍十分外聞も如何、無子細事ニハ有之候欵

と、迷候所もはや御申上候付、右様千万ニ而何卒差急候

てハ却而不宜儀可相成候、 貴侯ノ御賢配ヲ以立身公卿

老人相応之老役於蒙 命、勵度ものなから、決而左様ニ

ハ難參御時宜ニ被察、三五七ケ年向ふの事かミえぬ輩計

在役被 仰付候様ニ被察候、是も御時宜ニ被為在事と、

且ハ惑、且ハ歎候、只々引籠蟄居仕候欤保実如成もの、

相応之事と表ヲモ退キ、恐懼仕義候事候、御自曼智恵振

立候而かくのそハ無之候、猶又御在京中可然御工風も被

為在候ハ、^(事)必竟国家及

朝廷御為迄ニ御取持も被成下度候、身命ヲ投打、抽忠憤

候所存、聊手覚有之、保実誰克引立ノ心はへ無之打込而

已ニ候、右貴侯ノ恩抱所待候、

子正月廿九日

保実

島津羽林公

御内披

尚々、琉球島ハ誠ニ 准后御方妹御方之辺相好候ニ

付、過日御送り糸買、右婦連中へ相送候、此上なく喜

居、若又不急候得共、立しまの方、自然御着舟候ハ、

今老兩反御所望申與候様申来、婦共多人教故引張合

而喜居候事候旨申来、御笑旁此由御知せ候也、

文書原寸

縦 一八・二種

包紙原寸

縦三〇・七種

横 一四七・二種

横四二・九種

八九七ノ二

(包紙ウツ書②)

「天保六」

御点

天保六正廿四

公祐上

禁中御会始

新鷲竹裏啼

今よりハよのうきふしもしらぬねにうたへや謡へ竹のう

くひす

千春無限と祝候

くれたけのまかきをさへもへたてぬハよにめつらしきう

くひすの声

文書原寸

縦一七・六種

包紙原寸

縦二七・六種

横 四八種

横四〇・三種

ハ六 將軍再度ノ上洛ニ付京都市中ノ警蹕

大樹公昨年御上洛之節は市中往来雜入、無礼をも制止無之候得共、於今度は撰家・宮・大臣同様先を被払候而無子細候、但シ余リ嚴密不相成様、分限相応御心得之様、尤御沙汰之義ニ而は無之、当役心得を以て申入候事、

正月

文書原寸 縦一六・八種 横三三・六種

御下乘、

但乘輿・乘馬又は肩衣着用之節は不及

御下乘、

一六位藏人之内、堂上加判之御方ニは

御下乘、

但堂上加判之御方は紫差貫着用、

文書原寸 縦一四・六種 横四二・六種

ハ七 親王撰家以下参内ノ節乘輿下乘ノ規定

(端裏書)

(付箋) 「甲子正月」

(朱) 「甲子」

」

親王方 撰家方 清花大臣 宮門跡方

撰家門跡方

右御向、御乘輿たり共

御下乘、

一官服着用之堂上方歩行之節、納言殿上人ニ而も

ハ八 一橋慶喜後見職資格ヲ以テ車寄昇降ノ朝

命

(端裏書)

「甲子正月」

後見之御取扱を以、以来車寄昇降可有之旨

御沙汰候事、

(朱) 「甲子」

(朱) 「一橋江御達」

正月

文書原寸 縦一六種 横三〇・九種

三 久光公ヨリ幕府ヘノ建白

撰海防備及武備充実ノ件

(包紙ウツ書)
「幕府エ

御建白御草稿」

(端裏朱書)
「甲子正月」

夷賊御征服

皇威御振興、生民塗炭之苦を被為救度と之從來之

叡慮ニ被為在候得は、必死ニ遵奉仕候儀は武臣之常分、

おのつから幕府より、攘夷之策略寛急之次第、御建議可

有之管候得共、今撰海之御手当向相察候処、海岸ニ彼之

砲艦ニ可対応砲台乏ク、陸上ニ野戦を可営之備無之、我

何を以勝算可有之哉、是迄之夷情を以相考候処、往々人

之國ニ兵艦を差向候ニは、必先ツ其國之都会咽喉之場所

を攻撃すと相見得候得は、前条通撰海之形勢無人之地同

然ニ而、逆も

禁闕之保護、京畿之警衛如何可有之哉、実以不安心之儀

と奉存候、各國之兵備は各國主之量見も可有之候得共、

何分撰海之要港ニは

公武同一体ニ而、

皇國之全力を以、彼カ砲艦ニ可対応海陸之実備を嚴にし

内外之見据屹度相付、速に

叡慮相立候様有之度奉存候、既に近年諸國ニ而無謀之攘

夷相唱候面々も、嘉永癸丑入港以来、類ニ内備之議論も

有之、十年之星霜を経候而も其驗不相見候ニ付、匹夫之

分に於てハ始終之遠略ニ涉らず、一己之管見を以扼腕切

齒いたし候、志ニ於てハ一凶ニ不可惡詛ニも可有御座哉、

乍併

御國体之立不立、攘夷之成不成、克々其利害得失を熟考

仕候得は、誠以不可謂

神州之御大事たるハ、事理判然たる詛ニ御座候、堂々た

る

天朝 幕府、天下之大議を決せられ候ニ、一時之物議ニ

拘泥し、不成之攘夷を行ひ候は不思寄御儀ニ而、被重

社稷候御趣意ニ無之、且は後世に對し、臣子之分難相立候間、是非攘夷之攘夷たるを行ひ、盟天地奉安

宸襟度儀ニ御座候、扱攘夷之攘夷たるを行ひ、奉安

宸襟候ニは、先以彼を制圧する之武備充實いたし候義急務ニ可有御座、勿論一昨年来

幕府之御政体昔日之比ニ無之、内断然たる非常之改革を行れ、外諸大名之參勤被相弛、妻子各其国ニ引取候様被命候上は、夫等之余財も有之道理ニ候間、

御手始ニ神速京撰之御備向、盛大嚴重ニ被設度奉存候、
実以不容易訊ハ勿論ニ候得共、於

幕府勤 王之至誠被相貫、断然たる 御処置を以、天下之耳目を一新せしめ、仮令暴論之輩といへとも感泣いたし候様無之候而は

神州挽回之道相立候儀夢々六ヶ敷、然は乍恐

朝廷之朝廷たる 御体裁可被為立儀ハ勿論ニ而、第一は幕府之幕府たる 御職掌被為尽候厚薄ニ依り、治乱興亡之機相分れ可申候間、能々

御鑑察被為在、大根本たる武備充實之大業速ニ 御取起

相成度奉存候、昨夏弊邑ニ而英夷ト一戦之砌、砲艦之備手薄ク候故を以、僅ニ撃退之場ニ至り候迄ニ而、一艦を打沈得ざるハ、実ニ千載之遺憾、武門之瑕瑾ト恐入候、乍併彼力伎倆を克々致実察候処、我ニ十分之武備さへ相立候得は、

神州之氣節ニ而は、数十年を経すして

御国威海外ニ輝キ、宇宙ニ冠たる強國ト相成、夷賊御征服無疑義と奉存候、不肖之私実以不堪恐懼候得共、昨年来聊官武之御間ニ奔走仕、殊ニ昨秋御召之

勅ヲ蒙り上京仕候処、弥内外切迫之世態、殆

神州之御安危に關り候機と奉存候間、前条確証を得候事件等、愚慮之俛申上候、猶御賢慮相伺候而、必死之微力奉尺度奉存候、誠惶敬白、

子正月

島津三郎

文書原寸 縦一八・七種 包紙原寸 縦二七・六種

横 二八〇種

横 三九・六種

三 將軍參内二付式次書

上洛之儀

一入洛日闕迎等之儀、如昨春総而無之、

撰家・宮・華族・大臣・議奏等使差向、自余由緒

之外無使、

一入洛翌日為賀詞被遣

勅使并伝 奏、自分歛入城、

一以 思食賜板輿、

入洛賀詞

勅使之節賜之、

一初參 内、

一行粧之儀、專品格可為質素事、

一於唐門透垣外下車、

簾・沓・太刀之役、大名・高家之内可役、如昨春、

乘輿之節、於唐門内車寄前下乘、

一昇車寄參上、

高家一人昇諸大夫間、来于此所、請取太刀太刀之役之人

自段下、於新廊下取付之辺授大樹、々々手自隨身干差出之、

麿香間、 伝 奏於車寄廊下南方出迎誘引、

〔付箋、米〕
「板輿拜領ニ候間、自初參 内、板輿可相用」

被聴、牛車有之候間、唐門内車寄前ニ而下乘」

一麿香間ニ祇候、

議奏各出会、第一承口上、

茶・多葉粉盆、殿上人出之、

隨從之諸大名・公卿虎間、四位以下鶴間・桜間等

祇候總裁職・老中・若年寄、高家等守位次着座

一御対面之儀、

一先有内見

伝 奏誘引、

一出御于小御所上段、

一進獻目錄、伝 奏持參于

御前、披露之、

一伝 奏申次、

一大樹參進于小御所下段、先一拜、更進于中段東側、拜

天顏有

勅語、

一進獻之馬引廻于東庭、

高家引之參進、馬允請之引廻三返、

一大樹退入、

一入御、

一更召常御殿、賜 天盃、

殿上人陪膳、

一大樹退入、

一入御、

一事訖、大樹退出、

殿上人龜杉戸迄見送

伝 奏初所江誘引

高家自段上、授太刀于役人

初所乘車、

親王御方

准后御方 之儀

一下乘之儀、准 禁中、

一從車寄參上、

伝 奏車寄廊下迄出迎誘引、

一御客間ニ祇候、

太刀高家如 禁中、

茶・多葉粉盆、殿上人役之、

一三卿出会承口上、

三卿更出会述 御返答、

〔付箋、朱〕 御乳人出会述 御返答」

一准后非常付公卿出会承口上、

同公卿更出会述 御返答、

〔付箋、朱〕 上臈出会述 御返答」

一退出、

殿上人廊下迄見送、

伝 奏初所迄誘引、

准后御方之執次、車寄下薄疊迄見送、

(裏表紙ニアリ)
「甲子將軍參内之儀」

冊子原寸 縦二八・七糎 横二〇・六糎 六枚

三三 松平春嶽公ヨリ久光公へ

濟範法親王閑院宮へ御住居ノ件

御安全奉寿候、陳は昨日は伊太郎(高崎猪太郎カ(中根))・靱負等閑院宮ノ見分

委細は伊太郎より御聞取と奉存候、先々閑院ニ於て御請

ニ相成御同意奉安心候、今般

濟範様閑院宮仮御住居之事、改而從

朝廷被仰出候物ニ而ハ無之候哉、此辺之義篤と猪太郎ニ

而も早々

陽明家へ被遣、從專藩御相談被成下度奉存候、昨日閑院

見分之委細も

前殿下へ為御心得申上候様猪太郎へ御申聞可被下候、先

は用事而已、只今儀適前取紛乱毫御仁免可被下候、頓首、

覚前

一日

三島盟兄

越路隠士

尚々、時下御自愛專祈候、不一、

文書原寸 縦一六・七糎 横七九糎

三三 四方拜以下朝廷ノ御儀式

文久四年甲子

正月

一日 四方拜 撰家中

節会

二日 大床子御膳

三日 中務卿宮(磯仁親王) 尹宮(朝彦親王) 帥宮(磯仁親王)

右大臣(徳大寺公純) 前右大臣(三条齊敬)

差筵

三室戸(陳光)三位 三室戸(雄光)新三位 右三位中将

北小路(隨光)三位 和光朝臣 治光

四日 外様・公卿・殿上人

五日 千秋万歳

六日

七日	白馬節会		
八日	仁和寺宮 <small>旦刻</small>	御修法	<small>午刻</small> 内々門跡
九日	黒御所々々 <small>午刻</small>	大乘院門跡	一乗院門跡 外様入道
十日	諸礼		
十一日	神宮奏事始		
十二日	賀茂奏事始		
十三日			
十四日	太元帥法	後七日阿闍梨	
十五日	御吉書 三毬打		
十六日	踏歌節会		
十七日	三毬打		
十八日	東本願寺		
十九日	舞 御覽		
二十日	養源院	法淨院	南禪寺
廿一日	護淨院	小池坊	智積院
			蓮台寺
			五山

本国寺

廿二日	
廿三日	
廿四日	和歌御会始
廿五日	
廿六日	
廿七日	
廿八日	
廿九日	

冊子原寸 縦二四糎 横一七・三糎 三枚

九三 国防ニ関スル幕府ヨリノ勅答書

鎖港之義兼而

御沙汰も被為在候処、方今宇内之形勢も御座候付、長崎・箱館之両港ハ其仮ニ差置、横浜一港を鎖候義、夫々ノ外国へ為談判使節も指出し、孰れに成功を遂げ可申見込ニ御座候付、此段言上仕置候、且又右使節の方申候ハ、彼

是歳月を経可申事候得は、其内撰海を初、各国沿海之武備精々勉勵仕、膺懲之御趣意一日も早く貫徹候様仕度奉存候、

右は幕府より

朝廷へ 御奏聞有之 御聞濟之上、去月廿七日

勅書之写諸侯へ御渡奉希、左之趣被 仰出候事、

文書原寸 縦一六・四糎 横一三・七糎

久光公ヨリ朝廷へノ上書

將軍家茂ニ賜フ宸翰草案

本文書ハ八九一ノ二号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦一八・八糎 包紙原寸 縦三〇・五糎

横一五二・二糎 横三七・五糎

近衛忠房卿ヨリ島津大隅守殿へ

近衛家訪問ノ件

(包紙ウツ書)

島津大隅守殿 内々

几下

忠房

(朱・紙三ツ同シ)

(封紙ウツ書)

島津大隅守殿

早々 几下

忠房

緘

於 禁中認其上大乱書免可給候也、

弥御勇猛珍重候、扱今夕伊予守御同道御出之旨、今朝御

申越何を承候、然ル処今日退出遅々可及模様ニ付、明日

未刻頃愚亭へ伊予守御同伴御出可給候様、尹宮・前殿下

被命候、仍早々右申入候、予州へも從其許早々御申遣し

御願申入候事、

文書原寸 縦一六・四糎 包紙原寸 縦二七・九糎

横四五・六糎 横四〇・六糎

伊達伊予守より島津久光公へ

参内及登城ノ件

(包紙ウツ書)

島大隅守様

密急用

伊予守

〔封紙ウツ書〕
一 拝答

宗城

拜読仕候、如貴論春光暢達ニ至候、弥御安栄奉大賀候、
扱又鼻兄(松平春嶽)より之廻状照手仕候、尤

閣下にハ俄之御腰脚痛ニ而、迎も御登 城・参

内一時にハ難被成旨御尤奉存候間、御参

内被成度、僕只今十二時前承知、直様より仕度仕候而ハ、参

内之時刻遅々相至候間、登 城ハ御断ニ仕候、右等之義

ハ、鼻兄迄申遣候、呉々御参いり被成様奉希候、頓首、

即時

文書原寸 縦 一六糎 包紙原寸 縦三二・八糎

横四六・四糎

横四三・七糎

伊達伊予守より島津久光公へ

蒸気船燒撃ノ風聞

〔封紙ウツ書〕
一 双松明公

弄鐵拜

愈御安栄奉大賀候、近日ハ大分催春光候、別紙一通鋭鼻
兄より廻達、謹写仕候故、御廻し申上候、御写之末、橋(橋)
公へ御返壁奉希候、恐々頓首、

仲春朔

尚々、於上関亦蒸気船ヲ燒ノ風声伝聞、多分虚説と

ハ存候得共、一応伺度候、已上、

文書原寸 縦一六・七糎 横三四・二糎

越前春嶽卿より島津久光伊達宗城両公へ

二条城会議

〔封筒〕

一 島津少将様

越前々中将

宇和島前侍従様密披

〔封筒ウツ、朱〕
一

謹啓春暖相催候処、先以愈御清泰被為涉奉恐賀候、陳は

今夕定而高猪(高崎五六)

字和馬老候

尊館へ拜趨万事申上候義と奉存候、扱又尔後(慶喜)一橋并老中

より達有之、登

〔営仕候処、彼去月廿七日御参

内之節、於

小御所

大樹公を始、御示しニ相成候

天筆御写、昨廿九日伝奏より相廻り、僕も一通拝借仕申

候而帰宅、謄写申付一通写出来候ハ、兩通為認

二君へ可奉差上と奉存候、右

天翰御写侯伯へ拜見被仰付、就夫

幕府之御趣意も侯伯へ布告相成候御評議と存候処、例之

横浜鎖港、長・函兩幕は是迄之通りと從

朝廷被

仰出ニ致度と申一件、是は橋公始閣老一同之存意、右之

談判に有之候、別紙二通は閣老より相渡、小生篤と相考

置候様ニとの事ニ御さ候、是は実ニ大閉口之極ニ御座候、

且又最前認置候廿七日御告示之

宸筆御写、侯伯へ布告候而は不宜との議論も有之、不量

閣老・参政・橋公尤主張ニ御座候、其主意ハ先日之

宸筆布告候而は開国ニ相成、例之鎖幕ニハ至り兼可申、

就是而は第一黒田・肥後等之不平も有之、却而生葛藤候

ハントの事、僕も議論は致置候得共、一人而已拒

廟議候而は却而不可然と考申候故、先大概之所ニて差置

申候、難有

天意皇州ニ布告不致候而は実ニ不相濟と奉存候、不堪杞

人之憂、感憤之至、切齒扼腕を極申候、

兩賢公之御所存如何、僕之不平即天下之不平ニも可至哉

と宵晨之痛憂不過之奉存候、且又明日御相談筋有之候間

尔後

兩公御登

營被成候様、一橋并老中申聞候、尤別段御達不仕候間、

小生より申上候様申聞候間、

兩公御登 營被成下度奉伏希候、右御登 城も矢張前文

之趣意御相談ニ御座候、僕亦登 城可仕候間、左様思召

可被下候、右之儀ニ付篤と御登 城前三人打揃ひ御相談

取極候上にて、登 城可然と奉存候間、昼前四ツ半時迄ニ

両公御光来龜飯差出、篤と御熟談申上、其上にて登 城

可仕候間、左様思召被下度候、

三郎君へ申上候、帶刀(小松)・猪太郎被召連候様奉希候、帶刀

不快ニ候ハ、猪一人ニもよろしく候、右之段申上度

如此ニ御座候、書余期面尽草々早々御座候、頓首、

二月朔日

慶永

島津少将様

宇和島前侍従様

尚々、例文不乙、

文書原寸 縦一六・七糎 封筒原寸 縦一八・四糎

横 二五三糎

横 四・五糎

二二 伊達宗城公ヨリ島津久光公へ

越前邸へ集会ノ件

尚以御震筆写無御座候間、正以不都合ニ御座候、已

上、

奉賀候、然ハ別紙之通り到来ニ付、御安眠を奉驚候、仍

而明日四時迄ニ御出門御参集、僕亦奉希候、御否可被仰

下候、書面類ハ御通閱之末御返却可被成下候、恐々頓首、

仲春朔夜第一時

長面

双松君

老越如申越、兩人ハ明朝被召連度奉存候、已上、

文書原寸 縦一六・八糎 横三〇糎

二三 松平春岳公ヨリ島津久光伊達宗城二公へ

秘書在中但シ秘書ナシ

双松君

慶永

对翠君

秘書在中

封筒ウラ、朱(紙)

明日御光来之節、御持参可被下候、頓首、

朔日

鼻

(島津久光)
芋公
(伊達宗城)
面公

文書原寸 縦一六・七種 封筒原寸 縦一八・六種
横 二二種 横 四・七種

九三 中根鞆負ヨリ高崎猪太郎へ

二条城会議ノ件

(封紙ウラ書)
「高崎猪太郎様
内密直展

中根鞆負

急用

過刻之貴考奉存候、唯今

橋公より御返書参り、右入置申候、明夕

三郎様・うわ島侯御同道御臨会相成候様此方様より御通

達相成候様被仰越候、丁度御都合も可宜と奉存候、此段

被仰上可被下候、且又字わ島侯へ御参にも可相成候へ、

御集會
其節右之儀も被仰上可被下候、差急ぎ早々頓首、

二月朔日

二白、橋公より之仰之儀、只今より御登 城相成候、

御断之方ニも思召候得共、何分廟堂之暴説も御座候

ハ、可然哉ニ付、追而御登 宮相成申へく候、

一明夕御集會御刻限之義は、御登 城 御申伺

猶又可被仰通候、

文書原寸 縦二〇種 横五八・三種

〇九四 久光公大隅守兼任口宣案其他

四通

九五 松平春嶽公ヨリ島津久光公へ

二条城集會ノ件

(封筒)
「双松老盟台 閑鷗永
前陳密披

(封筒ウラ、朱紙)

謹陳、只今差出候書翰、長面君より御廻達相成候へ、

被汚

電覽候末、(帯刀)猪太郎へも拜見被仰付度奉希候、已上、

二月一日

慶永

双松賢盟台

文書原寸 縦一六・七糎 封筒原寸

縦一八・七糎

横三三・四糎

横 四・七糎

二六 高松三位ヨリ島津少将殿へ

仕官依頼ノ件

(包紙ウツ書) 一島津少将殿

内拝復

高松(保実)三位

(朱) 誠

(封紙ウツ書) 一島津羽林公

内拝答

保実

蒙懇答忝拜誦候、先以春寒之折、御安泰恐悦奉存候、然
は段々御深睦之程急筆ニハ難謝尺候、不凶一昨年来御徳
力ニ感従、猥ニ御別懇ヲ仰掛候処、全不敏之保実不便之事
申上御憐、密議之御様子、実以本懐千万、如何様ニ欵恭
存候、此朝中ハ鹿疎之御贈方、却而過福ヲ得何とも恭存

候、御手数痛存候、昨日為再謝

勅宣内願申上候所、今日以御直筆御内翰投被下、誠以難惟
幸甚と御趣意繰返し遂拜見歡喜不少候、猶内願辺ハ折ヲ
被為考、何と欵御時刻合も可被為在也、貴公御賢慮ニ奉
任置候事ニ可仕候、昨冬も(近衛家)陽明殿迄ハ御懇配被成下候旨
扱々被為懸貴意畏入候、何分如御案内候、不徳之拙儀願身
罷在候事ニハ有之候、実ニ御見捨なふ時ヲ以御策試所願
候、所勞中乱毫御推覧候へ、亦之拜謁之刻御祈待候也、

恐々謹言、

二月一日当座

返々御端書御覽仕候事と御聞請、千万忝仕合ニ奉存
候、猶御考示之刻ニ而不苦、先方御方へ待被申居候
事、嘸喜悦奉存候也、

文書原寸 縦 一八・一糎 包紙原寸 縦三〇・七糎

横 二四・七糎

横 四二・七糎

久光公覚書横浜鎖港一件

(端裏朱書)
「突亥より甲子」

横浜鎖港一件

(文久三年)
亥九月比閣老酒井雅楽頭上京之砌、

朝廷より御達有之候は、当時之処、夷狄掃攘難相成候
ハ、横浜計ニ而も致鎖港候様との事候処、酒井御受ニ
而帰東之由此儀關東より内々申上候哉ニも相聞得候、就而尚又為 御催促
勅使可被差下との

朝議も被為在候由、此方十月三日京着之節迄、色々
御評議有之由承り、同十五日 尹宮御邸江初而参上之
折申上候は、横浜鎖港ニ付

勅使被差下候哉ニ承知仕候、此義は不可然事と奉存候、
迎も被行ノ義ニ無御座候間、御取止可然奉存候、尤

皇国之御武威海外ニ相輝キ候様相成候ハ、蛮夷は自
ら制伏可仕、昨年も建言仕置候段、詳細申上候処、御
許容ニ而、其義御取止ニ相成候、

一十月十九日越前旅館江初而見廻之節、右鎖港之義如何

越十八日京着 旅館は東本願寺字寮

御勤考被成候哉と致尋問候処、迎も六ヶ敷と被申候ニ
付、此方申候は、只今横港一所鎖し候迎、何之詮ニ相

成可申哉、迎も被行候事ニも無之、却而夷人之怒を生
し、御難題は案中之義、是非御取止有之度、尤

御国内武備充実之所、偏ニ御世話有之、御武威相輝候
得は、外夷は自ら承伏可致候、依而右談判之為外国奉
行池田筑後守、西洋江為

(長抱)
御使節被差越答之由候得共、決而

御国辱を醸出候事故、御差留相成度段類ニ申立候処、
越も至極同意ニ而、一橋卿京着之上は共ニ申込候様可
致と返答有之候事、

子正月二日一橋卿旅館(忠徳)酒井若州(松平慶永)越前・会津・宇和
(宗徳)島参会、

横浜鎖港一条、越前江談話之趣委曲申述候処、

一橋卿答、至極尤之趣意、併池田ニも最早出帆相成候
ニ付、只今より呼返し候義も難相成、殊ニ諸藩之人心
鎖港不相成候而は不居合候間、此節は先右之通可然、

〔此方云、然らば彌鎖港被行候御見留御座候哉、

〔答、別段見留は無之、仏人書記役之由之話ニ、鎖港御達之

上は、(長崎(箱館))崎・箱江引移料御遣し被下候ハ、随分被行可

申と申候事も有之、

〔此方云、其引移料は何程ニ御座候哉、

〔答、何百万両も可有之哉、

〔此方云、是は無益之至奉存候、右之大金を以

皇國惣海岸防禦之費用ニ被成候ハ、近年中充実ニ至

り可申、不被行鎖港ニ御出し候ハ、甚御失策ニ御座候、

〔答、如何ニも尤之義、しかし最早使節差出相成候上は

只今より取止候義は六ヶ敷、

〔此方云、使節は長崎滞留ニ候ハ、其段被仰越可然、

又支那滞船ニ候ハ、支那へ被仰越可然候、此節於西

洋談判不相整節は如何可成候哉、実ニ御国辱無申計

事ニは有之間敷哉、

〔答、只今より差留申遣候而も逆も間ニ可合兼、且談判

之整不整は、今より論せずとも可宜、西洋各国江参候

事故、帰国迄は三四ヶ年を可経候ニ付、其時ニ至り候
ハ、人心之居合も可相付欤、

〔此方云、右様姑息之御趣意ニ而は、愈不可然奉存候、

天下之御政事ニ当座々々之御所置とは、別而恐入奉存

候、且又横浜一港ニ限り鎖し候而、崎・箱之両地は当

分通之事候得は、鎖港之詮有之間敷候、

〔答、横浜は江戸近辺ニ而、是迄殺害も多く、崎・箱は

遠國故殺害も少キ故、今成ニ而可宜、

〔此方云、崎・箱は此末如何被成候哉、

〔答、是ハ永久開港ニ候、

〔此方云、何分横浜計鎖港ニ而、外は永久開港と申而は

実之鎖港とも難申、只当座之人氣を以姑息之御所置、

幾重ニも嘆息之至奉存候、

〔答、此方計ニ而は何共決兼候間、閣老江も右之趣意可

申立候、

〔此方云、左様可仕候、

右之件々越前・宇和島は同意ニ候、

二月二日二条城一橋卿叩所 御用部屋上候間、総

裁松平^(直亮)大和守・閣老酒井雅楽頭・水野和泉守・有

馬遠江守列座、越前・宇和島も同席、

一橋卿江申述候趣意、又御答之次第逐一申述候処、

水野閣老云、御尤至極、拙者共も右通相考候得共、何

分人心不居合無致方次第二候、

一此方云、引移料は何百万両ニ御座候哉、

一水野云、何百万両は扱置、何百万々両ニ御座候、

一此方云、是は以之之外之次第、先日一橋卿へも申上候通

右様之大金を以は六十余州惣海岸防禦充分相整可申、

必右之方ニ御振替可然奉存候、

一水野^(云脱カ)肩をひそめ、御尤々々、実ニ正論ニ候、しかし

どふも無致方義、諸藩之居合六ヶ敷、込入仕合ニ候、

何分今一往熟考いたし、尚又評議可致候、

一有馬云、幕吏中ニも貴殿之論通申立候者も有之、実ニ

至当之事とは存候得共、何分人心之居合込入事ニ候、

一和州と雅楽とは、只成程く被申候計、

文書原寸 縦一六・八糶 横一九九・八糶

二六 松平肥後守より島津大隅守殿へ

書付廻達之件

一^(包紙ウツ書)島津大隅守様

一^(朱紙)玉机下

松平肥後守

一書呈上仕候、尔来弥御安寧奉賀候、然は元三条より家

来ヲ以差出候書付之由ニ而、只今春岳より相廻り候間、

春嶽手紙相添御廻申上候、御覽後早々御順達被成候様奉

存候、右之趣申上度如是御座候、恐々頓首、

二月四日

^(松平容保)肥後守

^(島津久光)大隅守様

尚々、空文候て、本書へ少々墨付候段可認直之処、

其仮差上候、略義失敬之至御仁免奉希候、以上、

文書原寸 縦一八糶 包紙原寸 縦三七・五糶

横八四糶

横四〇・三糶

二九 島津淡路守ヨリ島津久光公へ

綿船事件ニ付意見書

(包紙ウツ書)
「上

島津淡路守

封

一輪奉呈上候、時氣春寒去兼候得共、逐日陽発仕凌安御座候、先以

益御機嫌克被為在御滯京、其上先達而は

朝議参予

御推任叙被為蒙

仰、誠以鄭重恐悅至極奉存候、右御祝詞奉申上候、楮先般於横浜生麦一件応接無滯相濟一先安心仕候、此上は

公武 御合体海内一和、御国威相振候様之御所置被為在度奉祈候、就而は兼而懇願仕置候私上京之儀、最早御差

支無御座候間、都合次第可仕旨、先般能勢(佐上原藩儒、詞宮)二郎左衛門(佐上原藩家老)より被

り被 仰下、且樺山舍人上京之砌

尹宮様・近衛前関白様より上京仕候様御沙汰之趣被為在

其節茂勝手次第上京仕候様被 仰下、鄭重難有仕合奉存候、即疾速ニ発途可仕、其手宛仕候折柄、下関事件ニ差及、全弾丸ニ断碎候ニは無御座由ニ候得共、倉卒逃避之際失火、終ニ焼沈ニ暨、士分を始多分焼亡之由、実ニ不慮之御災難、絶言語奉忍入候、被為

聞召上候而は、嗚々御配慮可被遊と奉遠恐候、抑長藩狂暴之次第は可怪ニは無御座候得共、斯迄奇怪之所業ニは至間敷存居候処、実ニ言語同断実驚駭之至、不堪憤慢次第御座候、無左右問其罪は、当然之儀ニ御座候得共、皇国御危急之涯、無御抛次第被為在候得は、御小忍御大謀之御所置ニ茂哉と奉存候得共、何分不容易事件、人心動揺旁々御心痛可被遊と奉恐察候、楮私上京之儀、奉得御免許別而難有奉存候得共、此節ニ至り差当之御国難御到来ニ付而は、時ニ取候而相応之御用も可有御座哉、此涯上京之儀は見合、時機次第尽力仕度御座候、依之此度 樺山舍人并側役鳥居大炊左衛門と申者兩人差上申候間、下之関之御所置且相応之御用も御座候ハ、

被 仰付被下度奉願上候、右兩件奉伺候間、乍恐

尊慮之程、委曲御沙汰被遊被下度、伏而奉懇願候、尤御

国許江は先達而家老曾小川実を以奉申上候処、前文之次

第其御地江申上可然と之趣故、此段奉伺候、恐惶謹言、

二月五日 島津淡路守 忠寛

上

乍憚時候折角御保護專奉存候、扱又先般は樺山舎人・能

勢二郎左、右兩人御内々

御目通被 仰付、誠以難有、其上拝領物迄仕、鄭重

恐入奉存候、右御礼乍憚奉申上候、已上、

文書原寸 縦 一九・一種 包紙原寸 縦三三種

横二八二・七種 横四四種

三〇 野宮宰相中将ヨリ島津大隅守殿へ

幕府意見書提出ノ件

〔包紙ウツ書〕 一 島津大隅守殿 野宮宰相中将

緘 一

愈御安康方賀候、然は 幕府より言上之儀有之、今日ニ

も被差出候欵之旨、今朝前関白殿江内々御申入之由ニ候、

幸今日 関白殿初御集会有之候間、弥今日被差出候儀ニ

候ハ、唯今早々御差出之様致度存候、明日ニ相成候而

は、自然御評議可及延引候間、何卒宜御勘考御願申入候、

早々不備、

二月五日 野宮宰相中将

〔久光〕 島津大隅守殿

文書原寸 縦一七・五種 包紙原寸 縦二八・三種

横五三・七種 横四〇・五種

三二 野宮宰相中将ヨリ島津大隅守殿へ

幕府意見書提出ノ有無問合

〔包紙ウツ書〕 一 島津大隅守殿 野宮宰相中将

過刻以中条伝進候書状御披見と存候、右申入候幕府より

被言上候書取、弥今日差出ニ相成候哉、又ハ今日之処延

引ニ相成候哉否承度、御一筆貴報待入候、匆々不具、

二月五日

(野色) 定功

大隅守殿

文書原寸 縦一五・八糶 包紙原寸 縦二八・二糶
横四二・五糶 横四〇・五糶

三三 松平春嶽公より島津久光伊達宗城両公へ

伊達伊予守より島津久光公へ

一同会合之件

九二二ノ一

(封筒) 隅州君

予州君

用事

慶永

(封筒ウラ)

(朱・紙)

春暖之砌、先以愈御清安奉寿候、陳は明日は彼是評議も可有之儀ニ付、午刻登 营ニ候ハ、可然と一橋より昨夜申越候間、各様ニも其御思召奉願候、左様承候、僕旅館江午刻前いつニ而も御責臨被下度、御相談被下候事無

差支候、此段奉申上候、頓首、

二月五日

春嶽

(島津久光) 双松君
(伊達宗城) 对翠君

文書原寸 縦一七・二糶 封筒原寸 縦一七・六糶
横 五九糶 横 四・八糶

九二二ノ二

(包紙ウラ書) 大隅守様

伊予守

兩次之責翰忝奉拜見候、愈御多祥恭賀々々、先々敬承仕候、僕午時頃春邸へ参候様可相成候、尤早く参心得候、今夕ハ陽明殿へ出候心得御座候、頓首、

即時

(伊達宗城) 長面

(島津久光) 大芋公

文書原寸 縦一六・八糶 包紙原寸 縦三〇・四糶
横一九・六糶 横三七・五糶

三三 伊達伊予守より島津久光公へ

一 橋公旅館へ参集ノ件

(封簡)
一 双松公

弄鑑

貴報

(封簡ウラ)
一

爾後催春光候、愈御清穆奉拜賀候、(松平慶永)扱春岳より伝達ニ付、

只今橋館へ出候処、

貴君御所勞ニ付御来駕難被成旨、春岳方へ御申聞相成候

由頗失望、のみならず緊要事件有之候故、何分御勉強為

皇国御出御座候様、僕より重々御申通候様御頼ニ付申上

候、尤万一只今より橋館へ早速御出ハ六ヶ敷候ハ、夕

景両殿下方参集ニ御出候ハ、御談合整候間、無止ハ右

ニ而も宜敷との事候条、吳々於僕奉渴望候、今夕は何分

片付度ものニ而候処、

貴君御不参にてハ甚閉口之至、御承知所希候、両端御取

極一寸御報可被下候、恐々頓首、

仲春八日

(島津久光)
双松明公

侍史

(伊達宗城)
弄鑑

文書原寸 縦一六・二寸 封筒原寸 縦一八・五寸

横五一・四寸 横 四・七寸

三三 伊達伊予守より島津久光公へ

官武会議ノ件

(封紙ウラ書)
一 双松英明公

内用

弄鑑

拜晤之末愈御清安奉賀候、乍然御勉強御参会候御苦勞奉

存候得共、尤兩役衆へ云々漏泄之憂防得候ハ、全々御鼎

力故ニ而、總裁始黙々(略)倍従と天淵、裨益不能言奉存候、

○尹宮御退去相済、僕御暇申上候処、(山内)容堂ハ依然

五公之前ニ而吞居候、恐察にハ

尹宮ハ一夜夜御暇之義説得の由内話承候間、残り

五公を説候半かと察候、扱又急々申上度義も有之候間、

(大久保) (高橋)
市藏・猪太郎杯之内御差越被下度奉希候、頓首、

二月九日

文書原寸 縦二六・八糎 横五〇・八糎

三三 伊達伊予守ヨリ島津久光公へ

近衛家訪問ノ件

(封紙ウツ書)

「島羽林明公

内用

伊予守

封

今朝は意外春寒砭肌、先以愈御安榮奉雀躍候、扱昨夕ハ御内々御使ヲ以

大樹公より御菓子・鮮魚拝領恐入難有奉存候、右為御礼

二条へ登城、閑老へ得面晤候節、水野・有馬(忠精)より一昨(道徳)

日

貴君へ春岳兄(松平)ヲ以御相談申置御拝賀一件ハ、

陽明家へ御説得何分希度、尚僕にても尽力可仕との事候得とも、最早帯刀等(小松)ヲ以御申遣之義と奉存候、一応相伺、

若未タ被仰遣候ハ、明夕御一同ニ参殿仕候而ハ如何可有御座哉、僕不及喋々とも、

貴君御説話にて充分之義と奉存候得共、前文之都合故陳述候、恐々頓首、

春仲初四

亦云、昨朝家来方へ紀藩里見二郎・水藩芹沢次郎左衛門と申者参候処、二郎ハ頓暴論書生と相見得候由如何之人物に候や、猪太郎其他周旋方にてハ承知之ものニ可有之、御尋被仰下度候、已上、

文書原寸 縦一六・八糎 横六七糎

三三 土持平八ヨリ大久保一藏へノ報告

長崎貿易ニ付雇入船ノ件

(端裏朱書)
「甲子二月十二日

土持平長州聞合」

防州別府浦ニおひて綿積船焼捨、才領人致殺害候風説等有之、先達而右為聞合、別府最寄室積江罷渡承合申候処、外ニも三艘同様之始抹有之形ニ候様(船渡、之風説之)諸浦

江流込、乍然突留証抛も無之、事實分明不致候付、是非実地ニ踏入、存分致探索含ニ而一先彼地之動靜旁相候処、諸浦殊ニ浪士共出張、就中士分之者他所より致上陸候ば則見疑を掛、是迄段々僮暴之致挙動候儀共多々有之、然折柄そ忽ニ手を付候ば、故障付廉も可有之哉致猶予、一旦曳取、此表諸国船間屋或は商船共江相計、段々品を替手を尽承合候処、防州別府加徳丸船頭松右衛門御雇入相成、綿千百本兵庫ニおひて積入、久見崎船頭大谷仲之進上乘ニて、長崎江致廻船賦ニ而去十二月廿八日兵庫より致出帆、先月十二日別府江致入碇、刻限旁不相分候得共、同夜何方者共不相分浪士共五六人列ニ而、鉄棒携本船江乗付、直様船之看板江揚、最初船頭松右衛門招呼、才領人罷居候哉否相尋、寝入候段相答、用事有之是等江可参旨申聞、其通仲之進儀不計も看板江出張たる処、其節之申分、何様いたし候哉、不相分候得共、両三人ニ而鉄棒を以無体ニ散々致打擲、苦痛之声相立候物音ニ驚、船中共俄ニ騒立候

場合、一兩人看板より下り、水手共は可助置候付、銘々自物等取卸候様申聞候得共、仰天之余取ものも不取得逃去、海面江飛入游渡候者も有之致分散、然間右仲之進首搔落、在合之箱江相包持卸、死体海中江突流し、且又船頭松右衛門召搦、一通之致折鑑叱放、左候而碇綱等難払、釜屋之燃木取出し、積荷之綿江致差火焼払然折同所浦人共船出火と見受、段々駈付候者も有之たる形ニ候得共、右浪人共異暴之仕業致恐怖、夫形見捨置候半、外ニ其場立障候者も無之、然処無間も浪士共早船江乗移、同夜致出帆、其後行方不相分、右之形行大庄屋より役筋江遂披露候処、人相書を以段々評議有之、右浪士共語音旁聞合相成、所之者共より申出候は萩家中并肥後、又は上方風之言葉も有之、諸国より之取集者共ニ而は無之哉、不審相掛候との風説等有之、併一休暴論ニ募候国柄ニ而、前件人相書等を以所僉儀有之とは、諸国響合之為申触候致も難計、右等之次第弥其筋実正共難見請様御座候、

一線綿六百七拾五本積入、防州大島郡小松之住吉丸船主
船頭平治・上乘岩元仁之助、右同千弐百八拾壹本、同所
小松之神宝丸船主船頭久吉・上乘川添清六、同千弐本・
割昆布四拾俵、同所小松之蛭子丸船主船頭市郎兵衛・
上乘渡辺惣太郎、右三艘銘々致上乘、兵庫より本行積
入、長崎江廻船掛、先月何日頃欵共不相分候得共、在
所大島郡小松江致汐繫、前条別府加徳丸松右衛門船異
外之難ニ逢ひ候儀共承得、態と差扣致滞船候哉、又は
船留ニ而も相成候哉、旁之次第は不相分候得共、小松
宰番より右形行山口城下役筋江伺越相成候処、藩中伊
東正九郎・小田源五左衛門・林何某と欵申者三人、右
三艘江銘々一人ツ、為警固乗付、下之関迄送越、出帆
見届、其形行山口江可申出旨、役筋より申渡候由ニ而、
小松より何日出帆共不相分候得共、先月廿九日下之関
を同所福浦江致碇船、去三日右三艘俱無異儀出帆いた
し候段承得、猶又付役中村喜寛を下之関伊崎付船之防
州小松之問屋坂次郎方江差遣、直ニ承合候処、右為警

固乗越候伊東正九郎外弐人事、右船々出帆碇ニ見届置、
直様陸路より山口之様致通行候由、然は福浦迄送越候
趣意、何様候欵、是又申承合候処、前段別府ニおひて
異変致到来候折柄之事故、万々一此末重而右体之儀共
有之候而は不相濟訳柄と、段々評儀有之、旁懸念之処
より右三人乗廻相成、左候而右始抹ニ付而は、役々共
別而及心配候段、三人之間より内々坂次郎江相洩候由
ニ付、猶又外ニ内蜜承合候処、前条不相替承得申候、
一右付先達而室積ニ而承得候ニは、加徳丸之松右衛門船
外ニも同様焼捨候風説等有之、右は如何様其砌大島郡
小松江致汐繫候節、一旦宰番より山口江伺越差留置候
哉、夫を加徳丸同様之取扱相成候哉ニ申触たる事共候
半、全無形事ニは無之候得共、虚説と相見得申候、然
は災難ニ逢ひ候は、加徳丸松右衛門船ニ而、右は此内
之風説通、弥別条無御座候、外船々は無難之形ニ相見
得、勿論肥後之鶴住丸船頭文吉・防州大島小松之政栄
丸船頭金兵衛両船は、如何様右別府之変事承及候欵、

洋中より乗戻上坂いたし、且又堺之宝徳丸船頭源介・

同所之金栄丸船頭元蔵両船は、大坂より長崎江致直乘、

去ル三日下之関致通船候形ニ相見得候付而は、大坂積

入元并長崎表之届先等双方承合候処、去十二月廿日以

来、都合拾壹艘御雇入相成、右之内別府之加徳丸松右

衛門船老艘横暴ニ逢ひ候迄ニ而、外船々無難乗抜、又

は乗返し候船も有之、然処大坂住吉丸船頭源次郎并防

州大島郡小松之住一丸船頭清蔵両艘は、中途江滞船候

欵、疾長崎江致着岸候哉、いまた何れ之筋相分不申候

付、猶又手を付置申候間、相分次第追々何分可申上候、

此段申上候、以上、

子二月十二日

土持平八

大久保一蔵殿

文書原寸 縦一六・一極 横四五〇・八極

坊城大納言野宮宰相中将より松平春嶽

伊達伊予守島津大隅守殿へ

御召状

〔包紙ウツ書〕
松平春嶽殿

伊達伊予守殿

島津大隅守殿

写済

坊城大納言
野宮宰相中将

緘

差急ぎ御用被為有候間、唯今早々御参可有之

御沙汰候、仍申入候、一橋殿江も申入、御伝達可有之候

得共、御急ニ付、尚又申入候也、

二月十三日

坊城大納言
野宮宰相中将

松平春嶽殿
〔慶永〕

伊達伊予守殿
〔宗城〕

島津大隅守殿
〔久光〕

文書原寸 縦一七・四極 包紙原寸 縦二七・五極

横五〇・四極

横四〇・四極

三六 坊城大納言野宮宰相中将ヨリ島津大隅守

殿へ

即時參朝ヲ促ス

(包紙ウツ書)

島津大隅守殿

坊城大納言

野宮宰相中将

写濟

緘

御安全珍重存候、抑只今早々御參可有之申入候間、無程御參存候へ共、唯今松平春嶽被參候ニ付申入候、早々御參可給候、仍申入候也、不備、

二月十三日

野宮宰相中将

坊城大納言

島津大隅守殿

文書原寸 縦一七・四糎 包紙原寸

横四〇・四糎

縦二七・五糎

横四〇・六糎

三七 大久保一藏ヨリ落地へノ報告別紙

一橋慶喜幕政補翼ノ朝命

大樹公被為蒙

御懇命御請被仰上候得共、不容易御時節ニ付、一橋様御

政務補翼之儀被

仰出、十分ニ助力有之様被

仰出候事、

右は昨日飛鳥井家より為御知相成候間、一昨十一日

御達相成候半、会人今日を機会ト申義、右等之事欵

ト相考申候、

文書原寸 縦一五・九糎 横三一・五糎

三八 松平肥後守より島津大隅守殿へ

書付廻達之件

一島津大隅守様

松平肥後守

(包紙ウツ書)

一書致啓上候、春雨御座候処、弥御安栄被成御凌珍重之

至奉賀候、然ハ春嶽より別紙廻達差遣候間、則御廻達申上候、猶御順達被下度奉存候、右申上度早々如斯御座候、恐惶頓首、

二月十四日

松平肥後守(容候)

島津大隅守様

猶以御用多ニ付代筆申付申上候段、御仁免被下度奉希候、以上、

文書原寸 縦 一八種 包紙原寸 縦二七・四種

横六〇・二種 横三八・七種

三三 坊城大納言野宮宰相中将ヨリ島津大隅守

殿へ

即時参朝ヲ促ス

島津大隅守殿

坊城大納言

野宮宰相中将

緘

写済

弥御安栄珍重存候、然ハ今日被為召候得共、不参被致候

趣ニ承候、併参予御用候間、乍御苦勞何卒被繰合、早々御参可給之旨関白殿被命候、仍申入候也、不具、

二月十五日

野宮宰相中将(定功)
坊城大納言(後克)

島津大隅守殿

文書原寸 縦一七・五種 包紙原寸 縦二七・七種
横四四・八種 横四〇・四種

三三 近衛忠房卿ヨリ島津少将殿へ

長州説客ノ件

島津少将殿

几下

忠房

内密用早々

内々早々

島津大隅守殿

几下

忠房

緘(朱) 緘(朱) 緘(朱) 緘(朱)

口述

弥以御勇猛珍重ニ存候、抑長州説客一条ニ付、昨日来彼

是致大ニ心痛致候、何分以 勅命被 仰出候へハ、尚更

説客も行届候半欵、其上一端大樹へ従

主上御沙汰被遊候義ニも候へハ、旁是ハ以 勅命説客被

仰付候方可然、下官ニハ存候、其許如何被存候哉、内々

御所存承度候、今日ハ各参集、其許ニも何レ御参之様存

候、一橋・春嶽之処六か敷実ニ困り入候、其許ニハ何レ

御参在之、御尽力御頼申度候、荒々要用計如此候也、

二月十五日

二白

呉々今日ハ是非くくく御参在之候様存候事

文書原寸 縦一八糎 包紙原寸 縦二八・四糎

横九四糎 横 三九糎

四 四条柳馬場辺ニ張紙ノ久光公罪状

九三三ノ一

当二月五日芝赤羽根橋江張紙之写

方今我国体を汚、姦賊世ニ多といへとも、其罪甚敷ハ老

中・市中・町交易町人之三也、此輩は実ニ国を売賊臣、

神明鬼靈之不容大罪人也、故に我輩今度大に義旗を挙て、

攘夷前に先此国賊を伐戦シ、令被天罪と欲す、然れとも

玉石共ニ碎くに忍ひず、故に機を斯に泄すもの也、後ハ

我大兵五海道より浸伐せざる先、身に罪なきもの共は難

を遠方にさけて、連座の死をいたす事なかれ、激如件、

義旗頭

大内左近太郎

毛利藏人

萩野治左衛門

大木戸八郎

足立九郎

筑紫虎太郎

神尾武人

江戸中諸人江

九三三ノ二

当二月朔日四條東詰燈籠前ニ建札、杉九寸巾板ニ釘

ニ而打付在之候文面之写

近頃会津家臣共ニ幕府新徴士と唱へ、根元無頼之者共時

々市中及在々へ立入、憂国正義之浪士杯と偽り、無体ニ

金錢を無心申掛ケ、容易許諾不致時は、拔身を以相威シ、

夜中道路ニ而故なく人を令切害、或は衣服所持之品等奪

取、其身情弱奢侈を極る而已ならず、妓楼又は料理店へ

登り候而も多く非道之挙動有之処、幕府迄無律藩之輩、

前条之悪事を悉く処置仕面々之所業ニいたし有之は、名

聞を可汚奸計とを以処々へ不埒之高札を建、御上を奉欺

応疑惑せしめ候段、重々不届ニ付、追々ニ稠敷取調ニ及

候間、孰も心得違致間敷候、以後奸吏ニ令荷担、朝恩を

令忘却族於有之は、蔽科可為者也、

文久四年二月朔日

五畿七道

二万八人佃士

九三三ノ三

乍延引張紙之写

当十五日六日頃四條柳馬場辺ニ張留之由

島津三郎

一恐れ多くも上

天朝を奉輕蔑、下不構万民の困窮を、中川宮を手先ニ

いたし、己の奸謀を逞条、

二表へ夷人打払と申て内々交易致条、

但赤銅・錢・茶・油・綿、其他色々、

三不忠之大名と同腹いたし、天下大乱の基を生ずる事、

四御国之御為を考へ候有志の者共を驅逐する事、

五叛逆之事、

右罪状の外雖有之略畢、

子二月

有志之者

九三三ノ四

先達より牢舎いたし罷在候浪士、昨日牢内にて死罪ニ相

成候名前左之趣承り申候、

波谷伊与作 酒井伝次郎 尾崎(健成)太郎 安積五郎
 岡見留次郎 田所拳次郎 中垣謹三郎 荒卷半三郎(半)
 伴林六郎(光平) 尾崎濤五郎(純) 鶴田陶月 江頭権八
 安岡斧太郎 土井佐之助 島村幸吉(省吾) 長野一郎
 森下儀之助 安岡嘉助

綴原寸 縦二五・五種 横一六種 四枚

〇九二四 幕府ヨリ久光公へノ令達及書添

御用部屋へ出頭ノ件

二通

九二五 伊達伊予守より島津久光公へ

長州一件

〔包紙ウツ書〕 宇宙大依頼双松英明公 宗城
 密呈

〔封紙ウツ書〕 双松明公

弄鉄押

昨日は不量得拜眉大慶仕候、尔後愈御安米奉拜賀候、然
(松平春徳)
 は鼻兄より両通御廻し可申旨ニ付差出候、尤内密故其御
 心得希候趣也、今日は閑暇ニ相成、午後梅津・法輪・金
 閣辺参廻可申、何等御緊要候へ、暮時迄ニハ罷帰候条
 申上置候、恐々頓首、

仲春十九

尚又長悔悟之末敵ニ処置いたし候様可有御座、人名・

藩士・浪徒共不分明故、僕心得迄ニ為御調御密示被

下度、昨日御話之開港云々悪口之張紙写一見仕度候、

已上、

文書原寸 縦一六・八種 包紙原寸 縦二八・四種
 横四八・四種 横 三九種

九二六 佐久間象山ヲ京都ニ召サル、朝命

〔端裏朱書〕 甲子二月廿一日

真田信濃守家来佐久間修理儀、御用之品も有之候間、上
(幸教)
 京致し候様御達可被成候、此段申進候、以上、

二月廿一日

連名

板倉周防守様

(勝靜)

井上河内守様

(正直)

牧野備前守様

(忠恭)

尚以、頭痛氣ニ付代筆申付候段、御用捨可被下候、

以上、

文書原寸 縦一七・八糎 横五三糎

猶以、佐久間修理儀、先年御咎被仰付候以後、御免

之有無当地ニ而は不分明ニ付、いまた御咎中之儀ニ

候ハ、御咎御免之上、早々上京候様御達可被成候、

以上、

右之通申遣之、

文書原寸 縦一六・六糎 横三一・六糎

松平肥後守ヨリ久光公へ

拝啓仕候、春暖之節御座候処、弥御安清可被成御座珍重

奉存候、然は別紙兩封大藏太輔(松平春藤)より廻達差越候間、差上

申候、御落手可被下候、右申上度早々如此御座候、頓首、

二月廿一日

(松平容保)
肥後守

大隅守様

将軍ヨリ茂久公へ刀及脇差賞賜

(包紙ウラ書、朱)
「甲子年 将軍より」

(端裏銘)
「松平修理大夫江」

(島津茂久)
松平修理大夫

年来国家之御為藩屏之任を尽し候段

御満足ニ被

思召候、依之御差之御刀・御脇差被下、弥励精可相勤候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二四〇ノ

一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦二一・一糎 包紙原寸 縦三二・四糎

横 四七糎 横四六・二糎

三三 將軍ヨリ久光公へノ御沙汰書

鞍置馬下賜ノ件

(端裏紙)
「島津大隅守江」

(久光)
島津大隅守

年来国家之御為励精尽力致し、当節之御場合ニ至候段、御満足ニ被 思召候、依之御鞍置御馬被下、愈精勤可致候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二四〇ノ
二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦二一・二種 包紙原寸 縦二七・五種

横四九・四種 横三九・四種

〇七〇 將軍ヨリ鞍置馬下賜ノ辞令書 五通

三二 伊達伊予守より島津久光公へ

朝議参列之件

(封紙ウツ書)
「双松明公」

内用

对翠

昨夜之御廻達照手仕候、愈御安勝奉大賀候、扱今夕ハ御参トハ奉存候得共相伺候、万一御不参に候ハ、是非

御勉強御参有御座度、在京同席も被為 召候、

貴君御欠席にてハ、又一日之因循ニ相成、且ハ

廟決甚六ヶ敷

公武御為伏而奉希候、恐々頓首、

二月廿四日

文書原寸 縦一六・八種 横四三・三種

三三 長州末家大坂へ召ノ朝命

久光公手写

(端裏朱書)
「甲子二月」

朝廷より御達留

末家一人并吉川監物・家老一人等御用有之候ニ付、大坂

表迄罷出候様、(毛利慶親)長門宰相江

御沙汰候事、

但着坂候ハ、早々御届可有之事、

別紙之通被

仰出、執奏勸修寺家へ相達候間、幕府よりも早々御達有之候様被

仰出候、仍申入候事、

二月廿五日

野宮宰相中将

飛鳥井中納言

坊城大納言

一橋中納言殿

幕府より御達写

松平大膳大夫家来

末家一人、吉川監物并其方家老一人等御用有之候ニ付、

大坂表迄罷出候様

御所より被 仰出、且又於

公儀も御用有之候間、早速上坂可有之候、尤大坂表着候

ハ、早々相届候様可仕候、

文書原寸 縦一六・九糎 横四三糎

久木山泰藏ヨリ大久保一藏へ 合二通

外国貿易ニ関シ浪士等暴行ノ報告書添

大久保一藏様

久木山泰藏

九四三ノ一

御機嫌能被成御勤務恐悦御儀奉存候、然ハ両子婦京後相
変義も探得不申、少々相分候儀御座候間、自分覚書之假
差上申候間、書法不敬之罪御寛容被下候様奉願候、頓首
々々、

久木山泰藏

二月廿七日

大久保一藏様

左右

文書原寸 縦一七糎 横二九・五糎

九四三ノ二

梅檀木橋南詰西へ入所、かりがね屋兵藏宅へ横濱商人伊

勢屋平兵衛旧冬ヨリ止宿、二月廿二日夜浪士九人兵藏宅へ押入、平兵衛并手代呼出、九条村茨住吉社近辺在家へ連レ越、金子五百兩指出候様申掛、当夜二百兩指出シ残り三百兩近日指出候処請合候間、浪士共兵藏宅迄平兵衛并手代相送り、金子二百兩請取、右之次第固クロー留置浪士罷帰、翌廿三日夜半兵藏宅へ浪士五人押入、平兵衛他行中手代一人止宿、右ヲ牽出シ斬首、下大和橋北詰へ梟首、外ニ手代一人アリ、平兵衛ト共ニ難ヲ遁ル、

右平兵衛外夷へ貿易、物価沸騰、諸民困窮ユヘ天誅ヲ加ルトノ事ナリ、

巷説云、平兵衛油并綿ヲ買円メ外夷へ交易、近来油価貴シ、大和橋近辺油店多シ、故ニ大和橋へ梟首スル者歟、

廿五日朝長邸ヨリ士四人出立、国許へ差越、同夜長邸ヨリ長府邸へ差越、此方既ニ出立致サセ、其御方如何、此方ニモ国許へ既ニ差立、然トモ未舟ハ浮ケ申サスト答ナ

リ、對話中ニ亡フルヨフナコトハアルマイト、戸外ニ少シ聞へ候由、同夜長邸ヨリ士一人、従者アリ、高野山へ差越、右ハ野山出火アルニヨツテナリト、

右野山出火ノコトハ未全風聞コレナク、

廿六日東御堂前梟首、右側へ士人兩人割腹斃レ掛札アリ書面左ノ如シ

大谷仲之進

右之者事、去冬泉州堺より長崎運送として莫大之綿・油其外買込、積下候趣相聞候付、此度於周防国別封浦、敵重及糺明候処、外夷交易之ため積下候段、遂一及白状、豈計、薩藩

(島津齊彬)

順聖公以来尊攘之大義を相唱、天下之人心奮起いたし候

程之処、只今ニ至、先

公之深旨を忘却し、外夷と令交易候段、全諸役人貪欲無恥之私計ニして、上は十余年来日夜震襟被為惱、断然被仰出候攘夷之

聖衷を蔑ニし、下は諸品私底物価高直ニ相成、人民次第ニ困窮ニ相迫りしをも不顧、内ハ神州之国力を疲弊せしめ、外豺狼ニひとしき夷賊無厭之欲ニみてんとす、其罪惡天地ニ不容、神人共ニ怒候、依之其品焼払、船中ニ居合候奸吏を誅、世間交易する者を戒めんため此令梟首者也、

我等兩人所存有之、国許致脱走居候処、此度於泉州堺莫大之品物買込令交易候段相聞候付、覘ひ加誅戮候、全是より交易する者心得之ため改心いたし、乍恐攘夷之^(必脱カ)叡慮相つらき全致割腹而我等赤心天地神明照覽を賜らん事、謹而祈者也、

中国浪士

水井^(通二)精一

山本誠^(朝正)一郎

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二四三ノ一号文書ノ一部ト同文ナリ)

雨風やちるともよしや桜花

君のためなら何かいとわん

山本誠一郎

源朝正

数あらはなをあくまでもおもふ身の

はかなくきゆる野辺の朝露

水井精一

源通一

一羽織之肩入ニ、頼三樹三郎飽命辞相認、林庵書と有之

候、

一右同裾ニ

大君は皇座の山のさくら花

八重九重ニ咲そにはふる

勝書と有之、

綴原寸 縦二四糎 包紙原寸 縦二四・五糎

横一七糎 四枚 横 三四糎

小笠原家留守居山田平右衛門覚書

長州一件

(編纂朱書) 甲子二月廿八日

此式通上包ミ、小笠原大膳^(志幹)大夫留守居

山田平右衛門と有之

春暖相催候処、弥御堅固珍重存候、然は過日山名次郎兵衛殿為御使者、合図打被相止度段御相談之趣、早速申達候処、被入御念候儀委細被致承知、元より大里表之儀は御領分御借地之儀、殊ニ昨年

勅命も御同様之振ニ有之哉ニ付、猶更御一和御戮力ニ無之候而は、皇国之瑕瑾ニも可相成儀ニ付、以来弥以御親睦、諸事無御覆藏御相談、何れ共

天朝 幕府之御趣意 御遵奉ニ而

皇国之御為、誠忠被相尺度儀ハ申迄も無之儀ニ付、任御相談合図打之儀被相止候、此段為御答以御使者申入候、

覚

一秋表本藩之内三人申談之上、御家中申合京都表へ罷出、

公刃之御下知ニ随ひ可申、尤人数相揃候上は、殿様江

公刃御下知ニ御随ひ被申候様可申上旨、三人発頭人ニ

相立候段、本藩之内より奇兵隊江致内通、奇兵隊之内五人秋表江罷越、右三人争論之上相互ニ切死、八人共深疵ニ而即死致し候、尤酒狂之上争論之由、風説致し候得共、内実は右之通意味有之趣ニ御座候由、当月十一日秋表ニ而右之次第ニ付、いづれも取捨ニ相成候趣ニ御座候、

一長州表異船手当は専ニ候処、当正月より当節は、第一

小倉先陣、筑前・肥後・薩州一同押寄可申趣ニ而、下

雷火道具専用意有之候事、

但芸州表よりも右同断有之趣ニ而、内用意専らニ候

事、

一京都御公家衆之内より内通節々有之趣ニ御座候、

一小倉表之様子、下之関より委敷申出候事、

但小倉御家中、着船・乗船之手前一々下之関より注

進申出候事、

一筑前表之様子委敷相分り、右隠密之者博多町へ罷在候

趣相分、筑前表召捕手当相成候事、

一地雷火能出来候分へ、六拾間又は百間位卷丈程打上申候、尤不出来数々御座候事、

右之通風説之趣申上候、以上、

二月廿八日

文書原寸 縦一六・五糎 横四九・五糎

伊達伊予守ヨリ島津久光公へ

伊予守来訪ノ件

(封紙ウラ書) (島津久光)

双松公

(伊達宗城) 弄鐵拜

春光暢迪人意屈憫之時候候得共、愈御壯康奉拵賀候、扱今夕ハ得閑暇候間、参館仕度、御否被仰下候様希候、恐々頓首、

春仲念八

尚以、七時過出可申候、已上、

文書原寸 縦一六・八糎 横二九・五糎

伊達伊予守ヨリ島津大隅守殿へ

一橋邸訪問之件

(封紙ウラ書) 双松英明公

弄鐵拜

昨夕は寛々心緒吐露仕、憤悶之胸次快爽、大慶此事奉存候、尔後愈御清穆奉拵賀候、明夕ハ弥一橋邸倍從之心得候、扱此間之張紙写は昨夕松備書付之中抜書別紙、御返却奉希候、恐々頓首、

春仲小尽

尚又今日尹宮銅駝之御都合承度候間、猪太郎被遣度

奉存候、已上、

文書原寸 縦一六・八糎 横四〇・七糎

御用部屋へ出頭ノ幕命

(縮寫朱書) 甲子

島津大隅守 (久光)

御用有之節は御用部屋江罷出候様可被致候事、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二二九号

文書ト同文ナリ）

文書原寸 縦一五・八糎 横二六・八糎

○六九 横浜鎖港ニ付久光公ヨリ閣老ヘノ意見書

○七〇 京都ニ於テ久光公ニ関スル落書 二通

禁門護衛京都市中其他取締ニ付幕府ヨリ

朝廷ヘノ上申

御所九門内外市在共、御警衛向勘弁可申上旨、御沙汰之趣、奉得其意勘弁仕候処、近年無御抛ニは可有御座候得共、諸大名多滞京ニ付而は、家来共多人數在京罷在候より混乱仕候得は、却而御取締方行届兼候間、諸大名は夫々帰国被仰付、当地屋敷有之面々は、留守居之外家来多人數滞在無之様可被仰付哉ニも可申上処、

方今一時ニ諸大名御警衛御免帰国被仰出候御時節ニも至り兼候間、先ツ九門内外市在御警衛之儀は、是迄之通御据置、形勢御見合之上、九門内外市在諸大名御警衛御免被成、九門内は守護職・所司代ニ而御警衛、九門外は三ヶ年代リニ而交代、寄合之者江被仰付可然哉、其余見込之趣廉書仕申上候、

一御所九門出入之儀は、兼而判鑑差出置、鑑札を以通行為致候様、向々江御達可被成候、

一当地七口之儀は、兼而御警衛之大名江被仰付、番所・柵門取建、敵重ニ入京之者相改、暮六ツ時限ニ而右柵門占切、其後無抛通行之分は猶更敵重相改候様可被仰付、右口々番所ニ而入京之者改方之儀は、今般御上洛御留守中江戸表御取締同様、諸家々来は主人、百姓・町人は領主・地頭等より、兼而印鑑差出置、調印書付を以出入為致候様、万石以上以下并諸国支配御代官等江御達相成、尤右印鑑之儀は、万石以上以下共、所司代江差出候様可被仰達哉、

本文之通番所・柵門取建、入京之者相改候得は、

御取締も相立可申奉存候得共、右七口之内ニは左

右田畑有之、柵門取建候而も其詮無御座、其上当

地江立入候間道も数多有之候得は、地理等夫々取

調候上ならてハ、錠と取極申上兼候、

一京師逗留之諸家々来・足輕・中間ニ至るまで、名前・

年齢相認候人数帳、町奉行所江差出置、異同有之候ハ

、屹度相改差出候様御達可被成哉、

一市中御取締之儀は、火付盜賊改同様之御役十人程被仰

付、老人江組同心三拾人ツ、御預相成、昼夜嚴重ニ見

廻り、怪敷者は速ニ召捕、町奉行江引渡候様可被仰付

哉、

但十人之者は夫々持場相定昼夜相廻、持場は勿論

他之持場ニ而も怪敷者潜居候儀承候は、聊無斟酌

召捕候様被仰達候ハ、相互ニ勅合御取締ニも相

成可申哉と奉存候、

一市中之儀は、洛中は一町毎ニ大体木戸門有之候得共、

端々は木戸門無之ニ付、夫々今般為取建可申奉存候、

乍去木戸門取建候而は、実ニ差支候向は其假差置、尤

夜四ツ時限木戸門占切、其後往来いたし候者は、其節

々明ケ通させ候様、触書差出候様可仕哉、

一寺社・旅籠屋渡世之者并町家ニ而、帯刀人一宿為致候

ハ、其段可届出、万一窃旅籠宿為致候儀相顯るゝにお

ひては、差置候当人は勿論、寺院本寺市在は所役人迄

も急度咎可申付旨、触書差出可申哉、

但本文触書差出候上は、不屈之者御座候ハ、当

分之処、苛酷ニ迫候様ニも相成不申候半てハ、御

取締難立奉存候間、右之心得を以相伺候様可仕奉

存候、

一町奉行組之儀、兩組与力・同心昼夜見廻差出、怪敷者

有之候ハ、探索召捕候儀勿論、此上嚴重可申渡と奉

存候、

一異変之節は、兼而御警衛并援兵被仰付置候者は、其假

御差置候上、猶大和・近江・丹波・若狭国之大名江早

速出京御警衛可致旨、兼而可被仰付候哉、

右之通当地御取締可被仰付哉、猶御賢慮御座候様仕度
奉存候、以上、

二月十一日

澁川播摩守^(具奉)

別紙見込之趣申上候通、諸大名之向御警衛御免掃相

成候共、^(二条邊) 関白殿・^(忠徳) 近衛殿・^(前彦親王) 中川宮等江諸侯藩士為警衛

入込居候而は、矢張弊害無之とは難申上、去とて警衛

被止候儀ニは相成兼候間、從関東為警衛講武所之者一

ヶ年交代被仰付、右家々江警衛被仰付、為取締頭取兩

人在勤相成候へ、御取締相立可然哉と奉存候、以上、

澁川播摩守

一京都口々之固メ嚴重可致事、

但是迄は七口之定めニ候得は此度変革、七口が十

口ニ相成候共、京地出入之要路、地形ニ寄、陣屋・

砲台等取建候事、

一講武場は武備引立之場所故、今度新規取建候事、

但鎗劍場一ヶ所、砲術場一ヶ所と致、鎗劍は地役

人之者共住居最寄之方可然候間、二条辺ニ而地処

相撰、砲術之方は訓練等場広之所ニ無之候而は稽

古難行届候間、鳥羽・竹田両街道辺ニ而可然場所

取極、尤鎗劍・砲術場共詰合之諸藩臣も稽古等ニ

罷出不苦候事、

一市中取締之為、火付盜賊改様之役新規申付候事、

但五六千石位之者兩人程頭ニ申付、組人数も相当

ニ相預ケ、警衛向相心得、浮浪之者取締も心得可

申事、

一大目付老人・目付兩人ツ、年々交代相詰、取締向心得

可申事、右之外猶手順を逐ひ取締向相立候事、

一京地講武所御取建之事、

但劍鎗は

御所又は、御城近辺、砲術は鳥羽・竹田・伏見三

街道之内江御取建、其街道之御固をも心得可申事、

右講武所奉行・同頭取・各術師範役等は、家族召

連引越、無年限相詰世話心得并五百俵以下小普請

四百人程、一ヶ年勤番、半は充交代、右住宅は講武所御構内江御取建之事、

右講武所奉行始

天朝御警衛之為ニ被差出置候御趣意ニ而

行幸之節は勿論、宮・撰家方等御出行之節も為警固メ

罷出候積、

一 九門御警衛は寄合ニ被仰付可然事、

但近国ニ而五千石以上之者江被仰付交代、寄合も

御取交之事、尤右御役屋敷京地江御取建之事、

一 京地口々御固は、当時七口と名目相立居候得共、場所

之模様広狭ニ寄、七口より十口ニ相成候共不苦存候間、

口数ニ寄当時被仰付置候七家之外、猶近国之諸侯江増

被仰付、一口ツ、持場を定置可申事、

但地形ニ応、陣屋・胸壁・砲台等御取建、大砲御据

付、弾薬等御貯相成、小銃は自分道具相用可申事、

一 火付盜賊改様之御役新規被仰付、御役名は京都衛士奉

行杯と唱、兩人も可被仰付事、

但是は寄合より被仰付、御役扶持三百人扶持程も

被下置、火消役之勤之如く出火之節も馬印為持致

出馬、組之者召連非常巡邏いたし可申、右組は和州

十津川郷之者五百人程ツ、も一ヶ年詰交代之事、

江州甲賀古士も多人数は無之候得共、御用相勤度

旨兼而願書も差出置候間、右之内御加入、壬生村

浪士も御差加ニ而も可然、尤平常は市中見廻り、

講武所江罷出稽古いたし候事、

一 市中町人共之内、有志強壯之者撰候ハ、町数二千程

も有之候間、多分之人數可集候間、右ニ而商兵を取建

銘々一刀を許し、官印有之棒を与へ置、町奉行組之与

力懸りを定置差配可申事、

一 大目付老人・御目付兩人、支配向共一ヶ年詰、京坂之

間ニ往来いたし、御締向心得可申事、

一 平常講武所ニ而武芸修業、調練、陣法を定、洛外一二

里外之場所遊獵御免相成、春秋両度ニ大調練、野陣を

張、二日一夜位之稽古も致候ハ、自然之節応急覚悟

も相立可申事、

一諸組与力・同心は勿論、守護職初地役之家来有志之者は、講武所稽古ニ罷出不苦事、

右之通申上候見込は、今古を以熟慮仕候処、武備之依而起候基本は土地ニ有之、古人英武ニ候は、則土着之故ニ御座候、方今も土着之姿ニ不被遊候而は、武備は

振興不仕、僧徒・社人は武士ニ無之候間、

御朱印地其地之寺社とも御蔵米ニ御引替、御蔵米取之武家江右土地を引替御渡相成、京・江戸・大坂等之御堅メ之基本を御立被遊候ハ、可然奉存候事、

但いづれも名地之警衛之武士、各地近国ニ采地有之候様ニいたし度候事、

一右土着之儀は、急速難行候得共、往々は御托し相成候様仕度、本文之趣も右見を以取調申上候儀ニ御座候事、

京地口々

栗田口 北白川山中越 下鴨より大原迄

山端村より雲母越 鷹ヶ峰より長坂

朱雀より老ヶ坂 鳥羽より小枝橋

竹田街道より伏見 伏見街道 宇治

坂本 山科

〔裏表紙ニアリ、先〕
「甲子二月」

冊子原寸 縦二八・三糎 横二〇・五糎 九枚

三 松平甲斐守位階昇進願

付履歴書相添

二 通

九五ノ一

〔包紙ウツ書〕
「松平甲斐守」

私家之儀は

〔徳川綱吉〕
常憲院様莫大之奉蒙

御厚恩、結構被 仰付難有仕合奉存候、先代美濃守吉保

少将迄昇進被 仰付、嫡子甲斐守吉里ニは部屋住之内、

侍従迄昇進仕、嫡子美濃守信鴻儀茂部屋住四品昇進仕候

処、病身ニ而隠居相願、嫡子甲斐守保光儀は家督より七

ヶ年目昇進仕、保光隠居相願、嫡子甲斐守保泰家督より

九ヶ年目四品被 仰付、天保五年侍従昇進仕候、嫡子
甲斐守保興ニは家督より八ヶ年目四品昇進仕、嘉永元年
年死去、私江遺領無相違被

仰出、家督より当子年ニ而拾七ヶ年罷成、別紙之通御用
向被

仰付相勤来候儀ニ付、幼年家督とは乍申、家中一同歎息
仕罷在候ニ付、来丑年順年故、参府之上内願仕度奉存居
候処、今般

御上洛中二条

御城火之番を茂心得候様被
仰付、幸在京罷在候間、何卒昇進被 仰付候様奉内願度
成就之上は家中一同領民末々迄茂奉仰

御慈恵、先祖江之孝道無此上難有仕合奉存候、不容易儀
奉恐入候得共、成就之程只管奉内願度、此段申上候、以上、

(柳沢保申)
松平甲斐守

文書原寸 縦 一八種 包紙原寸 縦二七・五種

横一〇八種

横三九・三種

九五ノ二

(別紙書付)
「別紙書付」

覚

一 嘉永元申年十月廿五日如先代京都火消被 仰付候、

一同二酉年四月十二日増上寺

安国殿

御宮向并本堂・三門・方丈御修覆御用被 仰付相勤候

一同六丑年四月西丸御普請ニ付、御手伝被 仰付相勤候

一同七寅年二月十日去年

西丸御普請御用相勤候ニ付、京都火消当分被成

御免候、

一 幼年中在府ニ付、桜田方火之御番引統三ヶ年相勤候、

一 安政元寅年九月十九日御所司代脇坂淡路守殿より京都
(安宅)

屋敷ニ差置候家来之者御呼出、泉州海岸江異国船老艘

乗入候ニ付、為御警衛伏見街道江人数差出候様御達ニ

付、一番手三拾騎備・二番手二拾騎備人数差出置候処

猶又御所司代より、同廿五日御達有之、大坂表江茂人数差出候ニ付、伏見街道御警衛

御免被成候、

一同年同日在所家来共より早乗之者を以、大坂御城代土

屋采女正殿江人数之儀相窺候処、当表近海江異国船乘

込碇泊罷在、此後之模様難計候間、御警衛人数差出候

之様御達ニ付、二拾騎備人数差出、猶追々増人数茂差

出候処、魯西亜船退帆ニ付人数引取候様御達ニ付、十

月八日人数引取申候、

一同年十一月十八日京都御警衛向之儀被 仰付候、

一万延元申年八月十一日相応之人数差出、今出川御門江

相詰石薬師御門・乾御門茂相心得候様被

仰付候、

一文久元酉年正月十三日英吉利人宿寺高輪東禅寺、同所

続上洞菴江警固人数差出候様被

仰付相勤候、

一同二戌年四月七日如前々京都火消被 仰付候、

一同三亥年四月晦日山崎表御警衛被 仰付候、

一同年八月廿一日大和国五条辺浪士一揆ニ付、追補被

仰付人数差出候、

右之通家督後拾七ヶ年之内御用向相勤申候、

子二月

文書原寸 縦 一八糎 包紙原寸 縦二七・五糎

横 一六〇糎 横 三九糎

三 横浜鎖港ノ件

毛利左京亮上京差止ノ件

久光公手写

〔端裏朱書〕
「甲子二月」

去ル十四日差上候

勅答書之内、横浜鎖港之一条、御請振不分明被

思召候由、慶喜江内々

御沙汰之趣承知仕候、然処弥鎖港仕候見込ニ而、已ニ外

国使節差立候儀ニ御座候間、是非共成功仕候心得ニ御座

候、尤再度蒙

聖諭候無謀之攘夷仕間敷との趣奉畏候、就而は弥以沿海之武備充実致し候様可仕奉存候、依之此段申上候、以上、

臣家茂

去十四日

勅答書之旨趣、横浜鎖港之一条、御請振不分明ニ付、一橋中納言御訊問処、尤鎖港之成功は是非共可奏条、更以書取言上之旨被

聞食候、猶又以別紙被

仰出候通、尽力勉励可有之

御沙汰候事、

横浜鎖港之儀精々可遂成功、且諸国兵備充実致、洋夷之輕侮絶候との趣達

叡聞候処、此上は惣国之守禦緊要之事ニ而、差当摂海之要港急務上は、神速其功蹟相顕、人心安堵、不經教年征

夷之実相行、奉安

叡慮候様

御沙汰候事、

二月

毛利左京亮様来ル廿五六日頃、枚方駅御泊りニ而、淀街

道御登り被成候趣承知仕、御登京と相心得候ニ付、兼而

御達之廉も御座候事故、豊前守御固メ所御通シ申上候、而

不苦候哉、為念御伺申上候、然ル処昨夕

御達之趣ニ付、早速諸出張番頭共江申遣取調候処、当月

下旬御参府之御先触、枚方駅江到来之由御座候処、篤と

取調不申卒尔奉伺不行届之段、幾重ニも奉恐入候、何分

ニも宜御沙汰被成下候様奉願候、右之次第番頭共より申

越候ニ付、此段御断申上候、

松平豊前守留守居

二月

皆川誠藏

松平豊前守家来江相達候写

毛利左京亮儀御用も有之候間、暫滞坂致し罷在候様相達候間、得其意御固場通行之義も有之候節は、差留方最前相達候通相心得候様可仕候事、

伝奏江相達候写

毛利左京亮儀ニ付、松平豊前守より猶又別紙之通申聞候間、何れニも大坂表に罷在候様左京亮江相達、万一上京等之義申出候ハ、差留可申旨、(大河内備忘)松平伊豆守江も相達申候事、

文書原寸 縦一六・七糎 横九四糎

三三 長州征伐ニ付被仰出候命令書

三通

(包紙ウツ書)
「御内意被仰出候御書」

三通 長州征伐
事件

九五三ノ一

(端裏銘)
「松平修理大夫江」

(島津茂久)
松平修理大夫

此度(毛利慶親・元徳)松平大膳大夫父子江御糺問之筋有之、万一承服不致

節は御征伐可被遊

思召ニ付、其節は為討手其方人数差出候様被

仰出候間、用意可致旨

御内意被

仰出候事、

文書原寸 縦一五・八糎 横四七・二糎

九五三ノ二

御名代

(徳川茂承)
紀伊中納言

副将

(谷保)
松平肥後守

差添

(道純)
有馬遠江守

右之通被 仰出候間、諸事受差図尽力可被致候事、

文書原寸 縦一五・八糎 横二六・五糎

九五三ノ三

(端裏朱書)
「甲子二月」

(繪須賀春裕)
松平阿波守

(池田慶徳)
松平相模守

(定安)
松平出羽守

(慶順)
細川越中守

(淺野長訓)
松平安芸守

(池田茂政)
松平備前守

(忠幹)
小笠原大膳大夫

(正方)
阿部主計頭

(安宅)
脇坂淡路守

右之者共江も相達候間、諸事可被談候事、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二四七号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・八種 包紙原寸 縦二七・六種

横四一・六種 横三九・四種

九番 勝麟太郎等英蘭軍艦々將ト対談ノ件

下之関砲撃計画探索始末

九五四ノ一

(表紙)

一長州地之儀ニ付英蘭船將共対話之趣内密申上候書付

服部長門守

勝麟太郎

能勢金之助

当月十九日於当地製鉄所御雇蘭人共、近々之内英・蘭両

国之軍艦数艘長州下ノ関江向通航、若長州家ニ而発砲等

致候ハ、直様戦争ニ可及心得ニ而発船之旨噂致シ居候

趣承込候旨、支配向之者より長門守迄申出候間、不容易

儀と存、実否之処相札可申ため、外用向ニ相托、英国滞

在軍艦船將キングストン江面会之儀申遣候処、同人儀同

廿一日相越候間、対話之序、夫となく右等事情相探候処、

此節御国地江向本国より軍艦差越候義は相違も無之、尤

万事提督之差図故、委細之義は心得不申趣相答候而已ニ

而、事実之処何分打明不申聞候ニ付、猶又蘭軍艦之方江

面会之義申遣候処、翌廿二日船將デカッセンゾロト相

越候間、前同様相尋候処、此儀は各国ニ而疾々決定相成候義ニ而、英国ハ大砲七拾門・海陸千二百人余乗組之リテ船一艘、蘭国は軍艦三四艘、是又大凡八百人余之乗組者可有之、本国并印度辺より追々出帆、蘭之方は来月初旬、英之方も四五十日中ニは着船之積、愈進発と相成候ハ、私杯生死之程も難計、殊ニ蘭国之義は御国と二百年來之親睦、元より余国之比例ニは難相成処、何等之故ニ候哉、私義昨年中下ノ関通航之節不計も不法之暴撃ニ逢ひ、船腹其外所々被相破候次第ニ至り、実ニ遺恨難止、常々憤腕切齒罷在候間、此度は決心奮力、尸を長州地ニさらし可申所存之旨申聞、実ニ決心之様子ニ相見候ニ付、各国軍艦長州進発之儀は、兼而本国政府より我政府へ懸合有之候哉、又仏蘭西国杯も其儀同意ニ候哉と相尋候処、本国より既ニ四ヶ月以前、御国政府へ此段申立候得共、今ニ御返答無之程之儀、元より御国ニ而各国へ対し名義相立候程之御所置速ニ有之候ハ、右様之次第ニも至り申聞敷処、是迄御捨置故無抛此儀ニおよひ申候、

仏蘭西同意之儀は未駈と承り不申候へ共、同国は從來英國と形影之如キ国ニ御座候間、是も必軍艦は差出可申と相答候付、此儀は私政府ニ於ても深心配被致居候義故、何レ不遠何と致所置も可有之、且当地奉行之権力ニは難及事ニは候得共、各国軍艦到着相成候共、進発之儀數日見合候儀は相成間敷哉、貴国とは別段親睦之儀ヲ以内々事情之処承度と申聞候処、御心配之義御尤ニは存候得共、此儀は元より私杯之存意ニは任セ不申儀、乍去各国軍艦相揃候上、御談判筋ニ寄五六日乃至十日位は相待可申哉、若長州ニ而右之次第承込、台場其外手配等十分行届候様ニ而は甚不都合ニ候間、逆も數日見合居候儀は決而難相成由申聞候ニ付、此段長門守より急便ヲ以可申上と存居候処、一昨廿三日麟太郎・金之助着崎仕、兩人より相渡候御奉書面御懸念之儀も前同様之儀ニ付、一同ニ而談判仕候処、兎角此義一刻も早く御承知之方と存、直様取調申上候間、右切迫緊急之事件得と御承知被成、未然之御所置夫々御手續急々御英断有之候様奉存候、尤此後一同

申合、様子次第尚又英蘭船將共と對話等も仕、事情追々可申上候得共、先此段不取敢申上候、実ニ差掛り候燃眉之急務、聊ニ而も遅緩之御所置有之候而は、必大難相発シ候は目前ニ御座候、此旨能々御心得具々も迅速御果決御座候様奉存候、已上、

子二月

服部長門守

勝麟太郎

能勢金之助

弥渡来致し候上は、御沙汰有之候迄差留方申談候ニ付、数日之碇泊可相成、就而は入津即日より差定候洋銀引替不遣候而は不相成候間、今般申立之趣を以、凡一月之引替高取調候処、左之通御座候、

一乗組人数千式百人

士官三百人

此銀錢貳万七千枚 但一日老人ニ付銀錢三枚ツ、

内兵卒九百人

此銀錢貳万七千枚 但右同断銀錢壹枚ツ、

和蘭国軍艦

一乗組人数八百人

士官式百人

此銀錢壹万八千枚 但右同断銀錢三枚ツ、

内兵卒六百人

此銀錢壹万八千枚 但右同断銀錢壹枚充

合銀錢九万枚

九五四ノ二

一(表紙) 各国軍艦渡来之節洋銀引替元御下之儀ニ付申上候書付

服部長門守

勝麟太郎

能勢金之助

此度別紙申上候通、英・蘭兩國之軍艦近日渡来可致由、当港滞在之船將申立候趣は、事実相違も無之哉ニ相聞、

此目方六百四拾八貫目

内式拾五貫九百貳拾匁 四分吹減引

残六百貳拾貳貫八拾目

此壹分銀六万七千六百兩余

但老ヶ月分

凡右之通相成申候、依而は差向ニヶ月分程ハ蒸氣船御仕出ニ而、速ニ御差越無之候而は差支申候、右は平常之碇泊と違ひ頼談ニ而引留候上は、是迄之如く半高等之引替ニ而可相濟儀ニ無御座、自然右等之滞有之候而は、強而引留候儀も相成兼候間、申上候通御差廻し無之上は、品ニ寄御同意之趣ハ整申間敷哉とも奉存候間、此段取分申上候、且又右軍艦惣高引替候ニ付而は、是迄碇泊致居候軍艦は勿論、各国岡士之分も一同丸ニ引替不遣候而は差支候ニ付、先日中長門守(毛利定広)より再応申上候通、毎月定式之引替元貳万兩ニ而は不足いたし候間、是非老ヶ月四万兩ツ、之当を以、前書軍艦之分共打込式ヶ月分、合金式拾老万五千兩余御差廻可被下候、且英国よりハ、リーテ船

老艘千貳百人乗既ニ出帆いたし候と之由、和蘭船將之申

口迄ニ付、相考候処ニ而は、右之外ニも老式艘ハ類船可有之哉、左候得は貳拾老万兩余ニも引足不申候得共、多

分之金高ニも相成候間、見込を以別段増金之儀は不申上、

切詰候仕出高ニ御座候間、何卒速ニ御差廻御座候様仕度

奉存候、依之此段申上候、以上、

服部長門守

子二月

勝 麟太郎

能勢金之助

九五四ノ三

但州生野御代官陣屋江乱入いたし候浪士之内、多田弥太

郎討留候儀ニ付、仙石讚岐守家来届書一昨三日遠江守殿(久利)
(有馬道純)

御渡ニ付、写老通入御披見、此段申上候、以上、

三月五日

永井(尚志)主水正

瀧川(具孝)播磨守

小栗(政繁)下総守

讃岐守元家来去月廿八日於但州 三月二日
 召捕罷帰候途中、領分暮坂村ニ 仙石讃岐守
 而及乱妨候付討留、死骸在所表 家来
 江引取候旨届、

讃岐守元家来
 当时浪人

多田弥太郎

右は兼而為探索差出置候家来之者、去月廿八日但州養父郡宿南村ニおひて召捕罷帰候途中、領分出石郡暮坂村地内ニおひ而及乱妨、手余り候ニ付無抛討留、死骸在所表江引取置候旨申越候付、此段御届申上候、以上、

仙石讃岐守家来

鹿見四郎兵衛

三月二日

〔裏表紙ニアリ、朱〕
 「甲子」
 三月」

横帳原寸 縦一四・五糎 横四一・五糎 八枚

臺 久光公ヨリ幕府へノ建言

横浜鎖港ノ件

〔端裏書(朱)〕
 「甲子二月」

総裁閣老等江差出答之

鎖港論草稿」

横浜鎖港は至当之御事ニ而、実事断然と被行候得は、何も懇々と申上ル迄も無之候得共、三港之内ニ而も、彼地は夷人第一庶幾する処ニ御座候得は、慙ニ談判申掛候共種々苦情申立承服不仕而已ならず、却而 御国恥を引出し可申は必定と恐入奉存候、子細は談判之御趣意と申も人心不居合、長州如キ之暴論輩有之等之趣を以御申込之儀と致承知候、彼より狂暴之者ハ兵革を以取鎮可申候間是非只今通と申募候節は如何御答可相成哉、尤御使節被差遣候ニ付而は、於国々種々論判有之、急ニは帰国有之間敷、若其内国に依り軍艦数艘差向ケ、右通之趣を以強情申立候節は、遂ニ兵端相開候義疑無之候、武備不充実之

皇国ニ而、何を以対応相叶可申哉、義烈之壮士は忠死を遂可申候得共、怯懦之輩は遁逃降参いたし、御国体を汚し候義ハ必然ニ而、乍恐 幕府は勿論、万代不易之天朝之御行末如何可被為成哉と誠に嘆息痛恨無限次第ニ奉存候、若又彼鎖港ニ承服仕候得は、別而之御大幸ニ御座候得共、其時ハ引払料と欵名付候而、莫大之金を御遣相成候筈と致承知候、当時衆口嗽々と申立候族もケ様之御事とは夢にも不奉存、立派ニ鎖港被為整候様考居候半、夫故引払料被差出候節ニ相成候ハ、定而人氣一層之沸騰を倍し可申、其時は逆も鎮靜相成申間敷と甚以懸念至極奉存候、且粗致承知候得は、御使帰国迄は許多の月日を経候ニ付、其節ニ至り候ハ、又其節之時宜次第と欵申御評義之由、是ニ而は鎖港之御定論とも難被申候、又外二港之義、将来如何御処置可被為在哉と、先日御尋申上候得は、是は永久と御答致承知候、是こそ其之開港説ニ而は有御座間敷哉、勿論從來攘夷之

候、私定論ニは方今開鎖之論は先差置、断然と撰海其外之要港江砲台等之実備嚴整いたし候様、屹度被 仰出、迅速ニ御手被為付、右ニ申上候引払料ニ被相渡候筈之莫大之金を以其御用途となし、且諸藩へも分限ニ応し、聊ニ而も出金被 仰渡、浪花ハ勿論其外富有之商人へも分限相応差出候様、理を尽し被 仰渡候ハ、於御用途は随分御不足無之筈と奉存候、御軍艦は此際彼ニ御注文も可有之、詰る処ハ於皇国御造立相成候様、精々御心ヲ被為用候ハ、不久して御成功相整可申と奉存候、充実相成候上は、開鎖之權我ニ歸し候故、彼も従前之輕侮を絶ち可申、其時ニ至候而は、鎖港ハ容易之事ニ可有之、遂ニは彼か巢穴を覆し候程之 御国威相輝キ、貢を捧て来朝仕可申義と奉存候、ケ様御処置相成候而こそ、乍恐上は奉安宸襟、下は生民を被為保候御義と奉存候、尤右充実之御大業別而不容易御事ニは御座候得共、事之成不成ハ心を用ると用ひざるとに有之候間、夫等之処能々御勤考相成

度奉存候、只目前之小計ニ而将来之大謀ニ暗く候而は、
真実

勅意ニ被為叶可申哉と別而恐入奉存候、

右は私愚痴蒙昧之管見を以

御国家重大之事件評論仕候義、恐懼不少奉存候得共、

邂逅御用部屋へも罷出候様難有 仰を蒙り候上は、存

慮伏藏仕候而は不本意奉存候ニ付、不顧多罪申上候間、

何卒各様御英智を以理非得失明白に御裁断被成下度奉

伏願候、誠惶敬白、

子二月

文書原寸 縦一六・七種 横一〇九・八種

癸 將軍家茂ヨリ攘夷鎖港ノ勅答書

將軍家茂へ海防ノ御沙汰書 二通 合計三通

(端裏朱書)
「甲子二月」

九五六ノ一

去ル十四日差上候

勅答書之内横浜鎖港之一条、御請振不分明被

思召候由、慶喜江内々

御沙汰之趣承知仕候、然処弥鎖港仕候見込ニ而、已ニ外

国江使節差立候義ニ御座候間、是非共成功仕候心得ニ御

座候、尤再度蒙

聖諭候無謀之攘夷仕間敷と之趣奉畏候、就而は弥以沿海

之武備充実致候様可仕奉存候、依之此段申上候、以上、

臣家茂

九五六ノ二

去ル十四日

勅答書之旨趣横浜鎖港之一条、御請振不分明候付、一橋

中納言御訊問処、尤鎖港之成功は、是非共可奏条、更以

書取言上之旨被

聞食候、猶又以別紙被

仰出候通、尽力勉勵可有之

御沙汰候事、

横浜鎖港之儀、精々可遂成功、且又諸国兵備充実致、洋夷之輕侮絶候と之趣達

叡聞候処、此上は惣国之守禦緊要之事ニ候、差当撰海之要港急務之上は、神速其功蹟相頭人心安堵、不經数年征夷之実相行、奉安

御慮候様

御沙汰候事、

二月

文書原寸 縦一六・六種 横五七・二種

幕府ヨリ諸大名へノ布告

内治外交一心協力ノ事、山階宮御書留

○伏惟、去月廿七日一同及拝見候 宸翰之 叡旨へ、御即位已来、皇国災禍を悉く 聖躬之御上に御反求被為在候 勅諭にて、実ニ恐惶感泣之至ニ而、倩幕府従前之罪戾を及自反候得は、鉄索在身斧鉞臨項、万死猶不足

之仕合ニ候、○○暗弱孤独を以徒に重任を辱め、紀綱不振政体殆紊れ、内外之禍乱相踵ぎ、頻年奉^極 宸襟候而已ならず、去春上洛之節、勲に攘夷之 勅を奉すといへとも、其事実遂に不被行、僅ニたゞ鎖港之談判すら未だ成功之期限も難量折柄、再 命によつて上洛候上へ、極めて 逆鱗に触れ敵譴を可相蒙、素より所不辭候処、豈料らんや望外之 宸賞を奉受、且 至仁至恵之 恩諭を以、○○并各国大小名を赤子之如く御親愛被為 思召、将来を 御勸誠被為在候条、○○一身之上に取、海岳之鴻恩、不知所奉報答、各へ対し悔慙無限次第候へハ、今後僭濫不遜之旧套を改め、各と兄弟之思ひを為し、心力を合せ臣子之道を尽し、勉めて太平因循之雜費を省き、武備を嚴にして狂暴を禁し、生民を息へ、日本全国誓つて一家同胞之親睦を結び、撰海之防禦ハ勿論、各国之兵備を充実にし、洋夷之輕侮を絶ち、炮艦を嚴整して、膺懲之大典を盛んにし、国威を海外に輝すへき事件等、各と屹度及盟約、各同心におゐてハ其趣及奏上、責てハ当前之

宸衷をなりとも奉休態度と令存事ニ候、且又横浜鎖港之義ハ、為談判外国へも使節指立候段、再応経 奏聞、愈成

功を期候事候得は、撰海ハ不及申各国沿海之武備ニおゐてハ、益以奮発勉勵、武臣之職掌を尽し、大計大議ハ悉く宸断を仰候て国是を定め、皇国之衰運を挽回し、外ハ五洲に抗して慢夷之胆を吞ミ、内ハ生靈を保つて奉安宸襟、皇神之靈に報ひ奉り、祖先之遺志を継述せん事を企由するハ是〇〇之誠意ニ候、各ニおゐても存寄之異

同聊無覆藏書面を以早々被申聞候様存度候事、

右廿七日之 勅書群牧へ御布告ニ相成候節、自 幕

府之被仰出、

〔朱〕
「甲子正月」

〔裏ニアリ〕
「甲子 山階宮御書留」

文書原寸 縦二六種 横三二・八種

久光公国事改革要目覚書

二通

九五八ノ一

一 君臣之御名義一涯相立候様、書面等ニも不相当之義無之様有之度事、

一 公武御間隔人心紛乱之根元は外夷御所置故ニ候、乍併方今無謀之戦争は実以不宜ニ依り、守禦之方略天下之標的と相成程之義有之度、就而撰海守備嚴重相成、守城人品御撰有之度、其外要枢之処ハ次第ヲ以御手被相付度、諸国ハ其国主々々より手当勿論ニ候事、
但開鎖之論ハ方今無用ニ属スル事、

一 京地御警衛十万石以上三家ツ、交代之儀、長州等之御所置相濟候上は一家ツ、在京、守護職申談、且 朝議
參預被 仰付度事、
但外藩迄たるへき事、

一 大樹公御代替は勿論、御官位御昇進之節、御上洛之事、
一 武家官位於 幕府ニ叙任は

朝廷ニ伺相成、御免之上達有之度事、

但御推任叙も 幕府江御知セ之上被 命度事、

一 海防之義 幕府よりハ勿論

朝廷よりも時々御催促被 仰出度事、

一 諸藩江

朝廷より御直達は御取止ニ而、守護職江御達有之、直

ニ各藩江伝達可有之、幕府江は其由守護職より御届可有之事、

但故障有之義ハ其子細詳ニ守護より

御断可申上事、

一 朝廷より被 仰出候義、於 幕府故障筋有之候ハ、

其訳詳ニ言上ニ而御断被 仰上度事、

一 改元月日布告御改之事、

一 朝廷御統料御増之事、

一 御降誕日・御諱・御忌日等皆天下江遠慮之義布告有之

度事、

一堂上江武家・陪臣并浮浪輩出入御禁制只今之通ニ而、

尚又嚴重御行届有之度事、若禁ヲ犯シ候者有之節は、

武人は勿論堂上も殿科ニ被処度事、

一 大事は必

朝廷江御伺之上被 仰出度事、

但御後見、総裁職・守護職等進退之義も勿論御伺之

上たるへき事、

一 京地非常御取締之義ハ守護職・所司代・町奉行之任、

以前之通たるへき事、

一 大小藩ニ不限、江戸往来之節は時々上京、可伺

天氣事、

但東国大名ハ先般被 仰渡之通 朝勤可有之事、

一 武家服制ハ今一往綿密御評義有之度事、

一 無位官之面々、参 内一切御取止之事、

一 毎日の参 内御取止ニ而、小藩之面々都而御暇之事、

但大藩も御用無之面々同断、

一 親王・大臣薨御、天下江遠慮布告之事、

文書原寸 統一五・八種 横七五・五種

九五八ノ二

(御儀失書)

「甲子年覚書迄」

一 御委任とは乍申、天下之大事ハ必

朝廷江御伺之上被 仰出度事、

一 君臣之御名義明ニ相立候様、書面等ニも不相当之義無
之様有之度事、

一 撰海守備嚴重相成度、且守城人品御撰之事、其外要極
之海港は次第ヲ以御手相付度、(被脱之)諸国は其国主々々より

手当勿論之事右ニ付天下中之寺領高御取調、三分一上地被 仰渡、
守備之入費ニ被用度事、尤由緒無之寺社は御取除有
之度、

一 海防之義、幕府よりハ勿論

朝廷よりも時々御催促被 仰出度事、

一 諸藩江御直達御取止ニ而、守護職江御達有之、直ニ各
藩江布告可有之、幕府へは其由守護より御届可有之事、

但事ニ依候而は守護より幕府へ申上候上布告、且故
障有之義ハ其子細詳ニ御断、守護より可申上事、

一 京地非常御取締之義ハ守護職・所司代・町奉行等之任
以前之通たるへき事、

一 京地御警衛、十万石以上三家ツ、三ヶ月交代之義、七

御御所置等相濟候上は、一家ツ、六ヶ月交代在京ニ而
何篇守護職可申談事、

但外藩迄たるへき事、

一 改元月日布告御改之事、

一 御降誕日、御諱等之事、

一 東宮も同断、

一 御国忌之事、但重キ神祭等之節、刑罰等遠慮之事、

一堂上江武家・陪臣并浪士出入御禁制被 仰出置候得共

以来尚又御取締御行届有之度事、

一 親王・撰関・大臣薨去布告之事、

一 後見・総裁・京都守護等進退は時々可伺

朝廷江事、

一 大樹公御代替は勿論、御官位御昇進之節ニ御上洛之事

尤万事輕易ニ被成度事、

一 長州江人数被差遣候節ハ、主将之任綿密御評義、且策
略之次第等抜目無之様評決之事、

一 外藩之儀ハ、於幕府家臣之筋目ニも無之候間、其廉相

立候様有之度事、

一各藩国産之品々献上之儀、當時於幕府有捨有之候由、

以来若献上有之節は

朝廷江進献可有之事、

一朝廷御統料今一往御評義有之度事、

一禁闕之結構も右ニ同し、

一武家官位之義

朝廷江御伺之上被仰渡度事、

一於

朝廷も官位猥りニ昇進被 仰付間敷事、

一太平因循之雜費減省有之度事、

(裏ニアリ)
鎖港使節口上振 鎖港償金ヲ以防禦ニ用ひ度

焦土云々、去年暴論之節之事、當時不可然今日之義御取用無之時ハ国事關係御

断掃、

宸翰布告不服之者建言申渡、其上登 城坎、参 内坎と

大評論、 一港ヲ二港ニウツシ候後ハイカ、

文書原寸 縦一六・七糎 横六六・七糎

○五九 久光公ヨリ摂海防禦建言ノ諭達

久六 長州罪状ニ付久光公ノ意見書 同文ニ通

九六〇一

長州御処置ニ付而は、誠以不容易御大事ニ而、其当否ニ依リ

皇国治乱之所分、天下後世ニ亘り名義之所関ニ候間、能々御熟評ヲ以御論定無之候而は、不相濟義と奉存候、抑昨年八月十八日以前、蔑

朝廷擁七卿募暴威、終ニ触

逆鱗、境町御門警固被 免候時機ニ候処、不奉憚

朝廷、私護七卿、剩帯兵具持劍戟、公然及帰国候挙動、

既頭不臣之色候、然に十八日一挙ニ付、取調御届申出候様被

仰渡候処、等閑ニ打過、近比井原主計を以申出候次第、

唯一昨年以來之勤功申立、論曲直強情申張候義、不恐

上君臣不当之罪是一ツ、去夏 幕府船を砲撃し終ニ及奪

掠、剩 幕使を暗殺いたし候次第、对 幕府不敬之罪是

一ツ、去年來募浪士、或奪小倉之台場、且恃強驕弱輕蔑

隣国候次第、畢竟攘夷之

勦慮遵奉之趣意ニも可有之候得共、真実

皇国之御大事ヲ思ヒ候赤心ニ出候ハ、人心共和を根本

といたし候而こそ

勦慮ニも相叶可申処、前条禍及隣国釀動乱之振舞暴戻之

罪是一ツ、攘夷之儀 幕府神奈川鎖港談判中之趣及奏

聞、猶又 御達相成、爾後 幕府之指揮ニ可從云々之

勦命御布告有之候処、今般砲発之暴挙、仮令異船と云共

御布告之

命ニ違背いたし候訳合、況

皇國中同体之臣子として凶狼之罪是一ツ、右数件之罪状

明白ニ而、外ニ

御処置之可被施無之、既ニ天時人事可征之機顯然候得共

何分偽

勦とハ乍申、議奏・伝奏之手ヲ經、奉

命之筋を以申立候得は、後世青史之論ニ涉リ候得は

勦命ニ相違無之、正邪曲直不分明之憂可有之ニ付、大ニ

(後欠)

文書原寸 縦一七・四糎 横七五・八糎

九六〇ノ二

長之罪状

一 去年八月十八日以前、蔑如

朝廷、輕侮 幕府次第不一、終ニ触

逆鱗、境町御門警固 御免相成候時機ニ候処、不奉憚

朝廷、私護七卿、剩帶兵具持劍戟、公然及帰国候挙動

不臣之色顯然ニ候、然に十八日一挙ニ付、取調御届申

上候様被

仰渡候処、等閑ニ打過、近比并原主計を以申出候次第

只一昨年以來之功劳申立、論曲直強情申張、不恐 上

君臣不当之罪、

一去夏 幕府船を砲撃し終ニ及掠奪、刺 幕使を暗殺いたし候次第、对 幕府不敬之罪、

一去年来募浪士、或奪小倉之台場、且恃強凌弱輕蔑隣国候次第、畢竟攘夷之

叡慮遵奉之趣意ニも可有之候得は、真実

皇国之御大事ヲ思ヒ候赤心ニ出候ハ、人心一致一和ヲ根本とし候而こそ

叡慮ニも相叶可申処、前条通禍及隣国醜動乱之振舞暴戾之罪、

一攘夷之儀 幕府神奈川鎖港談判中之趣及奏

聞、爾後 幕府之指揮ニ可從云々、

勅命御布告有之候処、今般砲撃之暴挙、仮令異舶と云共 御布告之

命ニ違背いたし候訳合、況

皇國中同体之臣子として凶狼之罪、

右数件之罪状明白にして、外ニ 御処置之可被施無之、

既ニ天時人事可征討之機頭然候得共、何分偽

命とハ乍申、議・伝両役之手を經候得は、後世青史之論ニ涉り候而は、

勅命ニ相違無之、正邪曲直不分明之憂可有之ニ付、大ニ 御処置之順序可有之奉存候事、

文書原寸 縦一七・四種 横六四・二種

九六一ノ一 長州処分ニ付久光公ノ意見書 二通

〔編纂朱書〕
「甲子 長州御所置 愚存覚」

長之御処置

長ノ暴論行ハレ候所以は、三条以下七卿あつて之訳ニ候間、先ニ七卿 御召返にて、真偽之

叡慮御申聞、罪ニ伏せしめ候而、長ノ

御処置ニ及候義肝要たるへし、七卿

御召返之義も不容易、尤長之口実とする所ニ候間、窮而

無事ニ相渡申間敷候得共、若無子細相渡候得は、

皇国之御大幸ニ可有之候、万一拒

命不奉渡候得は、詰り可征討名義判然として、天下之心も安堵いたし可申候、七卿請取方ニ付而も亦次第可有之候、先ツ七卿差出候様嚴重之

勅命ヲ下され相達次第、五日を出すして成否之義可申出

旨御達相成、既ニ

命ノ下ルニ及候而は、御請取之人数主将之任等御内定、

一左右次第進発可有之、期日を過キ奉

命不致候ハ、請取之主将即時ニ発向可有之、前以毛利

左京亮等之末家并吉川監物江七卿御請取として御使被差

遣候御達之趣有之候間、芸州辺迄罷出候様被

仰渡度、御使於芸州毛利・吉川等へ相達候趣は、長州

云々之罪状有之候処、畢竟長門宰相父子之罪不可遁とい

へとも、兼而暴臣等私権掌握いたし候より上下顛倒之勢

をなし、右始末ニ及ひ候内情被

聞召通、父子之処ハ強て御悪ミ之詛ニ無之候間、速ニ

暴論輩之処置相付可及謝罪、無左ニ於てハ、不得止

官兵を以可及征伐、若其時宜ニ至り候得は、

皇国之乱階、長州之滅亡不可疑候得は、実ニ大事之機故、其方等

皇国之御為、父子悔悟いたし候様必死ニ説得可致ト可被

達、末藩之心底、万一

官兵被差向候節は進止を失し候詛ニ候間、前条通之

命を奉し候ハ、感激し死を以尽すへき欤、扱宰相父子

ト暴臣トノ差別を以相達候得は、長州暴といへとも、頗

忠誠之者も可有之なれハ、社稷を失ふニ不忍、直諫之士

も起るに至るへき欤、然れハ自然而立之勢をなし、無難

自国を以処置相付候半も難量、左候得は不戦して事相調、

皇国之御大幸といふへし、右通丁寧反復を尽し、不奉伏

候得は、実以不得止干戈を用ル之

御仁怨顕然にて、後世之論ニ於て所間然可無之欤、

御使進発之節、御達之趣万一拒

命候ハ、不得止可加征討、七卿御召返之上云々之罪状

を以可被処罪之処、不奉返候ハ、無致方云々之刑ニ処せ

られ候、仍而以干戈可征之云々との

勅翰を奉し下向可有之、左候得は不得止ニ臨ミ、右

勅翰ヲ布告し及征討候得は至当たるへき欤、右御使被差

下候、前以筑前・小倉・久留米・柳川・肥前・肥後且芸・

備・石・作其外隣藩江云々云訳ヲ以、長州御処置被召付

候間、兼而応援之用意ヲ成シ、御下知可相待、尤

官兵滞留之糧米兵具等相救之心得にて、若脱走之者ハ不

洩候様用心可致置との

御達有之度、

右之外、細目ハ数件可有之候得共、大略肝要之趣意ハ

順序本末右通ト愚考いたし候、幾重ニも至公至平名義

分明無遺憾之御処置第一ト奉存候、好悪之偏執ニ依而

大事ヲ誤り候義、歴世不少候間、能々精微之論ヲ以私

念を去り御決義有之度奉存候事、

文書原寸 縦一七・三糎 横一一八・五糎

九六一ノ二

朝命 御奉戴ニ而長州家老一人若井原主計未掃国不致候、吉川ハ、此者ニ而よろし

ニ而も早々浪花迄被召呼、老中一人其外御役々下坂、別

紙通之罪状御糺明、七卿差帰シ、暴論輩取押等嚴重被

仰渡、本国へ相達次第五日を出すして成否之御答可申出

御達有之、一人ハ御返シ一人ハ被召止度、若御返答遅延

いたし候欤、又は不奉 命候ハ、速ニ征討使可被差遣、

其節猶又未家之内芸州辺迄被召呼順逆之道理、且長州主

人之罪ニあらず暴臣等之罪と云事を明白被達、只今之内

取押行届候得は主人ニ罪なし、若猶予有之候ハ、家内

滅亡に及ぶへく旨、丁寧反復被命度、

惣大将 副将 彦 若藤 尼崎 備福 予松山

播龍の 讚高松

右被召付

石 芸 備 作 雲 因 筑 小倉 肥前

右応援

肥 米 柳 岡 中津

右九州より発向

二月廿二日

九六二ノ一 長藩旅宿天龍寺ノ件

付外国船下之関攻撃計画風聞

此分御日記ニ留相濟

九六二ノ一

昨日御沙汰御座候下嵯峨天龍寺ニ長藩旅宿罷在候哉、

探索仕候趣、左之通御座候、

一右天龍寺ニは、去亥年七月比迄は長藩并吉川(盛幹)監物等旅

宿罷在候得共、右比小松谷江引越候後ハ老人も旅宿不

致候得共、長州旅宿と認候懸札ハ今以右寺惣門柱ニ其

俣掛ケ有之、尤右掛札取払申儀、同寺より河原町三条

上ル丁長州屋敷江掛合候処、差当り上京之目当ハ無之

候得共、当節諸家当丁へ宿多候儀、外方江貸渡等相成

候而は、入用之節差支候ニ付、先キ之俣いたし置候様

申聞候由、

右之通相聞候付、此段奉申上候、以上、

九六二ノ二

(毛利慶親)大膳大夫領内長門国於赤間関、外夷と戦闘之次第連々申

上候通ニ御座候処、当春は外夷共同所江襲来可仕趣新聞

紙流布ニ付、同所出張之家来江茂手当向一入嚴重ニ相心

得候様申付置候間、異国形之船同所通行候ハ、是迄之振

合を以、前広通達可有之候得共、猶又為念一応遠冲江碇

泊いたし、出張之家来江及応接候之上は船印見定被相成

ニ付繫船、翌日通行候様ニ御沙汰被仰付被下候様仕度奉

存候、此段奉願候様ニと国元より申付越候、以上、

二月三日之御付札ニ

願之趣ハ難被及御沙汰候、仮令異国船たり共、從彼

不致砲発節ハ無差支通行可為致候、

松平大膳大夫内

乃美織江(宣)

別紙之趣、御付札を以被仰聞候、然処大膳大夫於領内教
度異艦及掃攘候次第は、連々申上候通

叡感を賜ひ、監察使を茂御下向ニ相成候程之参り懸り茂
有之、変ニ御座候、殊ニ去十一月大膳大夫領海江外国船
通行不致候様、御告諭振り共は被為在間敷哉と申上置候
得共、未何たる御答も不被 仰出内、此度御付札之通被
仰聞候而は、大膳大夫ニおゐて茂太以当惑仕、家来末々
迄惑を生し触返し様茂無之罷在候、況して去五月十日期
限と被 仰出茂御座候得は、癸丑己来攘夷之

叡念今更被為変候儀可有之とは、努々不奉考候付、領内
関口乗込候異国形之船は、碇泊之上達し無之節は難見定
儀候付、最前之通相心得、可及砲発候間、願之趣被聞召
分被及御沙汰被下度、再応奉願候様ニと従国元申付越候
儀之申上候、以上、

松平大膳大夫内

(朱) 「甲子」 二月 乃美織江

冊子原寸 縦二五・五糎 横一六・三糎 三枚

伊達伊予守ヨリ島津大隅守殿へ

〔包紙ウラ書〕 参内有無之件

島津大隅守様

伊達伊予守

緘

〔封紙ウラ書〕 隅州明公

貴報

伊予

拜読仕、春雨濛々之段、愈御安全奉大賀候、別封廻達照
手仕候、尤先日之朝議にも無御関係候故、御不参之御心
得、殊に御腹痛大ニ被発迎モ押而御参

内も難被成候間、周旋可仕、御加養専念、努力丈ハ心得
居候様可仕、僕亦近日眩暈胸痛発動、頗難洩仕居候得共
今日丈ハ参

内之心得ニ御座候、貴酬迄、恐々頓首、

即時

文書原寸 縦 一六糎 包紙原寸 縦二八・六糎

横 三九・八糎

横 三九糎

六六 伊達伊予守ヨリ島津久光公へ

書類廻付

(封紙ウツ書)
「双松君」

对翠

ノ

奉賀候、御約束の書付差上候、已上、

三月朔

今日ハ喬邸へハ不参候也、

文書原寸 縦一六・九種 横二二・二種

六七 山階宮晃親王ヨリ島津少将殿へ

久光公ノ滞京ヲ望ム

(包紙ウツ書)
「島津少将殿」

晃

ノ

(封紙ウツ書)
「島津少将殿」

玉案下

晃

益御安全珍重不斜候、今朝は美菓・鮮鯛賜之、深忝存候、

一今朝は高崎参候、万々咄し尤ニ存候、

一今夜又々及亥御評定、何もく伊予守より

禁中之趣御聞取可給候、

一近衛家の趣ハ伊太郎より御聞取可給候、

一中川宮の趣ハ志々目より御聞取可給候、

一長州之二条ハ一中納言以下以封中心底 奏聞ト申事ニ

定り候、来ル四日ニ御評決ト申事ニ候、

一何分く

天朝之御次第恐入候間、呉々今暫ク御在京厚希入候、

其内拜眉、万々可申入候也、

(裏ニアリ)
「三月二日夜亥中刻」

文書原寸 縦 一六種 包紙原寸 縦二七・八種

横四五・二種 横 四一種

六八 九鬼式部少輔ヨリ松平容保へ

朝暮ノ失政ヲ論ズ

(封筒)

隆都

都鳥みやこの君を仰くにも

日むけの国をしたふわりなさ」

(表紙)(付紙)
「此書(津君之手元へ)内密差出候間、決而

上達致候義ニは無之、誠に野人之ね言

に有之候」

三月三日

恭奉捧 鄙文一章

鳳闕玉簾之下桜橋

御垣守左右

豊島郡墨田野人

頓首」

古昔 明王、從諫如流、求言如飲食、今

聖王聡明睿智、豈以鄙野之言忌之拒之矣乎、謹案

聖意、尊崇 先王、愛憐万民至矣、其事实或与

聖意違戾、是

聖王不深察、不遠慮之過而已矣、且尋当今数万之土民困

苦、而生天下四海之危難之根源、從 幕吏昏昧而不

慎所任之大政、妄輕蔑諸侯、諸侯或愠、直訴其失於

京師、奉愆

宸襟而所起也、夫 幕府之 祖先尽忠於

王家、天下之政道無私、慎而守仁義、是以四海和樂、與

二百有余年之泰平、德化未喪、善政尚存、請厚令

將軍家政復古、選賢任能勵武煉兵、能追 祖先之忠

勤、以遵奉

聖意、如夫斯何畏外夷之強、何憚國賊之暴、然唯所患、

当今

公武共出令施事、或輕忽急遽、多失古昔

明王之旧典、終不合孫吳望良之策、是或似執政非其人、

請

聖王欽仰 伊勢天祖

天照皇大神宮之神勅、恭法

人皇太祖 神武天皇之聖模、正直以去私念、誠一以

舍邪志、潛心於

聖経、籠魂於七書、以禁輕忽之令、絶急遽之事、天

下之大策密与 將軍謀、四海之要務深与賢哲議、天

下莫知一事之失者、四海莫見一点之拙者、而後

聖意初達 將軍之職業復古、天下再泰平、四海再安逸、

然又所恨

朝廷至於今日一人無逆

聖慮、而難

聖慮之未熟者、是以

聖王雖既有自責自恥之

聖慮、然未至於真自願自戒之实地、故鄙野之野人窃憂恐

天下之危難日起、万民之困苦永不絶、請

聖王効古昔 明王之盛德、能容鄙野之言、而察鄙野之

情、能味鄙野之言、而通鄙野之情、以至於真

自願自戒之实地幸甚、元治元年甲子三月三日、武蔵国豊

島郡墨田辺野人、誠恐誠惶頓首頓首謹言、

(裏表紙ニアリ)
「風月庵」

冊子原寸 縦二七・三糎

横 二〇糎 四枚

包紙原寸 縦 三三糎

横 一〇・七糎

伏見 大坂 川座方御船預植木甚之丞覚書

一御召川御座船

沙棠丸

一御召替川御座船

御船号無御座候

一御内用方御船

朝日丸

右之通被仰渡置候ニ付、此段申上候、以上、

川御座方
御船頭

植木甚之丞

子三月三日

文書原寸 縦一四糎 横三五糎

松平春嶽公より島津久光公へ

参予参内之件

(包紙ウツ書)
「島津大隅守様

(朱)紙)

松平大蔵大輔

一輪致啓上候、暖之和之候ニ御座候処、愈御安全珍重奉存候、陳は今日

大樹公

御参

内御延引被

仰出候得共、参予之

面々午ノ刻

参内候様、從伝

奏申越候、依之此段申進候、以上、

三月五日

松平大藏大輔(慶永)

島津大隅守様

文書原寸 縦一七・二種 包紙原寸 縦二九・八種

横六六・五種

横三八・五種

高島右衛門ヨリ小松大久保へ 舌代共二通

一橋中納言ト対談ノ件

九六九ノ一

舌代

只今別紙認中江御書状被下拜見仕候、別段被下候御状御答不申御用捨被下度候、以上、

文書原寸 縦一五・七種 横一〇・三種

九六九ノ二

〔封紙ウツ書〕
小松 帶刀様

大久保一藏様

高島右衛門

御手紙得貴意候、鬱々敷候処、弥御安康珍重ニ奉存候、

然は過日来は、毎々御参

殿、御苦勞之御事ニ奉存候、扱昨日一橋様より原市之進

を以被 仰上候ニは、昨日は

御兩所様一橋様江御参 殿被成、右御達一条

中納言様より各様江御直談之御様子委細被 仰上、先伯

耆守を被 召、右之御趣意相届候様、御沙汰ニ相成候様

御取計之様被相願候ニ付、無程御出門ニ而御参 朝被遊

則今日右辺之御朝評被遊候思召ニ御座候間、御両所様ニ

も昨日一橋様江御直話之御様子故此儀御承知とハ被

思召候得共、過日之御沙汰統ニも候間、為念之此段可得

貴意候様被 仰付候間、依而此段申上候、早々、以上、

三月六日

尚々、乱書殊ニ文言前後不揃、御推覽被下候様希候、

以上、

文書原寸 縦一五・八糎 横八九・五糎

伊達伊予守ヨリ島津久光公へ

桜木邸へ訪問ノ件

(封紙ウツ書)
「双松英明公」

侍史

対翠拜

ノ

」

好晴色ニ御座候、愈御安榮奉大賀候、此書付大蔵へ頼置

手ニ入候間呈覽仕候、相濟候ハ、早々御返却所希候、

今夕七時頃桜木邸へ僕罷出申候、種々申上度事件も御座

候故、押懸御来臨如何、恐々頓首、

春晚七

文書原寸 縦一六糎 横二七・三糎

土持平八小倉ヨリ大久保一蔵へノ報告

長州事情

(端裏朱書)

子三月八日

小倉より
土持

防長之動靜旁無油断追々探索仕候処、当分差而相変承得

候儀無之、併當時之政事ニ付而は、譜代恩顧之藩屏等承

服不致、公武御合体之道理解得失考、段々致諫言等族も

有之由候得共、畢竟執政職之益田右衛門介事権柄掌、諸

家之浪士等近寄、暴論ニ募、是迄異外之儀共到来、夫故

人心紛乱之形ニも風評有之、就中先達而蒸氣船焼失一件

ニ付而は、物頭野々村勘九郎、奇兵隊浪士組と致口論候

儀共有之、夫々曳統互之異説を立、論議差起一任不致、

然ニ諸士共嘶合候儀共、内々相洩候ニは、既諸侯ニ離れ

防長孤立となり、微勢之為体、何分慷慨令歎息、仮令山

口要害之城郭たり共、方今幕府江橋を突籠城難對、希は平均之道相開策略致内評者も間々有之形ニ候得共、脱体浪士共諸事異氣強く、勢ひニ仕掛不相劣、諸士末々ニ至迄、異風龜暴之挙動等有之候得共、内心ニは御主人様并右衛門介等江後指を差し候者も有之由、然は大膳大夫様御父子御間柄、御趣意之程何様候欤、巷説区々之形ニ而、突留慥成儀分明不致、右次第段々承合候処、兼而無疑念味方ニ取組候手付之者江蜜々相計、去九月末頃、大膳大夫様御直筆仰出写手ニ入申候間、已後御見合之端ニも罷成可申哉奉存、別冊写相添此段申上候、以上、

子三月八日

大久保一藏殿

長州下之関詰
豊前小倉御船
唐物締横目
土持平八

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二五六号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・六横 横一七〇・八横

三 宮中ニ於ケル舞楽之次第

元治元年甲子三月九日

將軍家茂公御参 内、舞楽有之、諸大名エモ拝見被仰付、

舞楽之次第

左方

振鉦

辻治部丞

近陳

感城楽

上左近将監

真節

辻少監物

高節

芝筑後守

葛房

近陳

迦陵頻

上右近将曹

真行

奥左近将曹

好寿

芝右近少曹

直温

辻右近将曹

近成

芝右近将監

葛忠

芝左近将監

葛鎮

元治元年 (1864)

<p>多備前守 忠誠 音頭 奥丹波守 好學 多右近將曹 久康 豊右兵衛尉 時隣</p>	<p>窪越中守 近繁 音頭 窪左近將監 光張 安倍右近將監 季光</p>	<p>窪越中守 多雅 忠惟 窪甲斐守 近俊 安倍修理權亮 季資 多左近將監 節文</p>	<p>多肥後守 忠愛 音頭 東左近將監 友秋 高節</p>	<p>筆筭</p>	<p>退出 笙 長慶子</p>	<p>陵王 近陳 則賢 真節</p>	<p>春庭花 葛房 辻相模守 則賢 行業 行業</p>	<p>奥左近將監 行業 辻大監物 高範</p>	<p>太平楽</p>
<p>陪臚 廣邑 菌駿河守 林左兵衛尉 昌好 文靜</p>	<p>胡蝶 東儀左兵衛權尉 文陳 多千代彦 忠政</p>	<p>東儀右兵衛尉 文礼 山井左近將曹 基万</p>	<p>仁和楽 多右近將監 忠克 多左近將曹 忠功</p>	<p>振鉦 東儀河内守 文靜</p>	<p>右方 鉦鼓 窪右近將曹 近頭</p>	<p>太鼓 芝石見守 葛高</p>	<p>鞆鼓 奥豊後守 好文</p>		

敷^{シキ}手^テ

文靜

忠克

多左近將曹 岡左兵衛權尉
忠賀 昌次

納^ナ曾^ソ利^リ

廣守

廣繼

三鼓 蘭大和守 広名

退出

長慶子

太鼓 東儀近江守 文均

笙

鉦鼓 東儀若狹守 俊慰

音頭
林肥前守

廣和泉守 蘭周防守
広治 広道 広斐

文書原寸 縦一六・五種 横九三・八種

筆簾

多三河守 多阿波守 東儀美濃守 音頭
久頭 忠以 彭清 東儀播磨守 東儀陸奥守
俊鷹 俊里

九三 伊達伊予守ヨリ島津大隅守へ

京阪守衛総督及長州之件

〔封筒〕 隅州英明公 宗城

〔封筒ウラ〕

多右近將監 東儀宮内丞 東儀薩摩守 多左近將曹
久臈 季熙 季方 節長

笛

山井伊予守 多振津守 岡備後守 岡但馬守 東儀伊勢守
景典 忠寿 昌長 昌福 頼玄

不順候候処、愈御清安奉大賀候、昨朝は一時愕然痛憂仕候処、捕風之事御同情雀躍之至、併甚可憎之所業ニ御座候、夕景市藏被差向入御念候儀恐縮申候、扱又其節申談置候喬公か京阪守衛総督云々ニ付、今一策施候而ハ如何

哉との事、亦介石より申出候長説得、悔悟之所見込之一
条共、何分明朝御賢慮御懇示被下候、且只今同人より一
昨日申付置候喬公より被尋候ケ条ニ付、心付之小冊子持
参ニ付呈覽仕候、明朝誰ぞ被遣候へ、其時御返却奉希
候、恐々頓首、

三月十九日

对翠

双松明公

侍史中

二伸、山階宮何か長処置ニ付御考被為在候様、過刻
桜木殿下より被仰下候間、御承知に候へ、是も明
朝被仰含度希候、已上、
三伸、昨日中原直助(猶介)へ僕か愛翫之小銃為見候処、閣
下ニも長崎より取寄之銃一両日前御手に入候様申居
候、不苦候へ、異製之分一挺ツ、拜見希候也、

文書原寸

縦一六・八糎

包紙原寸

縦二七・五糎

横四〇・二糎

横五六・四糎

封筒原寸

縦一八・三糎

横四・八糎

有馬中務大輔より島津久光公へ

着阪報告

〔包紙ウツ書〕
一島津大隅守様

有馬中務大輔

〔朱紙〕

〔封紙ウツ書〕
一 大隅守様

中務大輔

〔朱紙〕

一 翰啓上仕候、兎角不順之氣候ニ御座候得共、先以益
御安清被為 渡奉大賀候、然は此度私儀上京仕候ニ付而
は、種々御配慮被成下、且御家来猪太郎(高崎五六)義も彼是骨折、
全御直命ニ而万端都合克、速々拝借も相濟、其上長崎出
張之御家来取扱ニ而、蒸氣船も手ニ入候得共、更ニ心得
候者無御座候間、甚当惑罷在、無余儀貴国江側向之者差
立御相談申上候所、事情御汲取ニ而御承知被下候故、無
異儀佐賀之関江差廻、乗船も出来、御蔭ヲ以速々大坂表
江着船仕候、早速ニも上京仕度心得ながら、何ニ分供之
者着船不致候而、上京も致兼、無余義大坂表十八日之夜

着仕候得共、揃候迄は滞坂仕候心得ニ候、不遠得拝顔万々御厚礼可申上候得共、外用向ニ而家来之者屯人側向ヨリ為致上京候間、右両条之御礼不取敢、書中ヲ以申上候上京之上、猶又宜敷預御世話ニも可相成候間、万事御相談も申上候間、宜敷御教示之程奉希候、当時京地も粗承リ候ハ、嘸早 御配慮之義と深々奉遠察候、何ニも得拝顔、万々御嘶等可伺と相案罷在候、先は大坂迄着船之御吹聴取要申上度、如此御座候、頓首、

三月十九日 (有馬慶頼) 中務

大隅様

二白、時下折角御厭被成候様奉存候、小子義も無事ニ

罷在候間、御安慮可被下候、不備、

文書原寸 縦一七・七種 包紙原寸 縦 三二種
横 二二〇種 横四三・八種

三三 有馬中務大輔より島津久光公へ

勤王奮起ノ件

(包紙ウツ書) 一島大隅守様

有中務大輔

貴答

(朱印)

(封紙ウツ書) 一島大隅守様

貴答

中務大輔

(朱印)

一輪謹啓仕候、春暖之節ニ御座候所、益御安清被為渡

奉敬賀候、然は先般は貴翰忝殊ニ大久保市蔵・吉井孝輔(友吏)

被遣、委細被仰含候件々逐一承知仕候、追々御懇情之御

事、深々奉謝候、猶又黒田嘉右衛門・星山矢之助被遣候

義、一は

皇国之御為、次ニは弊邑之為と申、殊更

貴君御内情之次第等巨細申聞、弥以御懇志之至、不知所

謝候、右一条之義ハ旧冬以来小子愚存も有之候ニ付、所

置方之義、家来共へ厚ク申聞置候所、長州一条等彼是ニ

而、兎角存慮通運兼候内、両度之御使价ヲ受候段ハ痛入

候、右ニ付早速評議申聞、漸小子存意通論定致候間、此

より夫々相運候様可仕筈ニ御座候、右小細之情実は家来より兩使江申聞候間、宜敷御承知可被下候、毎々之御懇情御礼難申尺候、大略貴答如此御座候、頓首、

三月十九日

中務

大隅様

尚々、時下御自愛專一ニ奉存候、乍末筆

(島津茂久) 修理君并御恕容様江も宜敷御鶴声奉希候、不備、

文書原寸 縦 一七・五種 包紙原寸 縦三一・八種

横 一五八・五種 横 四四種

伊達伊予守より島津大隅守へ

近衛家へ参会之件

(封筒) 大隅守様

伊予守

(封筒ウラ) 封

(封紙ウツ書) 双松明公

貴酬

对翠

拝誦仕候、催晴御同嬉愈御清迪奉抔賀候、然ハ別紙御廻

達照手仕、於僕も幾心御断申出候含ニ御座候、

○今夕申刻陽明家へ出候様

尹宮も御出のよし

貴君ハ如何、御一同なら何か御談合都合宜と奉存候、不

申参候ハ、御伺にて御推参ハ如何、若シ御参殿難被成候

ハ、申刻迄僕拜趨御面晤可申、御否一寸被仰下度候、

欽言、

春晩念一

尚例文亦省略、已上、

文書原寸 縦一六・八種 封筒原寸 縦 一八種

横五一・八種 横 四・八種

山階宮晃親王ヨリ島津少将殿へ

久光公ノ来邸ヲ求ム

(包紙ウツ書) 内々

島津少将殿

玉机下

晃

(朱紙)

暇かへ御免

今日は近衛殿江御参の由承知候、甚御苦勞ニ候へ共、参
がけ一こく此方へ御立寄希入候、尤内々ながら
御用談候事、

三月廿二日

晃
謹言

島津少将殿

文書原寸 縦 三二種 包紙原寸 縦二七・八種

横四五・二種 横四〇・八種

一橋中納言禁裏御守衛総督摂海防禦指揮

拜命

後見職辞任聴許

(御裏書)
「于三月廿四日」

一橋中納言

禁裏御守衛総督摂海防禦指揮等被 仰付候、是迄後見職

之儀へ今般内願之通被 免、且大樹在京中へ以前同様心
得可有之

御沙汰候事、

文書原寸 縦一六・五種 横二三種

近衛忠房卿ヨリ島津少将殿へ

一橋中納言へノ御沙汰書写ノ件

(包紙ウラ書) 島津少将殿 忠房

几下

緘

(封紙ウラ書) 島津少将殿 忠房

几下

緘

(墨引)

口述

弥御勇健珍重ニ存候、扱先時以藤井御申越之一橋へ之
御沙汰書写為持上候、扱々延引之段御断申入候、今日へ
有馬遠江守暇乞ニ来、彼是ト遅延ニ相成候、先へ午夜中

如此候也、

三月廿五日夜

文書原寸 縦一六・五糎 包紙原寸 縦二七・四糎
横四一・七糎 横四〇・二糎

六〇 伊達伊予守より島津久光公へ

京都守護職之件其他

(封紙ウツ書)

一 双松明公

内用

对翠

ノ

┌

適宜之候御座候、愈御清安奉大賀候、扱は此間再度

幕政参謀御免御願へ如何哉伺度、僕へ廿三日登 城之上

一橋・閣老始申立置、昨日も一橋邸ニ参、尚可申述心得

之処、早め出仕之由にて於

営中對話可申との事、無止登 城之上、尚申立候得共、

矢張如是迄云々との事、御聞啓無御座甚閉口之次第御座

候、

○一橋昨日ハ如素願相成候、守護職も兩人ニ相成候由、
尤大藏(松平慶永)も卒而(爾)にハ難出哉と察候、昨日

尹宮よりも参り、可致説得との御沙汰、実ニ人心ヲ屈縮
被成置てハ説得ノと被 仰、是又閉口候、乍然兩人同
心合力勤務候ハ、一橋にも不工合ニ可有御座と存候、

○一昨日以愚僕申上候介石周旋見込之一条、御賢考之未
御教示可被下旨如何候也伺度、尤今明日中にハ御否伺度
奉存候、

○御暇之期限ハ御願極め御座候哉否、

右要事迄、恐々頓首、

三月念六

有馬昨日着のよし、暴論者召連候や、御序ニ令伺度

候也、

文書原寸 縦一六・八糎 横六七糎

六二 山階宮晃親王ヨリ島津少将殿へ

行幸ノ事皇子皇女ノ事

(包紙ウツ書)
「呈書」

(朱紙)

晃

時氣御保養專一ト存候、昨夜ハ美菓・美酒深忝存候也、

昨夜は推參候処、御念入候事共深痛入候、殊ニ御懇談申忝候、併多言御海容希入候、此品勸門の印ハ候へ共、晃小僧の時分翫候品ニ而、甚見苦候へ共、御一笑ニ進上致し度、御笑納賜り候ハ深忝存候、若々御一笑の上、(御書)殿江被進候ハ、尤忝存候、扱又一橋より

禁中江いろ／＼言上のケ条中ニ

行幸の事

皇子 皇女の事

御座候よし、右ハ先々御代より

天皇も上皇も御望深く被為在候へ共、時勢難行事にて、

云々ニ候、

後光明帝

桜町帝も深く御歎息、近く

光格帝ノ御大息ハ、親ク小子毎々奉伺候事ニ候、実ニ／＼悦伏カ畏伏カハ存候はず、柳營より如此

天氣美義 奏聞と申勢ニ相成候根元ハ 貴朝臣御東行ノ力ニより候始末ゆへ、種々御不滿ノ事ハ恐察候へ共、何卒／＼右二ケ条ハ内外ニツキ御尽力奉希候、

宮殿 神事 節会等顯然の分ハ彼攝家以下古今周旋候へ共、眞実 竜顔麗敷

玉体御保養の实事ハ、一向／＼申出ス人体なく候間、只々内々御願候、晃茂乍恐

光格 仁孝両御世ニハ、御内儀へ格別御親敷被成下、御内勅もいろ／＼拝承、乍恐深々歎息候事も候間、

愚痴ノ趣申入候間、其辺方々 御賢察可給候、草茅危言ハ 光格帝毎度御賞ノ書ニ候間、此辺も御考合可給候、

新井白石ノ折焚柴ニ記候皇女・皇子ノ論、又ハ水戸ノ一班抄ニ記候後親王ノ事、愆而御考合セ可給候併水戸ノ御論余り／＼大ニシテ人心不伏ヤト存候間、小ニハ候へ共、竹

山ノ論ノ方、人心悦伏ト存候、尤近衛老公(忠愍)・中川(頼彦親王)ハ定而
イラザル事と思食べく候へ共、

聖天子ノ御心中ヲ奉恐察候へは、臣子ノ情不忍一大事ニ
候間申入候、何もく愚人ノ愚意ト可被免候、恐々謹言、

三月廿七日

晃

島津少将殿

玉案下

文書原寸 縦 三二種 包紙原寸 縦二七・七種

横四五・三種 横四〇・七種

六二 山内容堂公より島津久光公へ

帰国の通知

(封筒)

一 島津長兄

侍史

殿璋

(封筒ウラ) 朱、障七
□ 平安

別後如何御消光被成候哉、次第薄暑之候ニ至御自重可被
成候、僕本月初四日無恙着国仕候、乍慮外御省念可被下

候、依旧銳鼻(松平春嶽)・長面輩御出会と奉存候、神京之光景も

先僕滞在中同様依然タル事と存候、若シ相替候義御座候
得ハ御筆勞可被下候、僕此頃為養生時々掣兒女携瓢酒、
出郊外相楽申候、先ハ帰国御吹聴旁此頃之御見舞如此御
座候、書外期後鴻候也、不尽、三月大尽日、

九十九洋外史

島津公

侍史

文書原寸 縦二〇・二種 包紙原寸 縦一八・七種

横七六・二種 横 四・八種

六三 重野厚之丞ノ長州其他諸藩探索報告

(朱) 一 甲子三月晦日 重野厚之丞

長藩

一 益田弾正、当分私領須佐江(石州境) 時々差越し、福原

越後山口より三田尻刃用向専権之由、

但弾正并長府家老三好内藏病氣申立引入候様、去

月末方より風説有之候得共、右は虚説之由ニ候、

(付紙1、後掲)三吉周亮、内匠ノ旗リカ)

一 三好内蔵長府家老之執柄ニ而、益田彈正一味之者之由、

尤右内蔵本藩より養子ニ来り候者ニ而、年輩貳拾三四

歳之由、

(付紙2、後掲)

一 兵士隊名目種々取立、先相知れ候分左之通、

下関江相詰

大組隊

騎馬隊

大城隊

奇兵隊

先鋒隊

先德隊

八幡隊

狙撃隊

宮市天満宮百人計

八十人計

五十人計 三百人計

社内に撃剣隊

同上神威隊

同上力士隊

同上遊撃隊

金剛隊

市勇隊

郷勇隊

膺懲隊

百人計 宮市町人五十人計 百五十人計

宮市国分寺ニ罷在凡千人 百五十人

守永弥右 荻野隊

報国団 人数之義は賄方より相

衛門師範 義団兵と唱ふ

洩れ候

右様之名目ニ而所々江標札掛置致修練候由、右之内報

国団と申へ、町人富家之輩無給金ニ而相務め候故、格

位ハ士分之取扱ニ候由、

(付紙3、後掲)

一 先德隊之内五拾人程、先日致亡命候由、仔細不相分、

此節京師御召ニ付、諸大臣分之者尽ク辞退申出、罷登度と申者無之

義を憤り、致亡命との風説

一 中山侍従ハ益田彈正私領地江潛居、表向ハ死去之吹聴

尤同人義大和乱逃帰之後、頭成甚不宜故と取沙汰いた

し候、

一 大和一揆ニ致落命候長州人凡五拾人位と申事ニ候、

一 兵士之數寔と不相分候得共、大數三四万も可有之と風

聞ニ候、尤諸浪士輩茂農商兵等忽而打混し、当分取仕

立相成候分を致臆算候大數ニ候、

一 兵卒之給分、奇兵隊などハ卷ケ月卷両三歩位ニ候処、

近日減少、卷両一步ニ相成候由賄方之義ハ、

一 長藩ハ譜第之諸士株は格別余計無之候得共、大臣分之

者他藩より數多く候故、手人多人教之由、小倉藩士斷

承候、

一 女兵取仕立と唱へ、所々に於て婦人長刀稽古いたし候

を見及候と申者有之候、此等之事件は畢竟虚聲を張り

候仕方ならんと致風評候、

一 農兵仕立方之義、年齡拾四五歳已上依望武術稽古為致

兵隊江召入れ給分相与へ候由、年貢は精力限り耕作い

たし、作得ニ応し心次第年貢為差出、定数不相立仕向
之由田島ハ当分迄ハ未荒蕪之様子とて、不相見、随分無相察耕作出来之体

一 国中ニ借し付金之会所有之、先々より仕来之通、今以借し付相成、下関・室積・上関三箇所ニ大会所取立、四銖位之利息ニ而全ク商買致繁昌候様との主意ニ候由先々ハ室積・上関両所ニ大会所有之候処、昨夏戦争後下関市中金銭不通融可有之とて、新キ会所取立、其折十万金差分候由、

但豪商共へ献金申付候風聞有之候得共、本文一条を以推謀り候ニ可為虚説候、尤下関富家多く罷居候場所ニ候処、右様之事は当処江是迄ハ不相聞候ニ付而は、国中も同様可有之欵と被相察候、

一大島郡六万石、全島塩之利莫大之場所ニ而、小松と申所ニ矢田部と云ふ者老人ニ而千町余之塩浜致所持居候由、長州豪富三人之内ニ候由国中一統塩之利推而可知、
一 山口之地形横卷里半或ハ式里、流れ五里も可有之、平坦之地ニ而三面要害險固、此度新ニ城郭築造取掛り、

当分地形拵丈相濟毎日人夫多人敷造作最中ニ而、好き見物之由

一 右新城之台場広大なる構ニ而、最早成就相成、大砲十六挺程居へ付有之由、

一大砲鑄製場、小郡の内三丁老箇所、水車仕掛頗ル広大之構へ、今老ヶ所ハ三田尻之内けいこふ町といふ小路にあり、

一 是迄ハ寺鐘類手を不掛候処、近日初而大小鐘鑄崩し、大砲致製造候由、

一 山口江入口之関門小郡口に老箇所、此方ハ下関往来筋ニ而格別嚴重ニ無之、宮市口之関門二所、外門は石州津和野往来筋ニ而、随分通行差許候得共、内門老ヶ所は至極嚴重ニ而、旅人出入決而不相許由、

一 小郡之医者何某、同所一手之防禦ハ老人ニ而可引受旨申出、同勢三百人程も可有之との風聞、

但箇様之風説は長州人下評ニ候処、兎角ニ虚声を張り候様子と被相伺候得共、承得候低記し置候、
一 国中旅人往来別而六ヶ敷、行脚僧体之者迄不入付、(卷)「備後・医者訳而難入歟、長安寺所」 随

成切手致所持候出家へ、宰領人差添、用済次第送り出
し候由、

但当国之商人ハ、関門ニ而改め、住所切手無相違候

へは、山口迄も往来商用差許、自由ニ罷通候由、

一右通往来を致敷重候義へ、入込を防ぐ而已ならず、脱

走人を禦之主意も有之、昨年沢主水正浪士(宣喜)脱走之砌よ

り敵令触れ出し相成候由、

一諸国へ間者差出し、尤出家体之者を以、諸所へ入れ候

哉ニ相聞候、萩府之菩提寺黄蘗宗、兼而三拾人余も僧

徒罷居候処、当分僅三人と相減し、其内ニは他国産之

者へ差返し候者も為有之筈候得共、国生之僧は間牒(謀カ)ニ

出候者有之候半、尤右間者差出し候事は、一昨年比よ

り相始り候由、

一長州人小倉城下を往来いたし候者、毎日五拾人程は不

断罷通、帯刀之者へ惣而長崎用向と申断り、凡下之も

のハ宰府・清正廟参詣など唱へ、婦人召連れ候者多く

有之、惣而国元切手致所持候由
「凡下体之ものに一刀帯し
居候者尤疑へき事ニ而

此輩ニ限り多分、
婦人召連れ候由」

但本文通り婦人召連れ候凡下体之もの別而疑敷と小

倉寺社奉行上条八兵衛嘶ニ候、

一昨年於萩府浪士五人ニ而長藩人式人を殺害いたし候、

右事之起りへ、藩士兩人之もの、國中暴論に組し候義

を不可然と心付、追々諸人江も説論し候処を浪士洩れ

聞、議論之席ニ於て切掛候処、兩人も抜合せ双方不殘

及死亡候由、姓名は不承得候得共、実説と申事ニ候、

一岩国一藩は本家と異論たる事無疑と取沙汰ニ候、尤兼

而本藩より之会釈振り無礼ニ而、吉川本藩江差越候節(疑カ)

本門より出入之処をいつも門普請と相断り、くぶり門

より為致出入候類ニ而も不熟之情態被察候と申事ニ候

但当之吉川器量よろしきとの評判、

一清末藩毛利讚岐守騎馬之達人ニ而、悍馬を能く乗廻し

候由、肥後之伯耆基右衛門と申者嘶ニ候、右讚岐守本

家之氣入ニ而任用を得候由、

一長府藩毛利淡路守ハ本藩愛遇無之様ニ而、尤年内より(元周、左京亮)

頗ル悔心有之哉ニ相見得、内実ハ本家と不致合体哉之

向候得共、前条記し置候通、三好内蔵執柄ニ而、本藩

江混と引合居候ニ付、不得已時宜と相見候由、

一山口は未築城最中ニ候得共、大臣分之者共追々萩より

引移、尤大膳大夫様御父子も木屋懸ケ様之御住居ニ候

由、

〔(朱)御簾中様も御引移相成候由〕

但三条卿ハ日上と申所、壬生卿・四條卿・五條卿

錦小路卿ハ湯田町と申処ニ御寓居、いづれも山

口廓内ニ而、日上ハ宮市之方、湯田町より沓里

半も相隔候由、

一薩州より何方へ兵卒指し向ケ候も難計とて、全国上下

昼夜戒心罷居候由、但本文之義は追々末々、之者共話出之由

一田の浦江時々長州人押渡り、陸上自由ニ致徘徊候、右

ハ薩州人数同所江着到、小倉番兵之内江紛れ居候事共

無之哉と探索之体見受候段、小倉藩之もの直嘶、

一小倉城下海岸二箇所、台場新築取掛居候処、これも薩

藩と申合セ造築相成事と長州人致取沙汰候由、

一奇兵隊之者共大里江押渡り、同所台場詰之久留米番兵

と一手ニ相成、三百人も人数有之候ハ、小倉城ハ容

易く攻禿すへしと申合候由、尤久留米番兵上下凡百五

拾人も相詰居候由、

一奇兵隊之議論は愆而暴発を主とし、動もすれハ事を急

く之様子候得共、本藩人ハ先守備を敵にし、妄発を禁

し内外之敵を防禦の用意最中と被相伺候、

一三田尻江諸方浪士輩雜居、肥薩并土州辺之者余多入込

彦山修驗道之輩も多人数罷居候由、先達而京師之人を

七卿供問者と相疑、右浪士輩之手ニ而切殺候由、

一下関辺罷居候奇兵隊、近頃ニ至り候而は暴行妄殺先相

止み候様、

一先日下関江土州藩人、荷札付之明き荷箇り四拾計船よ

り運び候由、仔細不相分と上条八兵衛嘶、

一京師ニ潜居候長州人凡四百人程も可有之と取沙汰、(久坂玄瑞カ)日

下元瑞・高杉新作なども差越居候哉ニ承及候、

一長崎江探索人差出し置、夷船渡来之有無手を尽し聞合
候由、

一対州とハ親み厚く、尤御間柄之事ニ而、夷船通行之事
共、時々彼地より内通有之哉之由、

一当月十一日京飛脚長州江到着、決而御召一条之事候半

と下評、就右清末毛利并右田山口入領主毛利内匠、当

廿四日発程之賦候処、廿日比水藩人十七人ツ、二隊、

山口江到来ニ而、遽カニ取止相成、右水府人は山口罷

居候由、

(付紙4、後掲)

一京師より岩国吉川を御召之処、吉川は病氣申立上坂を

辞し候ニ付、清末藩罷出候様相成候由、

一御召之飛脚到来後、罷登度と申者無之、数日吟味混雜

いたし、漸く内匠罷登り候様致決定候由、

一五卿方三条・壬生・四条
五条・錦小路 昨廿七日下関到着被致、今日同

所亀山宮参詣、明日引島台場見廻り之由、

一下関近辺之台場調練発砲、是迄ハ巷ヶ月ニ六齋式日相

立居候処、此節より十五日之一日と取究候段、先日触

達し相成候、

一綿井油、下関積出し屹と差留め相成候段、今日触出し
之由、右は諸方商人同所江蔵入いたし置候品柄ニ而、
諸人大迷惑之由、

子三月廿八日迄記之

(付紙1) 一唯今迄ハ長藩模様、内備未整向ニ而、山口築城は勿論

海岸台場等もそこ／＼之事と相見え候得共、時日を經

守備嚴重成立候上は、中々六ヶ敷要害と見受候と長安

寺之僧晰し但内備完成之上ハ彼より打而出る之、
用意も候半と之説尤と聞受申候

(付紙2)

一神鑑隊神威隊
之事故ハ社人、金剛隊ハ僧徒并修験道、其内一

向宗尤多し、義勇隊上関詰之頭取城亀之介と申者之由

長安寺晰

一三田尻百間堤固め 毛利内匠一万二千石
八家之内

一同所堀内固め 船奉行 村上源五右衛門四千五百石

一当時下関詰 宍戸美濃人数千五百人計

(付紙3) 熊本城下高田原長安寺住僧晰三月晦日夜承得

一先月長防二国、農商惣体より冥加金と唱へ、此節山口

城築造ニ付献金いたし候由、尤上より命令は無之、人々分限ニ応し志次第致献金、家内中ニ而夫婦妻子別々に差出候者も為有之由、余程之金数ニ及候と取沙汰、一財用ハ未乏向と被相伺候、其証拠ハ、國中通融札割割ハ引上り致通用候を以考合候へは、金錢未乏義と被察候との嘶、

一芸州広島之仏護寺ハ一向宗之大地ニ而、長藩とハ間柄之由候処、山口築城ニ付一万両寄付いたし候由、

一萩之一向宗清光寺、長候と一門ニ而兩國随一之大地、右之外長防ニて一向宗大地余多有之由、

一山口城前堀ハ大島郡より受持近々取付之筈、

一國中一統、天下は毛利家之物と心得居候体ニ而、頓とのぼせ切り候様子、乍併表向ハどこまでも攘夷を主張し、交易を拒むの主意ニ而国内を致鼓動候由、

一岩国一藩ハ本家と異論と見受候、先日下関固め之義、本家命令ニ候処、吉川病氣を以断、昨年来萩より之直使岩国江差越候共、病氣勝ニ而不致面会候、近日吉川

家中之何某、兼而狂乱之者候処、或寺へ押入り、住持僧を切掛逃去候処、本家奇兵隊之所為ならんと岩國中騒動、早速召捕方ニ手分いたし候由、右旁を以致勘考候に、決而異論ならんと長安寺嘶し、

一先日長州間者出家体之者、芸州広島城内江水門より忍入候を芸人見咎候得共取遁し候由、

一毛利藏人ヨシキ領主ヨシキ当分引入居候、此者・毛利出雲之兩人、

先達より上京之筈候処、引入相成上京も取止め、(毛利元圃)長府侯并国司主計・貴島又兵衛初手遊撃隊之引廻し人上京ニ相決し候由の

風聞、

但上京人名之義、本文とハ相違有之候得ハ、孰れを実否と難定候間、両説共記し置候、

一両国浦々当分船留め相成居候、右は上京之手当と取沙汰此説は実説と、相聞得候、

一永井雅榮、昨年死去之時辞世

君かためすつる命は惜しまねと

なを思わるゝ国のゆくすゑ

一芸州宮島江浪士多人數入込み居候を現在見当り候由、

四拾人も可有之との事飲遊自由、
之由

右之外ニも種々作り立、三田尻辺ニ而専らうたひ囉し候由、

米と塩。

一同国広島江ハ長州人浪士決而不入付様敵令相成居候由
一小郡口平坦と相見得候ニ付、元山岬之打廻りより上陸

いたし、小郡江攻入方可然欵、宮市口・萩口・津和野

口ハいつれも險路難入場所と相見得候との嘶、

小倉藩

(付紙)
大杖ぶしとか申すものニ而

をふい／＼毛唐人。そのふねこつちらへ渡しやがれ。

一当藩諸士人数五拾石已上三百株、其余を組外と唱へ、
徒士之株三百、都合六百株、輕卒は其外之由、

船のやつらはびつくり仰天し。いゑ／＼唐人ぢやござ

一当分大里番兵一隊、廿日交替ニ而相勤、城下客屋江一
隊相詰居候、一隊人数上下式百人余も可有之欵、

んせぬ。交易のつみまわし。どふぞ通してくださんせ

一昨年下関戦争後、於当藩も砲造ニ手を付、寺鐘類(勿)ハ必

やれ／＼うるさい不忠もの。大筒で。何の苦もなく一

打に。油と綿とで。どんど、燃上り。

論、領国一統暗燈之下皿ニ致る迄、銅器は惣而買上ニ
相成、廊外南手に水車仕掛之鑄製場取替、大小砲鑄造

よいしよこぶしとか申すものニ而

最中ニ候、

焼バ名が立やかかねばならぬ。やいてよいのハさつまい

一城下浜辺ニ二ヶ所台場築立、追付惣成就之体、随分よ

も。

き構と相見得、大砲式拾封度已下居付、未挺數ハ不取

又

究由、

いもや砂糖はなふてもすむが。なくてならぬハ

一当藩ニ於てハ全く退守之方を専らとし、進取之略は毛

頭無之、万一長藩より攻寄候へ、十月十五日之籠城は可相叶、其内ニは薩肥之応援も可有之との軍略之由要路之者より承得候、

一長防辺探索方等格別手を付候義無之、漸近日少しジ、聞合せ方ニ心を用候体、

一京師御模様、幕議兎角因循ニ赴き候を汲受、諸事手管間後れ、怠惰ニ陥り候向と被相察候、

一先達而当路之者兩人秋月庄左衛門 茂呂三郎平熊本江差越、彼藩手当

向其外之事情聞合候由、小倉は弱藩故迎も長藩に難敵、薩・肥を倚頼之心底ニ而、其義ハ家中之者共追々口頭にも相現し候得共、信実は肥後に手寄之方重く、御国ハ外親く内疎き様子と見受申候、

一門司浦と田の浦之間ニ芽刈明神之鼻と申所、長州檀浦へ差向、差渡し七八丁も可有之、前田ハ少し筋違ニ而、是も十町内外之隔ニ候処、此山腹ニ小き台場二ヶ所築立有之、右は元來異船攘撃之用意と相見得候得共、此台場より檀浦・前田を見下し致発砲候へ、兩地台場

ハ可粉碎屈竟之地形と見受申候、尤檀浦火藥庫も目前ニ見得申候、

一大里ニ久留米より台場築き、番兵上下式百人余も詰居候、右は昨夏下関戦争後、彼藩牧和泉之党(真本)より致建言候哉、台場を築番兵を備る事と相成、当分も其假ニ有之候、右台場詰之者共、下関辺長州人浪士輩と于今致往来候哉ニ相聞得(ト)、別而当藩人嫌ひ悪む様子ニ而、追出し度所存と相見へ候得共、力不及無是非罷在体と被察候、

一当藩よりも大里江番兵一隊差出し置候得共、台場迎ハ無之、仮屋様之所に野戦砲式三挺ころばし相詰居候、ケ様之事態故、久留米番兵も頗ル凌蔑之体を現し、時々同所市中なと致横行候事共為有之由、依之当藩ハ弥久留米人を嫌ふ之事情と相見え候、

一先々より中津藩と不和之由、中津城下海手ニ当藩之飛地少々有之、其所海防屈竟之場所ニ候故、昨年彼藩より右之地を借受、台場致造築度、又ハ替地ニ而もいた

し具候様及相談候処、種々之異論申立不致承引、とふ
く、台場築方取止ニ相成候由、

一 國中上下茶湯流行、鉢植を玩ひ、婦女ニ戯れ、散々之
風俗と被相伺候、要路執柄之者ニハ

家老

小宮四郎左衛門

用人四郎左衛門実兄
秋山庄左衛門

寺社町奉行

上条八兵衛

元ノ奉行郡代兼務
茂呂三郎平

右之数輩と相聞へ候、上条・茂呂杯は時々面会、其内
上条は稍骨幹有之者と愚見ニ候、

一 城の東手半里計に、妙見山と申所少し引上りたる地形
ニ而、前面平田海に続き、うしろに山アリ、山上より
大里・田浦辺并長州地一面ニ見渡し、形勝之地ニ而、
其辺を足立村と唱へ、大地之寺院・脇坊并民家も畑立
ち、兵士屯所によろしき場所と見受申候、

熊本藩

一 先月廿四日、沼田勘解由大目付従京師帰國、十藩密命

を奉し罷下候由ニ而、則君侯御前ニ於て、執政兩三輩
并溝口藏人等会合ニ而、終日密議有之、其節列席之外
ハ執政ト雖モ毛頭洩れ聞さる由、極々秘密之向被相伺
候、

一 此節手当人数、粗承得候処左之通、

備頭

溝口藏人五十歳余

人物衆人之称美スルものニ
而此已前引込居候仁之由

大目付

沼田勘解由

一 備人数大数式千三千之間

一 大砲四拾挺壹挺ニ五人付

ノ式百人

一 小銃隊三百人

但歩卒

一 騎馬隊番方と唱式組壹組五十人

ノ百人

一 弓隊凡百人

右之外ニ着座衆と唱へ候大臣分之者共手人召連れ、

一備ニ幾頭と相付由、右頭数不相知候、

右一備用意相成候哉ニ承及候、尤極々機密ニいたし候

ニ付、鎚成事ハ不相分、君侯名代等之人名も未相知候、

一当月十四日、山鹿之海手小代山と申所ニ浪士立籠り候

とて、一騒動為有之由、右は水府浪士三十人計りと取

沙汰ニ而、召捕に取掛候処、尽ク亡失、薦僧体之者老

人捕得候由、

但高瀬町之医者松元大清と申者、轟武兵衛・山田

(信連) 十郎など一味之者ニ而、兩人被召捕候砌より、

逼塞被申付候得共、他国出生輩不断相通し居候

由、右高瀬町小代山之麓ニ当り候地形故、決而

大清連累之浪士ニ候半と熊本長安寺浄土宗之住持

僧直嘶ニ候、

一前文一件ニ付、国中旅人取締別而六ヶ敷相成、他所よ

り在付居候婢僕輩迄生国江差帰し候様仕向之由、

一長安寺之僧嘶ニ、国許より長藩江内通之者可有之は必

定ニ而、国事彼藩江相知れ居候事共聞届候、尤轟武兵

衛などと被召捕候始妹細々於彼地聞得候ニ付而は、内応

無疑、しかれハ松元大清疑敷との嘶也、

但長安寺僧ハ、当月二日国元より内命を受発足、

芸州より岩国・宮市辺差越、今卅日当処江帰着、

筑前藩

一昨冬当藩より長州へ金壹万両被借し遣候由、筑前蔵方

役人直咄との風聞、

一当月廿四日晚、当藩要路之役人牧一内と申者を致刺客

候由、右刺客は兩人ニ而行衛不相知、翌廿五日に牢屋

江多人数押入致入牢居候何某暴論家との取沙汰を救出し逃去候

由、大騒動と相聞得候、

中津藩

一昨夏下関戦争之前、長門侯より御直書之往反有之、当藩

よりも御墨付被差遣候哉子細は不相分候得共、攘夷之事ニ可有之との風評、戦争後

右御墨付取返し度と中津藩役人致心配候由、其後如何

成行候哉、不相分と小倉藩役人咄し、

一近日当藩より長州江金子借用之御相談相成候由、長安寺之僧嘶し也、就右此僧なとハ当藩長州江組し候半と疑念ニ候得共、虚実不分明ニ候、

一小倉とハ兼而不熟之上、昨夏以来之事件ニ付、弥嫌疑を生し、長州徒党之由、小倉藩申合居候得共、是以実否不慥、

久留米藩

土佐藩

一右両藩も疑敷と小倉藩人説ニ候、尤此両藩より浪士多人數長州江入込候ニ付、右旁を以懸念いたし候義とも相見得申候、何分確實未分明ならず、

右之通承得候事件条記仕候、何分諸説紛々実否相分不申、殊ニ長藩は旅人取締方追々六ヶ數相成、仮令首尾能入込居候共、土地之者細事旅人江不為嘶聞由唯外表之見聞而已ニ而、機密聴と相洩れ不申候間、

旁御推計被下御取舎被為在候様奉存候、

子三月晦日

重野厚之丞(安齋)

付啓

長州全国絵図面は、先日松方助左衛門江相渡し差(正巻)

上置候間、最早御入手相成候半と奉存候、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二六七号

文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・五種 横四一・八種

六四 久光公ヨリ尹宮へノ申立

(端裏朱書)
「尹宮江之申立扣 甲子三月」

願之大意

朝廷ヨリ御召ニ付去秋上京、公武御一和周旋仕候処当分ニ至り先可也ニ御一和相成、且摂海守禦も幕府ヨリ御取付之御模様、一橋中納言(徳川慶喜)禁裏御守衛総督、摂海防禦指揮等被仰付候ニ付而は、最早御警衛向等御懸念之事も被為在間敷、尤諸藩永々輩下ニ輻輳いたし候而

は疲弊は勿論、却而京地之混雜も有之、不可然奉存候ニ付、御用ニ而被召寄候分は、此涯

朝廷ヨリ御暇被 仰出度奉存候、

一 宸翰一条は御存慮之義、私より迫而申上候義に無之、

折角 公武御実意御一和之基本被為立度存詰候処より

極密草稿相認御賢慮奉伺候処、尤之事と被思召候旨承

知仕候ニ付、御尤ニ被思召候ハ、御取成之程奉願置

候事ニ而、是非ケ様と迫而申上候義ニは曾而無之義は、

御案内通之事ニ御座候、然処至近比段々落書等有之、

偽書杯申立候哉ニ承知仕、別而恐入奉存候、就而此末

如何様之讒口沸騰仕も難量、恐縮千万奉存候得共、何

そ私を宮候之心得ニ無御座、 皇国之御為と只管存詰

候処より申上候義ニ御座候得は、罪を蒙り候事ニは至

間敷とは存奉り候得共、若哉此末如何様之讒口申立、

十八日以前之 偽勅之如キ事共ニ被 仰出候而は以之

外之次第、私は何様相成候而も不苦候得共、乍恐、

朝憲之輕キニ当り候義ニ而、深重恐入奉存候、此義は

閣下御案内通之御事御座候ニ付、幾重ニも申上置奉り候、

一 此末之御見留如何付させられ候哉、一 橋兵権も無之者

之守衛総督、何共合点参り兼、且長之御処置等如何被

遊候御見込ニ御座候哉、奉同度奉存候、

一 賄路公行武田北小路有初無終御誠心、

一 夷人御処置、如何御取計之思召哉、

一 不容易世態御兄弟之御間、若哉御不熟ニ而ハ如何、三

公方前後刃同断、

文書原寸 縦二六・六種 横二九種

六五 公武合体武備充実ニ関シ伊達伊予守ノ演

舌扣

〔繪裏朱書〕 伊達氏書留「甲子年」

演説控

○昨日御沙汰之趣は奉畏候、愚意之義是迄申出置候間、

今更心付之ケ条も無御座候得共、沈黙仕候様にては恐

入候間、当否ハ不論両三ヶ条申上試候、毎度申上候様
万般之御所置結構ニても、乍憚

君臣之御名分御正敷

朝廷御尊崇之御誠敬御違失御座候而ハ無本有末、真実
之

御合体トハ難奉申上候故、幾重ニも此大基本御猛省被
為在度奉願候、

○朝廷御祭日 御国忌は被為慎度事、

○日之御門より直ニ常御所江通候趣御手薄之義ニ付、何
等と御所置相成度事、

○泉誦寺内御淨掃之事、

○親王御始薨去於

禁中廢 朝之御方ハ、海内鳴物停止之御沙汰ニ相成度
事、

○御宸翰を以被 仰出候御旨も被為在候末 台慮之趣御
開示ニ付、銘々藩屏之任、海陸武備充実粉骨勉勵可仕
事ハ勿論ニ御座候、於雄藩は万事国内ニて無差支候得

共、小藩は立志發憤仕候而も不及国力儀數々有之候得
は、於大阪等之所、官より大小銃製造局御構相成、所
望之砲礮以元価御渡方有御座度、尤外国江注文之武器
類無差支御世話被成下度、尤総而割増等不懸様有之度
追々ハ小藩之向江^(欠損、茂カ)戰艦拜借をも被 仰付度事、

文書原寸 縦一六・三種 横八三・二種

久光公ヨリ伝奏ヘノ願書草案

朝議參予官位御免賜暇歸国ノ件

^(編纂未書)
「甲子三月」

^(編纂)
「伝奏江差出候願書草稿」

私儀一昨年以來莫大之

朝恩を奉蒙、殊ニ去秋上京仕候様

朝命承知仕候処、其砌英夷戦争之際、國務多端之折柄、

^(島津茂久)
修理大夫一人ニ而は指揮難行届儀も御座候故、不得止暫

時 御猶予奉願候得共、八月十八日暴論輩 御退黜、正
議ニ被復候ニ付、迅速上 京仕候様再三之

朝命難默止、國務打捨置、九月十二日国元発足、十月三日京着仕、

公武御一和

皇国挽回之御根軸被為居候様との決心ニ而、大樹公御上洛迄も催促仕精々尽力仕含御座候処、旧臈官位可被仰付御内命承知仕、不肖之私家督ニも無之故、達而御断申上置候得共、不図も正月十三日

朝議参予被 仰付候ニ付

御推任叙之奉蒙

宣下、同十七日参 内被 仰付奉拜

龍顔

天盃頂戴仕、殊ニ御鞍置御馬拜領被 仰付、重疊難有仕合恐入奉存候、就而は今一涯抛身命奉報

天恩度奉存候得共、全体多病之上、風土ニ不相馴故ニ候哉至近比腰脚痛時々相発、別而難儀仕、参予ニ付而も不参内も御断勝ニ而誠以奉恐入次第ニ御座候、依之不容易御時節申上兼候得共、病身罷成候ニ付而は十分之御奉公も

難相勤儀と心痛仕罷居申候ニ付、何卒此涯

朝議参予御免被 仰付、帰国之御暇被成下度、偏ニ奉願候、左様御座候ハ、国元温泉江入湯仕、精々加療養全快之上、尚亦御用之節は速ニ上京可仕奉存候、尤参予御免奉願候ニ付而は、官位迄も御免被 仰付被下度奉存候、是等之趣不惡御聞取被成下、可然様御執成之程伏而奉願候、以上、

三月

島津大隅守

文書原寸 縦一六・五糎 横八七・六糎

六〇 沼山老隱ノ海軍勃興論

一冊

九八七ノ一

一銅・鉄・材之三ツノモノハ海軍ニ属スルヨリ論シ来レリ、夫ヨリシテ万貨并産スルノ勢不言シテ明ナリ、一財ヲ開クノ序、人有テ而后行之可シ、一三財ハ悉ク海軍場ニ輸入ス可キコトヲ天下ニ示ス可シ一必用ノ人材ハ海軍ノ用ニ備フ、藩々命ヲ受テ必承服ス

可キノ令ヲ示ス、

一三財ノ内船材ハ海外ニ輸出ス可ラス、

一全国ノ因循ハ当然ノコト、不可驚シテ不足憂、唯正氣

ハ海軍ノ一途ヨリ發生ス可シ、

一海外ヲ全治ニ帰セシムルコトヲ期ス、実ハ内地ノ治化

是ヨリ大ナルコトナシ、海軍ノ功用是ニ於テ視ル可シ、

文書原寸 縦一六・五種 横五九・七種

九八七ノ二

〔表紙〕
「海軍問答書」

海軍問答書

方今天下興運ノ大機會ナリ、更張ノ道様々ナル可シ、

就中至急ノ要領ハ如何、

強兵ノ一途ナリ、万事ハ是ヨリ挙ル可シ、

強兵ノ道、人々見ル所異ナリ、或ハ固有ノ短兵ヲ主

張シ、或ハ西洋ノ銃陣ヲ主張ス、二ノ者ノ外、強兵

ノ実用有ル可哉、

往者ノ如ク本邦一國ノ戰爭ナレハ、二ツノ者何モ用ユ可シ、方今航海大ニ開ケ、四海ノ通路平陸ヨリモ便捷ニシ

テ、千里モ亦比隣ナリ、海外ノ諸夷引キ受スシテ叶ハ

ヌ時勢ト成リ、海軍ニ過タル強兵有コト無シ、

諸夷ヲ引受ハ勿論ナリ、我固有ノ義勇ヲ振ヒ、海港

ノ要衝ヲ取固メ、必死ノ戰鬥ヲ為ス時ハ必シモ敗ヲ

取ルノ道ニハ非ス、是亦強兵ニアラス哉、

方今ノ形勢本邦一國譬ハ大船ノ如ク四海ハ総テ平陸ナリ

我陸兵ヲ以テ彼カ海軍ヲ待ハ、船ニ乘リテ陸上ニ戦カ如

シ、彼主ニシテ我ハ客ナリ、我ハ進テ戦ニ難ク退テ守ル

可ラス、彼ハ利ヲ見テ進ミ不利ヲ見テ退ク、是其勢致ル

、コト有テ致ス可ラス、且本邦四方八達、海運ニ非ハ無

シ、彼若シ二三艘ノ軍艦ニテ海運ヲ鎖ス時ハ、全国ノ通

路忽ニ絶テ生民ノ困難云可ラス、江戸・大坂ノ如ハ百日

ヲ待スシテ飢餓ニ至ル可シ、夫ノミナラス、東浮西出近

海ヲ横行セハ、沿海ノ要港尽ク守サルコトヲ得ス、是徒

ニ奔走ニ疲労シ戦ハスシテ屈スルナリ、是等浅近ノコトヲ察シテモ海軍ヲ起サスンハ有ル可ラサルヲ知ル可シ、

海軍ヲ起ス可キハ聞ヘタリ、是ヲ強兵ト云ハ如何、

凡人ハ貴賤賢愚ニ拘ラス一心決定シ動サルヨリ強ハナシ是則志ノ奪フ可カラサル者ニシテ、必死ノ地ニ入レハ心必ス決ス、古ノ兵ヲ善スル者ハ舟ヲ沈メ水ヲ背ニス、是皆必死ノ地ニ陥テ必勝ノ策ヲ定ルナリ、今海外ノ諸夷ヲ引受ケテ戦ニ、彼ハ進テ攻撃シ我ハ守テ応接ス、進ム者ハ死地ニ陥リ、守ル者ハ後ヲ顧ル、譬ハ宇治・勢田ノ橋ヲ引キ敵ヲ待カ如シ、大友皇子ヲ初トシテ、源頼政・木曾義仲・承久ノ乱・新田義貞、凡五度ノ戦ニ一度モ其利ヲ得ルコト無ク、近ク海外ノ事ヲ挙ハ清国ノ英・仏ト処々ノ戦、魯ノ英・仏ト黒海ノ戦、墨西哥ノ墨・仏ト両度ノ戦、安南ノ仏トノ戦、海陸ノ勢進守攻拒主客ヲ殊ニシ、勝敗既ニ顯然タリ、海軍ハ是ニ反シ、随フ処椅角ノ用ヲ為シ、一船即必死ノ地ニシテ士卒力ヲ一致ニセサルコトヲ得ス、孫子云、兵士甚陥則不懼、無所往則固、入深則

^(拘カ) 專、不得已則闘、真ニ妙言ニ非ン哉、

海軍ノ強兵タルハ聞ヘタリ、然ハ今日ニ当テハ陸兵

ハ用ルニ足サル哉、

は何ノ言ソヤ、我ハ唯主客ノ勢ヲ云コトナリ、

海軍ヲ起スノ処置如何、

方今ノ憂ハ、天下列藩各便利ヲ占メ人心一致セサルヨリ大ナルハ無シ、四海万国ヲ引受スシテ叶サル時勢ト成リ、一国一致セスシテ何ヲ以テ天下ヲ興ン哉、況ヤ新ナル海軍ヲ起スニ尤以テ一致ノ処置ニ出スンハ有ル可ラス、今幸ニ

天朝 幕府兵庫ニ於テ海軍ヲ起スノ命令ヲ出サレタリ、兵庫ハ大坂ノ咽喉ニテ本邦第一ノ要港ナレハ、海軍場ニハ至極ノ形勢ヲ得タリト云可シ、於是更ニ亦維新ノ令ヲ出シ、左ノ件々ノ大綱ヲ天下ニ布告ス可シ、

一 総督官ニ海軍一切ノ全權ヲ命シ、敵ニ有司文法ノ牽

制ヲ禁ス、

一 列藩ニ海軍ヲ起ス大趣意ヲ示シ并志有ル人ハ此ニ來

リ修行ス可ヲ諭ス、

一此ニ来リ修行スル人ハ衣食ノ用途官ヨリ之ヲ給ス、

一総督官諸生ヲ率テ長崎ニ出張シ、洋人ヲ呼迎ヘ三年

ヲ期シ伝習セシム、

一海軍場中信賞必罰、敵ニ軍法ヲ以テ行可シ、

総テ伝習ニハ費用ヲ厭フコト無ク十分ノ修行ヲ尽サシメ

海軍一切ノ規定ハ西洋ノ法ヲ斟酌シテ行フ可シ、本邦ノ

人ノ聡敏ナルハ洋人モ亦嘆美シテ亜西亞洲中第一ト称シ

尤事ヲ為スニ晬ケレハ、三年ヲ待ス海軍ノ術我是ヲ得コ

ト疑ナシ、伝習既ニ熟スルニ随ヒ、別ニ將校ヲ用ルコト

ヲ禁シ、総テ此諸生ヲシテ軍艦ノ職役ヲ命シ、其才能長技

ニ随テ任用シ、匹夫タリトモ一艦ノ長・一軍ノ將ニモ挙

用ヒ、貴族タリトモ所長ナケレハ用ヒス、一切太平因循ノ

習弊ヲ去リ、軍国敵齊ノ法則ヲ行ヒ、信賞必罰威令上ニ明

ナル時ハ一軍齊肅、命ヲ用サルコトヲ得ス、且夫海軍ノ

実用タルヤ、海外ノ事情ニ達シ、器械ノ精微ヲ尽シ、万

里ノ風濤ヲ凌キ、更ニ又各国戦闘ノ実地ヲ見聞セスンハ

有可ラス、軍艦十艘ニモ及ヒナハ、代ル／＼海外ニ乗出

シ各国ヲ巡観スル時ハ、聡明ヲ開キ胆氣ヲ壮ニシ、彼カ

長ヲ取り我カ短ヲ補ヒ、我カ長ヲ以彼カ短ヲ制シ、十年

ヲ待スシテ全国ノ人心奮勵發動シ、外夷ノ恐ル、ニ足ラ

サルノミナラス、却テ万国ヲ呑ノ正氣ヲ發生スルニ至リ

テ、今日恐怖ノ人情ニ比スルニ、真ニ^(星カ)尽夜明暗ノ変スル

カ如ナル可シ、方今海外ノ各国、英夷尤強大ト称ス、其

国タルヤ地球ノ西北ニ偏スル一孤島ナレトモ、環海ノ便

利ニ因テ今日ノ盛大ヲ為スニ至ル、本邦ハ地球ノ中央ニ

位シ、環海ノ便利四通八達、英ニ勝レルコト万々ナルノ

ミナラス、人質ノ聡明ニシテ勇銳ナルコト、更ニ又外国

ノ比類スヘキニ非ス、盛運年ヲ逐ニ随テ非常聡明ノ人傑

輩出シ、我カ大道ヲ明ニシ我義勇ヲ盛シ、外夷ヲシテ理

屈シ鋒挫ケ、遂ニ我仁義ノ風ヲ仰クニ至ラシムルコト、

今日海軍ヲ起スニ本ツクニ非ン哉、

天下列藩ハ如何

一致ノ海軍ハ本ナリ、天下ノ海軍ハ末ナリ、其本既ニ起

ル時ハ其末モ亦随テ起スヘキハ勿論ナリ、乍去一致ノ根本強盛ナラサレハ、天下ノ海軍一ニ帰スルコト無ク、却テ争擾ヲ為スノ媒ト成テ、天下ノ用ニハ立可ラス、且夫方今ノ勢道理明ナリト雖モ、兵力強カラサレハ不逞ヲ制スルコト能ス、兵力強ト雖モ道理明ナラサレハ人心ヲ服スルコト能ハス、道理明ニ兵力備テ、正ニ初テ不逞ヲ制シ人心ヲ服サシム可シ、是唯外夷ニ処スルノ道ノミニアラス、我内地ヲ治ルニモ然ラサルコト得サルナリ、夫京師ハ天下ノ根本

至尊ノ座マス処、礼案征伐ノ出ル処ナレハ、兵庫ノ海軍ハ即チ一大強兵ノ親軍ナリ、此ノ海軍強盛ナレハ天下ノ海軍一ニ帰シ、我カ令スル処ニ從テ、外ハ以テ洋夷ノ侵寇ヲ防キ、内ハ以テ不逞ノ人心ヲ制ス可シ、加之天下ノ人情ヲ通シ天下ノ人傑ヲ挙ケ、天下ノ衆智ヲ尽シ、正大公共ノ王道ヲ行玉シニ内地ハ云ニ及ハス、海外ノ各国迄自然ニ王化ニ從サルコトヲ得ス、何ソ唯々区々トシテ一国ヲ守ノミナラン哉、

天下列藩ノ疲弊極レリ、海軍ヲ起サハ更ニ疲弊ヲ重テ却テ紛擾ヲ生スルニ至ル可シ、如何、

費用ノ甚キハ軍備ヨリ大ナルハ無シ、軍備ノ尤大ナルハ海軍ニ過タルハ無シ、方今海外ノ各国、費用ヲ厭ハス国力ヲ尽シテ軍艦・炮器ノ精微ヲ極メ海軍ノ兵勢ヲ盛ニスルハ、死生興亡目前ニ在テ、一身一國現実ノ利害急迫ナレハナリ、本邦一水ノ外四海皆戦争ノ巷ニシテ、四夷八蛮縦横ニ航行シ、不可云ノ禍乱方ニ目前ニ起ラントス、是其勢破船ニ乗テ大洋ニ浮ニ似タリ、風浪一タヒ起ラハ覆没セサルモノ幾希ナリ、如此危急ノ時ニ当リ、天下列藩宴然トシテ太平ニ安シ、費用ヲ厭ヒ軍備ノ実用ヲ差置ハ、譬ハ全身麻痺シテ疾痛痾痒ヲ覺ヘサル者ト相似タリ、至愚ノ甚シキニ非ン哉、乍然二百年來太平、武ヲ忘ル、ノ弊政ニテ釀シ成シタル人情ナレハ、恐多モ廟堂ノ上断然トシテ自ラ罪シ玉ヒ、古人ノ所謂郊ニ舍スルニ則リ、露屋雨室モ厭ハセ玉ハス、無用ノ費ヲ省キ国力ヲ強兵ノ一途ニ打懸玉ハ、天下ノ人心自然ニ感動シ

興國ノ氣象ニ変スルコト鏡ニ懸テ見ルカ如シ、惣シテ天下列藩ノ疲弊今日ニ極リタレハ、如何ニ無用ヲ省カレタレトモ海軍ノ費用ニ供スルニ足可カラス、去ラハ又天下ノ農商ニ課セントセハ、農商ノ疲弊更ニ甚シク、忽ニ天下ノ人心ヲ失フ可シ、天下ヲ拳テ既ニ是レ至困ノ地ニ落入タレハ、此莫大ノ費用何ヲ以テ弁センヤ、夫非常ノ海軍ヲ起サント欲セハ、先非常ノ費用ヲ弁セスンハ有ル可ラス、非常ノ費用ヲ弁センニハ非常ノ事業ヲ起サスンハ有ル可カラス、非常ノ事業ヲ起スニハ

幕府列藩均シク課金ヲ出サレサルコトヲ得ス、試ニ高一万石ニ年々百兩ノ金ヲ課スレハ総計大凡二十四五万兩内外ナリ、此課金ヲ以テ元トシテ左ノ件々ノ事業ヲ起サント欲ス、

一 銅鉱ヲ開

一 鉄山ヲ開

一 船材ヲ貯

本邦銅鉱ノ富海外比類無キト称シ、産物ノ最第一トス、

九州ニテ宝库ト称スル銅山十ヶ所ニ下ラサレハ、広ク天下ニ吟味セハ幾百鉱有モ知ル可ラス、如此宝库有リテ今ニ開サル所以ノ者ハ、邦内人民銅ヲ用ル所作ノ寡キト、銅座ヨリ買入ル直段ノ甚卑下ナルトニ因ルコトナリ、

銅山ニテ紅銅ニ吹上ルコトハ嚴禁ナル故ニ、アラ吹ノ銅ニテ銅座ニ渡シ、銅座ニテ紅銅ニハ吹上ルコトナリ、アラ銅二百目ヲ紅銅ニ吹上ルニハ、八十目ノ雜費懸リテ百二十目ノ紅銅ト成、銅座ニテアラ銅二百目斤ヲ三匁五分内外ニ買入ル、故ニ盛ニ出ル銅山モ総テ廃止ニ及ヘリ、

今海軍ヲ起スニ、銅ノ入用夥シキノミナラス、外国ニテ高価ナルハ更ニ驚ニ堪タリ、

幕府ヨリ和蘭へ渡サル、紅銅一片百六十目斤也銀八匁内外ナリシニ、諸夷進港以來ハ俄ニ引上テ、當時ハ拾二匁内外ト承ル、去レトモ、彼等相互ノ直段ハ更ニ亦高価ナルコトニテ、其一証ヲ拳ルニ、清國ニテ咸豐錢一貫二百文ヲ以テ西洋用番銀トル一円ニ易ルコトナリ

成豊錢ハ其質甚悪シクシテ目方モ又僅ニ三分ナリ、

我寛永錢寛永錢ノ目方六分ヨリ一匁二分迄ニテ十ニ比スレハ文ヲ撫シ見レハ一文九分ニ毛ナリ

三分ノ一ナレハ、一円即チ四百文ニ相当ス四百文ヲ斤ニ直ス時ハ

二斤三合ナリ、一、夫ノミナラス、紅銅ト錢銅トノ位、斤百六十文ト成

善惡遙ニ隔タレハ、紅銅一斤二拾匁以上ニ上ラサレ

ハ平允ノ直段トハ云可ラス、惣シテ海外各国ニテ銅

ノ高価ナル所以ハ、軍艦・炮器ハ論ナシ、百般ノ器

物銅ヲ用ルコト夥シキ故、何程掘出シテモ余有コト

ナシ、且又墨西哥ニテ銀ヲ産スルコト夥シク、近十

年来尤盛ニ掘出シ、邦内鉱ヲ攻ルノ廠三千余所ニ及

ヒ、各国番銀三分ノ二分ハ墨西哥銀ナリ、是ヨリシ

テ銀価下落シテ、銅価ハ益々上騰スト云、本邦ニテ

ハ銀ハ尊ク銅ハ卑ク、各国ト表裡ヲ相成シタル所ニ

尊ノ銀ト卑ノ銀トヲ比較シ、交易通用ノ目方ヲ定メ

金ト銅錢ノ通用ヲ禁セラレシ故金ハ彼ニ比較シ直段ヲ上ラレシ故ニヤ相当ス

銅錢ノ値ヒ定ラスシテ一錢拾文ニ当レルヲ、三文四

文ニ密売スルニ因テ、九州ニテハ絶テ銅錢ハ無コト

ニ相成リタリ、是国損ノ甚シキニ非ン哉、

銅ノ直段如此高価ナレハ、夫ニ応シテ銅山ヨリ買入ル直

段モ又相当ニ引上レハ、天下ノ宝庫一時ニ開ルコト疑ナ

シ、海軍莫大ノ費用ヲ弁スルニ、此一途ヨリ大ナルモノ有

ル可ラス、銅ニ次テハ鉄ナリ、軍艦・炮器一切ノ用是ヨリ

大ナルハ無シ、曾テ聞、奥羽ノ二州尤鉄ニ富テ処々驚ヘ

キノ鉄塊山有ト、是等ノ山ヲ開、便利ニ因テ西洋製ノ高

爐ヲ設ケ、鎔化シテ長崎ニ運輸シ、製鉄場ニテ百般ノ工

作ヲ為サシム可シ、総シテ民間ノ日用ハ鉄ヨリ便利ナル

ハ無レトモ、本邦ニテ大ニ是ヲ用ルコトヲ得サルモノハ、

鉄ヲ製スルノ術ヲ知ラサレハナリ、譬ハ三都会ノ如キ家

屋重密ノ処、一家火ヲ失スレハ延テ千万家ニ及ヒ、百貨

諸物烏有ニ付シ、衰弊ヲ極コト是ヨリ甚シキハ無シ、此

火難ヲ救フニ鉄屋ニ如クモノ有可ラス、製鉄場ニ於テ鉄

柱鉄板ノ類ヲ製作シ都会ニ出ス時ハ、材木・瓦ヨリ一倍

ノ値ヲ益スト云トモ、百年不易ノ造作ナレハ、財力有ル

モノ誰カ是ヲ置テ彼ヲ用モノ有ンヤ或云、外国ニテ鉄柱鉄板ノ直段材木ヨリモ易シト

果テ然ラハ是ニ過タル、其外民間ノ用器鉄ヲ用ヒテ為ス可モ便利有コトナシ

ノ幾許モ有コトナレハ、其値過当ナラサレハ大ニ行ル、コト必定ナリ、船材ハ樫・楠・杉・檜・松ヲ以テ尤上品トス、近年來値ヒ上騰スト云トモ、外国ニ比スレハ尚一ト三トノ如シ、良材ニ富タル国々ヨリ買求テ、長崎ニ於テ貯ヘ置キ、軍艦製造ノ用ニ備ル可シ、忽シテ此三件ノ事ハ国々ノ奸民・山師ノモノ共目ヲ矚シ、時ヲ待タルコトナレハ、一令ヲ出セハ響ノ如ニ相応シ、辺土ノ隅々迄一時ニ起ルコト必然ナリ、下情如此ノ勢ナレハ、俄ニ是ヲ起サントセハ忽ニ奸民ノ奇貨トナリ、大破ニ及ハ分明ナレハ、先ツ一大經綸局ヲ設ケ、広ク天下ノ人材ヲ挙用ヒ、或ハ西洋攻礦ノ術ヲ研究シ、其道明白ナル時ハ奸民・山師ノ者トモ自然ニ畏服シテ、其奸術ヲ施コトヲ得ス、我使令ニ帰嚮スルニ至テハ、事業ノ大ニ行ハル、ノミナラス、又天下幾十萬ノ奸民ヲ变化シテ良民ト為ス治道ノ一術ニ非ンヤ、夫古人ノ利ヲ起スヲ戒ル所以ハ、其利ヲ憎ムニ非シテ利ヲ以テ利トスルモノヲ憎、是所謂聚斂ノ事

ニシテ下ヲ損シテ上ヲ益ス、天下生民ノ害是ヨリ大ナルモノ有コト無シ、此三件ノ利ハ天下列藩ノ置テ行ハサルコトナレハ其利ヲ奪ニモ非ス、又万民ノ業ヲ助ルコトナレハ其害ト成ルニモ非ス、更ニ又下ヲ損シテ上ヲ益、聚斂ニ出ルニ非シテ、天下列藩ノ疲弊ヲ救ヒ、海軍ノ用ニ供スルコトナレハ、夫ノ利ヲ以テ利トスル者ト天淵雲泥ノ相違ナリ、是又付シテ弁セスンハ有ル可ラス、

軍艦ハ彼ヨリ買入ルト、我ニテ製造スル、何カ然ル可哉、

西洋各国軍艦・炮器ノ製、日ヲ追テ發明シ、国力ヲ抛テ製造スル故ニ、銅・鉄・材木ノ値ヒ年ヲ追テ上騰シ英國ニテ材木乏シク成タル故ニ遠ク北亞米、本邦ニ比スレハ幾増陪ナル利加ノ屬国ヨリ運送スルト云

モ知ル可ラス、此高価ノ物ヲ以テ製造シタル軍艦・炮器ナレハ、其価ノ高値ナルハ更ニ論ナキコト也、此三品ニ富タル本邦ニテ製造ノ道ヲ開カスシテ、夫ノ軍艦・炮器ヲ買入ル、ハ、愚昧ノ甚シキト謂ツ可シ、且夫軍艦ノ命數限り有レハ、一年ヲ経レハ一年ノ値ヲ減スル故ニ、各

国互ニ識別シ一船必ス一船、彼ハ英製ニテ幾年ヲ経、此ハ墨造ニテ幾年ヲ経タリ、或ハ何処ニテ破損シタルヲ修覆シタルノ類分明ニ知タル上ニ、売買ノ時ハ、大船ヲ釣リ上ル仕懸ノ術有テ舟底ヲ吟味シ、値ノ位ヲ定ル故ニ、互ニ相欺コトハ無コトナリ、本邦ハ真ノ不案内故ニ、彼等勝手ニ欺テ十年ノ船ヲ五年ト唱へ、破損ノ船ヲ無難ト云ノ類、都会ノ古着店ノ者共カ田舎漢ヲ愚弄スルト殆ト相似タルハ、又如何トモ為ルコト能ハス、夫ノミナラス、前ニ云通り、貴ノ銀ト卑ノ銀ト比較シタル用番銀ノ値ヲ以テ買入ル、コトナレハ、此又損失モ莫大ニ非ンヤ、彼是ヲ考見ルニ、利害得失甚是分明ナレハ、銅・鉄・船材ノ経綸行ハル、ニ随ヒ、長崎ニ於テ造船廠ヲ設ケ、西洋工匠ヲ呼迎ヘ製造スル時ハ、百害ヲ去テ百利ヲ来ス、莫大ノ国益ニ非ン哉、

有客来訪、言及時事、反覆討論、相共三嘆、客曰、可識哉、乃次第其言如此、甲子三月

沼山老隱識

文書原寸 縦二四・五種 横一九・三種 一三枚

六六 長門宰相ヨリ末家以下ノ入京許可ヲ請フノ書

長門宰相ヨリ三条実美以下ノ復職ヲ請フノ書

久光公手写

〔備後朱書〕
「甲子三月 長州書」

九八八ノ一

写

私末家一人吉川監物并家老一人

御用有之候付、大坂表迄罷出候様、尤国元迄も可被遣

勅使之処、遠路之義故大坂迄被差遣候事故、末家以下三

人大坂迄罷出

勅使御引請仕候様

御沙汰之趣奉承知候、然処先達而家来并原主計上京申付

候節、勸修寺殿於藤森御接待ニ相成候儀、奉対

朝廷奉恐入候次第ニ御座候処、此度又々於大坂

勅使御引請仕候様被 仰付候而は失敬之次第、臣子之至
情不堪恐懼奉存候ニ付、僕咫尺之事ニ候得は、入京被差
許於闕下奉

命被 仰付候様奉願上候、当今之時勢、闕下之御模様如
何ニも傍觀難打過段は、委細別封を以言上仕候次第ニ而、

私父子間上京をも御願仕度程之事ニ付、折角被
召寄候末家其外之者共は

闕下近く罷出候様、格別之

御仁慈を以

御聞濟之程奉敷願候、以上、

三月

(毛利慶親)
長門宰相

九八八ノ二

別紙

謹按

二尊開闢以降

天日嗣之知食賜堂々之

皇国三千年之今日ニ至り、初而夷虜之侮慢ヲ受、

御国体難相立、何共悲憤之至奉存候、辱モ

聖明英武夙ニ醜夷掃攘之

(文久三年)

睿慮被為在、天人感動、癸亥ノ夏ニ至り、遂ニ拒絕期限

被

仰出候ニ付、臣領内ニ於テ聊遵奉之驗相立、敵愾之士
氣相勵、

天恩万分之一奉報心得ニ罷在候処、八月十八日ニ至り、

闕下變動之以第、如何之御事ニ候哉、其原由は不奉得

察、恐悚之余從來奉

勅之始末巨細申上置、於国元恐懼罷在候得共、

玉座之御安危如何可被為在哉と寢食不安、日夜憂苦罷在
候、仰癸丑以來確乎たる攘夷之

睿慮可被為變御事ニは不被為在候得共、当今人情輕薄、

万一於内地石敬瑭如キ者有之間敷共難申、若然らハ

玉座之御安危ニ相係候御大事と奉存候ニ付、

再三申上候も恐多候得共、藤原実美初メ西下之義は、
(三巻)

全ク攘夷之

睿旨貫徹致度之外、更ニ他念無之由、其憂国思

君之誠意不被為捨、早々復職被

仰付候ハ、最前確定之

御国是弥以凜然相立可申と奉存候、

且又臣父子去秋以来上京見合候様との御事、如何之

御趣旨ニ候哉と奉測候得共、去八月攘夷

御倚頼可被為遊と之

御沙汰ニ本ツキ、日夜心力を尽罷居候得共、上国之事

傍觀打過候而は、臣子之至情不相忍ニ付、父子間一人

上京仕、乍不及抽丹誠、

睿慮御貫徹相成候様仕度奉存候、

区々之鄙誠、天地鬼神ニ質シ可愧義無御座候間、乍恐

御憐察被為降

御聞濟被為成被下候様、泣血奉歎願候、臣慶親誠恐誠

惶稽首謹言、

文書原寸 縦一六・七糎 横二二・二糎

六六 中根鞆負ヨリ高崎猪太郎へ

幕府ノ暴論

(封紙ウラ書)
「高崎猪太郎様
密書御直訴

中根鞆負

前略拜啓、唯今御帰館ニ付、今日之御模様相伺候処、今日之書簡之

勅定、猶又諸侯へ御伝達之御相談御座候由、幕議有之

勅意何となく開国之様子相聞へ候、御文意も有之故、夫

を列藩へ布候而ハ、又々物議沸騰可相成、夫よりハ昨年

来御取懸リニ相成有之候鎖港一条を御主張候而、其儀を

列藩へも御布告候而、一段之人心鎮定ニ置、此度之

勅諭ハ幕府へ薩かすゝめに被成候而ハ如何との橋公之御

論ニ付、春岳様ハ以外御不同意、諸侯か覚へて居ぬを

幸に、御布告無之候とも其内ニハ覚へ居ものもあるへし

現ニ

御前ニ而拝見被 仰付候物を、希にて秘物ニ被成候とハ

一向相済不申候、況や鎖港之処ニおゐてハ、猶更御間違
之次第、開国も鎖港も是非

勅意さへ御確守相成候得ハ可然との御弁論にて、橋公・

総裁・閔老ニは、御打合ひ出来不申候、歸る処、明日

三郎様(島津久光)・いよ守様等御登 城にて御衆議被為相成との御

義にて、春岳様より御登 城之義御廻達被相成候ニは

其節委細ハ被 仰進候由ニ御座候、就夫相得候粗略ハ別

書之通御座候、扱々言語道断之幕議、橋公も何等之御間

違候哉、更ニ解し得不申候、乍併今朝及御内議候一条を

暴発せられ、主客之勢を転換致候にハ万事好機会にも可

有哉と奉存候、兎角慨歎之事而已多く大息如斯、嗚呼く

く、頓首、

四月朔日

文書原寸 縦一七種 横九二種

226 南部弥八郎横浜新聞報告延引ノ挨拶状

三月中風説書之外、横浜新聞紙等数多御座候処、先月十

八日より御用ニ付横浜江罷越、一昨晦日夕罷歸写取候、

間合無御座候間、追而申上候様可仕候、此段申上候、以

上、

子四月二日

南部弥八郎

文書原寸 縦一六・五種 横二二・三種

227 伊達伊予守ヨリ島津大隅守殿へ

賜暇帰国願ノ件

(封紙ウツ書)
「双松明公」

内用

对翠拜

7

弥御清穆奉賀候、扱御暇一条ニ付、明後五日関白殿へ、
(二条并敬)

兩宮御始御參集願候義、只今尚又考候而ハ、此度之事ハ

全公用にハなく、私事を奉願候訳候得は、各家へ御一同

之拜趨之筋当然と奉存候、御參集願候ハ一度にて相触且

果決を望候勝手之筋ニ歸し可申候、依之御別慮無御座候

ハ、御当職其外廻り申上候而ハ、順次

尹・山・二・近(近衛)

(徳大寺公純)

徳御不出にも可相触欵、長日昼よりなら不殘可相触と奉

存候、心付候候一応御賢慮奉伺候、もし御同意に候ハ、

夫々其御都合奉希候、頓首、

四月三

文書原寸 縦一六・八糶 横六〇・三糶

二 伊達伊予守ヨリ島津大隅守殿へ

小銃買入依託ノ件

(封紙ウツ書)
一 双松明公

内密

对翠

ノ

ノ

昨夕ハ拜趨仕、得御緩話心緒吐露、近来無比之大快愉御

同慶仕候、然る処鯨飲夜半より疝痢相発、

山階宮從騎難出来、家来計差出御断申上、残念恐悚仕申

候、尤夕景より

尹宮夫より、御扁館後伺にハ

山階宮御強旁快候ハ、出候心得御座候、扱又昨日御話有

之候、此奇工銃弼試驗、命中宜趣ニ付、僕も二挺渴望、

昨夜之箱入小銃も玉目大ク宜候間、二箱同前望候得共、

当時家来出崎仕居不申、又不案内者遣候とも姦商杯に被

欺候計、伏而希候間、前述之四挺彼地詰御家来へ被仰付

御周旋奉希度候、尤大阪藏屋敷迄廻達相成度、代価杯も

同所にて差出候様可仕候、実ニ銃類ニ至而ハ無余念、御

一笑可被下候、恐々頓首、

初夏三日

二 伸、明後日之御都合分候ハ、相同度候、本文小銃

四挺ハ夫々弾丸も添候様被仰付度候、已上、

文書原寸 縦一六・七糶 横七八・八糶

三 伊達伊予守对翠ヨリ島津久光公へ

賜暇帰国ノ件

(封紙ウツ書)
一 双松明公

内用

对翠拜

ノ

ノ

愈御清迪奉大賀候、明日之義無御別慮候故、各割廻り之

方可然哉、御賢考御尤千万、

貴兄・尹・僕・山・長良ハ壮年故

二・近所所へ参殿いたし、三人申合候趣ヲ以相願候儀承

知仕候、長岡方へも可申遣候、且又我輩御暇之義、不及

申候得共、一体依

勅上京尾老・水始御暇引取候義も兼而申上候方可然と考

候、御教示可被下存候、仍而長岡へも可申遣奉存候、頓

首、

初夏四日

尚六日長岡旅邸へ参候約仕置候、

貴兄御責臨ハ如何、左候ハ、前日四館之をよふ一

席ニ而可相分候、奉伺候、已上、

文書原寸 縦一六・八種 横四九種

九四 伊達伊予守ヨリ島津大隅守殿へ

朝廷へ献金ノ件

(封紙ウツ書)
「内用」

7
L

奉賀候、如別紙申来、過刻一時ニ御談可申上と奉存候処

致忘却候故、又及御相談可仕候、御入費之義ニ至而ハ無

因循迅速被奉

勅意候もおかしき事、乍然

震翰之趣ヲ以面々之志次第上納金勝手ニ可仕旨被仰出候

而ハ如何や、甚面倒閉口ながら返示候、なにも済不申、

仍而賢慮何度、恐々頓首、

四月四日

省例文候、已上、

文書原寸 縦一七種 横四八種

九五 近衛忠房卿ヨリ島津大隅守殿へ

久光公ノ和歌揮毫ヲ求ム

(包紙ウツ書)
「島津大隅守殿」

忠房

机下

緘

(封紙ウツ書)
大隅守殿

几下

忠房

緘

(墨引)

尚以御染筆別而希入候、以上、

弥御勇猛珍重候、扱先達而米臨之御承候舞樂之節之玉詠
実ニ感吟不斜候、何卒此短尺へ御染筆給候様希度候、只
々御斟酌無、何卒御染筆被下候様希入存候、先ハ大乱書
御推覽可給候也、

卯月六日

文書原寸

縦一八・五種

包紙原寸

縦二八・五種

横七一・三種

横 四一種

品川藤十郎ノ内報

四国軍艦下之関砲撃計画

昨七日脇方にて亜米利加岡士ジョンシウキルス江面会仕
候処、一兩日前、江戸表より飛脚至来、各国岡士江江戸

表ミニストル等より申越候は、先月末頃各国ミニストル

集会之上過半評決致し、当月中旬より下旬ニ至り、英吉

利国及び和蘭国軍艦、尚殊ニ寄、亜米利加・仏良西等も

一同下の関江押寄、勝利を得候上は一応各国旗章を建可

申趣、尤和蘭軍艦三艘程・英吉利六七艘ニも至り可申、

外兩國之船数等はいまた相知れ不申由、若哉其以前、

御当国政府にて御手当相成候ハ、一騒ニも至り申間敷、

可相成は左様有之度、同人等希望罷在候段、極内々承知

仕候間、此段御含まで奉申上候、已上、

(朱) 一甲 子四月八日

品川藤十郎

文書原寸

縦二四種

横三二・五種 二枚

水戸浪士拳兵ニ付檄文ノ忠憤状

不容易御時節於、公武深く御配慮被為、在候折柄、敵命

重疊固辞致候筋ニ無之、身命を抛、報効之心得を以御受

申上候、就而ハ自今以後我等一同と共に、怠惰因循之旧

習を去り、無用之雜費を省キ、賢を拳、能を使ひ、人々

其職ニ応し上下一体合心戮力して、今日の危急を救ひ政道一新士氣奮発、守衛総督之職掌を不汚、

天恩幕命之辱(マヤ)ニ省(マヤ)き不申様致度存候、付而は我等言行、

政体ヲ始其余何事ニ不寄、銘々心付候事有之候ハ、忠言極諫聊茂忌諱不憚申立候様致度候也、

四月 八日朝四ツ時一役一人ツ、ニ而御達、

忠憤状

一尊王攘夷ハ 神州之大典なる事、今更申までも無之候得共、赫々たる 神州開闢以来 皇統御一姓、天日嗣ヲ受嗣せられ、四海に君臨まし、威稜之盛なる事実ニ万国ニ卓絶し、後世に至るまで北条相州之蒙古を鏖し、豊太閤亦朝鮮を征す、皆是 神州固有之勇氣を奉せし者にして、実ニ感するニ余りあり、 東照宮大(徳川家光)猷公にハ別して深く心を被為尽、数百年太平之基を御開き被遊候ハ、必竟 尊 王攘夷の大義ニ本つかれ候義ニ而、徳川家之大典尊 王攘夷より重きハ無之様

相成候は、実ニゆゝしき事ならずや、然るに方今 天朝の 叡慮御貫徹之程も無覚束、祖宗之大訓振張之期も無之、 神州之地ニ生れ 神州恩に浴する者、只々をめぐると傍觀座視するに忍んや、我等幸に 神州の地ニ生れ、又幸ニ危急艱難之際ニ処し候上ハ、乍不及一死を以国家を裨補、鴻恩寸分ニ報し可申覚悟ニ候、依之熟慮致候処、必死之症ハ固より尋常薬石之療する所ニあらず、非常之事を成さ、れハ非常之功を巨るを得不得、況乎今日ニ当て、上ハ 天朝の宸襟を慰し奉り、下ハ幕府之武行を助け従来の大汚辱ヲ一洗するにおひてをや、是ニおひて痛憤難黙止、同志之士相共ニ 東照宮之 神輿を奉し、日光山ニ相具し、誓て 東照宮之遺訓を奉し、姦邪悞国之罪を正し、醜夷外窺之侮を防ぎ、 天朝・幕府之鴻恩を報せんと欲するニあり、嗚呼、今日之急ニ臨ミ誰か報効し竟たらんや、又誰か夷狄之鼻息ヲ仰ぎ、彼か正朔を奉するに忍んや、既ニ報効之志を抱き、又夷狄之狡謀を憤りながら、おめく

として因循姑息に日を送り、徒ニ神風を期し候儀、実ニ神州男子之恥る所ならずや、冀ハ諸国忠憤之士早く進退去就を決し、合心戮力して、上ハ天朝に報し奉り、下ハ幕府を補翼し 神州之威稜を異国に輝候様致度候、我徒之素願実に此事ニ有り、 東照宮 在天之神靈御照覽可被遊、夫将何をか陳せん、

文書原寸 縦二八種 横四〇・五種

六六 長岡良之助殿ヨリ島津大隅守殿へ

賜暇帰国ノ件

(封筒)

島津大隅守様

用事

長岡良之助

(封筒ウラ)

緘

拙毫拝呈仕候、清和之候愈御安康奉大賀候、扱一昨日は御光臨被下深奉感謝候、議論之御馳走申上失敬千万仁恕所希候、陳は昨日陽明へ参上仕候処、十一日ニは 貴兄

并拙御暇被仰出候由ニ付、為御安心呈寸緒候、早々頓首、

初夏第八

(細川護国) 長良之助

(島津久光) 島津大隅守様

机下

二伸、御自愛奉專祈候、洋銃如何ニも御周旋奉願度候、可相成は拝借之洋銃拝領仕度、最前世子之例ニは相叶申間敷歟、呵々、

文書原寸 縦一七・四種 封筒原寸 縦一八種 横 七一種 横五・二種

六七 近衛忠熙忠房両卿ヨリ島津大隅守へ

伊達宗城推任叙ノ件

(封紙ウラ書)

島津大隅守殿

内々

几下

忠熙 忠房

ノ

(墨引)

口述

愈御勇猛珍重候、伊達伊予守昇進之義、甚々六か敷く

く、今朝来色々二人周旋致、先少将御推任と御治定ニ相成候、仍申入置候、扱々心配く致候事ニ候、先々御治定ニ相成安心候、一寸申入置候事、

四月八日

文書原寸 縦一八糎 横四三・五糎

1000 岩瀬徳兵衛ヨリノ密報

外国船下之関砲撃計画

(表紙)
「御内密申上候書付」

和蘭軍艦一隊三艘日本海江出張、右三艘之内メデユサ艦昨秋下ノ関通行之折、同所砲台より無故砲弾を発し、船中所々打破候故、水夫等手負或は及即死候間、今般我國出張之船々申合一先江府江罷越、夫より一同下ノ関江進発遂一戦、同所江和蘭国旗相立候旨、メデユサ船将デカ―センプロト名人・ジャンビー船将ベ―アーファンレーヌ申出、メデユサ船は当月四日、ジャンビー船は一昨七日

当港退帆仕候、右之段御内密奉申上候、以上、
子四月九日 岩瀬徳兵衛弥四郎事

冊子原寸 縦二七・五糎 横二〇糎 三枚

1001 松平春嶽公より島津大隅守殿へ

伊達伊予守任官之件

(封筒)
「島津大隅守様」

密用

松平大蔵大輔

(封筒ウラ、朱「紙」)
「」

一輪謹啓、先以愈御清勝被成御座奉恭賀候、陳は昨日は御同年ニ賜

御暇、難有事ニ奉存候、扱(伊達宗徳)宇和島老公官位之儀、昨日帯

刀申談候末、長岡良之助罷越候故、尚又申談、従小生も(小松)

一橋公へ直書差出申候処、夜子刻一橋より書状到来、弥

少将任官之筈之旨被仰越候、全今日於

殿下御相談有之一橋公尽力之義と奉存候、此段昨夜可申

上と存候へ共、余り深更相成候故、今朝呈書仕候、此段
草々頓首、

四月九日

慶永

大隅守様

尚々、昨夕留守居防城家へ差出、何となく宇和島官
位之義為尋候処、從四位上相成候而は養父春山ノ上
ニ出候故、是ハ六ケ敷、少将計り之事ニ可相成哉と
申事承り申候、昨夜橋公之書状にて判然いたし申候、
此段も申上置候、已上、

文書原寸 縦 一七種 封筒原寸 縦一八・三種
横一〇二種 横 四・五種

1003 堤三位より島津久光公へ

家政補助願ノ件

(包紙ウツ書)
「島津三郎様

内啓

堤三位

一〇〇二ノ一

修理大夫様江差出候書面之写

薄暑相催候処、弥御安康被成御座珍重存候、然ハ去ル安
政七年願置候御助勢之義、尚又此度更ニ相願候間、何卒
御勘弁ヲ以是迄之通相願申度存候、実ハ其後時節柄当今
之間合ニ到り候、先差扣居候得共、近来益諸色高価ニ及
ひ候中ニも、絹布類之義は別而勤仕向茂差障、甚心痛致
当惑候、小禄ニ而は迎茂難立行時節ニ至り、困窮弥益ニ
相成候、且又

(島津寄書)

故溪山様御母儀、春光院殿御在世中、京都菩提所松林院
内ニ於而、被致建立候位牌所有之候処、右御死去後ハ何
分微禄ニ而修覆難行届、且ハ漸及破損、甚歎ケ敷次第ニ
御座候、何卒御先代御国母之被立置候事故、甚御家ニ対
し候而も破損之候ニ相成候而ハ恐入候間、右修覆相加度
存候ハ不及申候得共、何分今日暮方ニさへ差迫り候程之
儀、迎茂難及微力候、何卒御憐察且御出格之思召ニ而、
先年願置候通御勘考給候、御手許より御助勢成給候ハ、

深安心仕候、尚又此段更ニ及出願候、則御後見

島津三郎様江茂此度相願候間、尚御相談可然幾重ニ茂伏
而ノ願入度存候、依之愚札ヲ以如此御座候也、

四月九日

文書原寸 縦一六・五糎 横五八・八糎

一〇〇二ノ二

追而大乱書不文体、御推察可給候也、

追日薄暑相催候処、弥御安康被成御座珍重存候、然は別
紙之通、更ニ今般修理大夫様江相願候間、宜御取計御憐

(島津茂久)

(堀維長)

愍之程願入存候、尤先代より父民部卿在世中迄は、年々
盆暮等銀百枚御助勢成給候、然処民部卿死去後更ニ相願
候得共、今ニ御沙汰不被為在、甚以心配仕候、元来由緒
之義ハ御承知之通、今以血脉連続仕居候程之訳柄ニ御座
候間、何卒永々御憐愍ニ茂預り度程之義ニ存候得共、欲
心ニ似寄候而は心外ニ存候、乍併拙者ニ至り御助勢無之
様相成候而ハ、子孫ニ対し迷惑之筋柄ニ茂相成、其段歎

ケ數存候、決而欲心ニ而相願候訳ニ而ハ無御座候、元来

公家は小禄勝ニ候得とも、別而当家義ハ申出候茂恥汝候
程之微給ニ御座候処、先代より其御許之厚御助勢ニ而代
々相応ニ取続候茂、全御蔭と一統致安心居候処、今更無

之様相成候而ハ、必至困窮相迫り、風前之燈火よりも危
き家運、心痛紙面ニ難尽候、何卒此上ハ御家臣一家御取
立之思召ニ而、御助勢成給候ハ、何程か致安心候、格
外之御慈愛ヲ以願望相達候様、御取成偏ニ希存候、心底
無腹藏申出候、呉々宜相願度如斯御座候也、敬白、

四月九日

島津三郎様

硯北

堤三位

(香長)

文書原寸(折紙) 縦一八糎 包紙原寸 縦二七・二糎

横四九糎

横三七・五糎

1001 大原重徳卿より島津少将殿へ

久光公の帰国を惜む

(包紙ウツ書)
一 島津少将殿

重徳

〔封紙ウツ書〕
緘
「島津少将殿

重徳



初夏十日

二白、不時候御自愛專一と存候、乱毫御免被下候也、

文書原寸 縦一七糎 包紙原寸 縦二七・二糎

横六六糎 横四〇・五糎

〇一〇〇 左近衛権中将昇任口宣案 其他合四通

一〇五 日光道中石橋宿問屋ヨリ水戸浪士通行届
出

一〇〇五ノ一

乍恐以書付奉申上候、

其後ハ御無音無申条候、兎角不揃之時氣、逾御清康珍重
此事ニ候、陳は此度御暇御願之御模様仄ニ承及、大驚、
是ハいかなる御事哉、兼ての 叡慮御貫徹と申ニても不
被為在、又貴兄御献言之撰海防備辺、於幕採用御掛りと
申ニも無之欵、何之沙汰も承不申候、尤御一和ハ相違も
被為在間敷哉ニ伺候へとも、とをか武江いつから御和順
の様ニ存られ、扱々歎ケハ敷存候折柄、貴兄御帰国ニて
迹ハ如何相成候哉と、実々心配無此上候故、御様子御尋
申ニ参り度候へとも、先差扣書中ヲ以御尋申入候、何分
皇国之御大事今此時と、実ニ憂苦ニ不堪候候御尋申入候、
御様子ニ寄り不時ニ罷出候も難計候、扱此品信籠末赤面
なから御旅館日長之御見舞之印迄ニ御目ニ掛候、御笑味
ニ於ハ本懐候、早々不典、

当御代官所日光道中石橋宿役人惣代問屋新兵衛奉申上候
水戸田丸稻之衛門様当四月四日小栗村出立、宇都宮御泊
之御先触ニ御座候処、俄ニ同日当宿御泊ニ相成、同勢百
七十人余、御本陣其外下宿五軒、表門江は白地御紋付之
御幕、玄関江は紫御紋付之御幕、内玄関江は白無地幕、
御下宿之内山田一郎様・木村久之丞様白無地之幕を張、
御着之御御行列真先ニ切火繩鉄炮左右二十挺程、外ニ種

ケ島所持之御方五六人、鎗二十老本、長刀式振、中英ニ從二位大納言源烈公神輿と申札相掛ケ候白木之揚輿、何れも白丁ニ而、人足為相持候、鞍置馬三疋牽之、其余馬六疋宿方より差出、荷物之義は御長持老棹、凡九拾貫目位、乗物老挺、引戸駕籠老挺、乘駕籠四挺、御輿其外四荷、宿駕籠四挺、馬十二疋、人足五十老人、不殘賃錢御払ニ而、其余四十九人鎗鉄炮笠持・手代等無賃ニ而差出、大將田丸稻之衛門様、遊軍惣頭山田一郎様・木村久之丞様、其外御同勢何れも白羽弓ニ而、纏を掛ケ割羽織・野袴着用、中間体之もの老人も無之、不殘白木綿ニ而鉢巻致し、陣笠を冠、帯刀ニ而鉄扇・鉄棒を持、行軍録と申帳面を所持、百七十人余之内全侍体之もの八十人位、其余は俄雇新入之体相見申候、何れも御旅宿中權威を振ひ、同五日五時頃当宿出立ニ而宇都宮通り、白沢宿泊り、御先触差出、尤御旅籠料は老人銀貳匁五分、外ニ弁当代銀八分、都合銀三匁三分御払御座候、此段御訴奉申上候、以上、

日光道中石橋宿
元治元年四月十一日 役人惣代同屋

福田所左衛門様
御役所
新右衛門

一〇五ノ二

昨日御届書人物、当月五日六日徳次郎宿泊、八日日光着ニ相成候処、宇都宮御領主御役場より人数操出し、先廻り致し、日光鉢宿^(鉢石宿)ニ而御差留掛合中之由、未タ御山内入ニハ不相成趣、只今彼地より申越候ニ付、此段申上候、以上、

四月十一日

一〇五ノ三

去ル四日石橋宿江泊候水府浪人名前左之通

大將

齊藤佐次右衛門

田丸稻之衛門

須藤敬之進

山田一郎

木村久之丞

根本新平

三橋半六(金助)

真岡町元年寄

横田藤四郎

右は泊り宿江名札張候ニ付相分候分、其外上下凡百三十人余之由、五日朝五半時出立、宇都宮屋食之節、領主より通行差留掛合中之報、同日夜石橋宿より申来候、

一〇〇五ノ四

水府浪人日光表引弘、十三日小山宿泊、十四日常州下館宿、夫より筑波辺江引取候旨、最寄宿方より申来候、

四月十六日

冊子原寸 縦二四種 横三三・五種 五枚

100K 左近衛権中将推任叙ノ宣下

(包紙ウツ書)
「元治元年子四月十一日 御暇参

内之節於虎之間伝奏列座野宮中納言殿より御達」
定効卿

島津大隅守

一昨年来格別周旋、公武御一和之基本を開、其功勞拔群且昨秋以来長々滞京、参予等苦勞被

思食、依之從四位上左近衛権中将推任叙被

宣下事、

四月十一日

「本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一七六号
文書ノ一部ト同文ナリ」

文書原寸 縦一七・三種 包紙原寸 縦二八種
横 六四種 横四〇種

100K 松平春嶽公より島津久光公へ

左中将任官御祝儀

(包紙ウツ書)
「島津大隅守様
差下
松平大藏大輔」

一筆致啓上候、向暑之節ニ御座候処、愈御安栄被成御座珍重奉存候、然は昨十一日御参
内之処、被為蒙

宸賞、從四位上左中将御推任叙

宣下之段、重疊恐賀之至奉存候、右御欽申上候印迄ニ鯛

一折乍龜末致呈上候、御祝受被下候ハ、幸甚存候、先

は右為可御意如斯ニ御座候、恐惶謹言、

松平大藏大輔

四月十二日

慶



島津大隅守様

文書原寸 縦二・六種 包紙原寸 縦三二・五種

横五七・三種 横 四七種

1007 長岡良之助殿ヨリ島津大隅守殿へ

近衛家へ訪問ノ件

(封筒) 島大隅守様

用事

長良之助

(封筒ウラ) 乞密展

7

寸楮謹呈、愈御清安奉賀候、陳は昨日如御約束明日晚景

より陽明家へ御出被遊候様奉願候、且筑世子は愈只今も

姫路滞留之由、家臣之中へ中村某・牧一内坏殺害之次第、

明日拝語之上委細可申上候、阿々、早々頓首、

清和十二日

(細川藤美) 長良之助

島大隅守様

玉机下

極々愚筆海涵可被下候、不尽、

文書原寸 縦一七・二種 封筒原寸 縦一七・七種

横 六六種 横 五種

1008 大原重徳卿ヨリ大久保一蔵へ

攘夷建白ノ件

(包紙ウラ書) 大久保殿

大原

1009ノ一

愚昧小臣殊ニ非役ノ身分、重大ノ御国政諫諍ケ間敷言上

仕候も、深恐入存候へとも、此節ノ形勢実ニ憂苦ニ不堪、微衷言上仕候、抑夷舶入港一度攘夷被 仰出候以来、確乎ト御動揺不被為在ニ付、有志慷慨ノ徒 叡慮ノ程恐察シ奉リ、往々主ヲ辞シ宗ヲ棄テ、流離顛覆シ、身命ヲ亡歿仕候者幾千人、皆是神州固有ノ正氣ノ然ラシムル所ニ候、殊ニ一昨年以來、遵奉勤王ト称シ、多少ノ大小名登京又ハ東西ニ奔走シ、周旋仕候も全攘夷ノ 叡慮遵奉セズンバ不可有ト、神州ノ大義ヲ存シ候テノ儀ニ候へハ、則大樹再上洛、尤御一和ヲ先トシ、攘夷御一定ノ為ニテ可被為有ト、天下仰望シ奉リ居候処、今ニ攘夷御一定無之ニ付、乍恐天下ノ人ニ攘夷ノ 叡念被為弛候様ニ存上候テ、実ニ天下人心向フ処ヲ不知、洵々トシテ薄水ヲ踏カ如ク罷在、誠ニ以苦心仕候、然ルニ横浜鎖港ノ事更ニ御尋之砌、不經数年征夷ノ実相行ヒ 叡慮ヲ奉安候様トノ 御沙汰モ被為在、御請ニハ是非共成功可仕候、就テハ沿海ノ武備充実可致トノ言上モ有之候故、 叡慮不被為弛御儀ハ奉畏候、此鎖港ト申モ攘夷ト同様ト存候、子

細ハ鎖港不承服トテ、一旦談判ニ及候儀中道ニシテ廃シ候事ハデキヌ事ニ候、其上是非共成功可仕トノ言上有之候上ハ、不承服ノ時ハ必戰爭ニ可相成候、或ハ償金ヲ遣シ候積リニ候欤、償金遣シ候儀ハ神州振古未曾有ノ恥辱、天下ノ人心関係可仕、決テ不宜儀、元より償金ノ事可有咎ハ毛頭有之間敷、何レ談判ヲ以鎖港ニ可相成候、然ハ若不承服ノ節戰爭ニ到り候ハ掌ヲ指カ如ク候、則御請ノ辞、夷情測リ難ク候間、沿海ノ武備ニ於テハ益勉勵ト有之候、然ハ攘夷ノ心算内ニ相畜へ、鎖港談判仕候ニ候ハズヤ、攘夷ノ策略有之候ハ、鎖港ト被申上候よりハ攘夷御請被申上、扱鎖港談判ニ取掛り候ハ勿論、防備ノ事ニ到ル迄速ニ布告ニ相成り候ハ、実ニ倒懸ヲ解置、郵シテ命ヲ伝フル如、武備不日ニ充実シ、士氣一時ニ振起可仕、且世上ノ人心モ折合 叡慮モ随テ被為安候場合ニ可到ト奉存候、根元攘夷ノ議論ハ是迄人ニ言上も有之候事故、今更申上ル迄も無之候へハ差置、全体ケ様ニ天下紛々仕、大樹一年日数モ不過ニ兩度モ上洛、諸藩モ多分滯

京候所以シハ、本来ノ 叡慮ヲ洞徹安置シ奉ランカ為ニ
候ハズヤ、然ルニ幕府攘夷一定無之、鎖港ノ事是非共成
功可仕ト言上有之候、則前条鎖港攘夷同様ト見込言上仕
候、則重徳見込^{大徳}ニ違ハズ候ハ、攘夷可為候ヘトモ、攘夷
一定トノ御請無之候テハ攘夷ノ 勅諭御貫徹トハ難申、
勅命遵奉上下安堵ト申場合ニ無之候、重徳見込ニ違ハズ
候ハ、何卒攘夷一定トノ御請言有之候様トノ 勅諭被
為在度奉存候、左候ヘハ、從來ノ 叡慮御貫徹、君臣ノ
大綱相立、大樹再上洛、御一和順ノ詮ニテ可被為在ト奉
存候、尤幕府再上洛仕候カラハ、天下ノ人心ノ帰向ヲモ
洞察シ、新政ヲ施行シ、 叡慮ヲ可被奉安ノ処、米金ノ
利ヲ以人心ヲ和ケ候迄ノ儀、是只縉紳数家ノ事ニシテ、
天下人心ノ感服仕候儀ニ無之ト、乍併貢獻手厚并ニ為ス
所等、 朝廷尊崇ノ意ハ顯然、皆人ノ知ル所ニ候ヘ共、
只斯国体タル攘夷ノ一事一定無之故ニ、人心折合不申候、
人心折合不申テハ如何様ノ貢獻有之候トモ、實ニ詮ナキ
事ノミナラズ、人心却テ相激シ可申、相激スルノ余リ、

和州・但州一件ノ如キハ小事ニテ、諸藩ノ有志等各々望
ヲ失ヒ、自国ヲ固守割拠ノ勢成リ、上ノ命令ヲモ輕ンス
ルノ際ニ到リ候テハ、応仁ノ鑑ミ不遠大乱ノ源ト相成候
ハン欵ト深ク憂慮仕候、応仁ハ我邦内ノ事ニ候ヘとも、
此度ハ外夷ニ渡リ候事故、別シテ憂惱仕候、乃大樹御請
ノ辞ニモ夷情測リ難ニ付、海岸武備充実可仕トノ事共被
申上候カラハ、前条内ニ攘夷ノ心算有之候テノ事ニ可有
之候、左候ハ、鎖港ト名ヲ易ヘ候ヨリハ、矢張攘夷ト
言上ニ相成、天下ニ布告有之候ハ、則 勅命遵奉、人
心自然ト相治リ一致仕、彼有志尽忠執義ノ徒奮踊シ、皆
競テ先鋒タラン事ヲ願可申、則赴々武夫 皇国ノ干城ト
成リ、内憂日消シ、外患モ畏ル、ニ不足様可相成ハ必然
ノ理、仰願クハ只幕府言上ニノミ御隨順不被遊 綸言如
汗キノ儀ヲ以テ、攘夷速ニ一定仕候様 勅諭被為在候様
ニト奉存候、且又鎖港ノ為使節差遣シ、夷情測リ難キ節
柄ニ候ヘハ、軍艦ヲ率ヒ何時渡来モ測リ難ト存候、是夷
情ノ測リ難キ処ニ候ハズバ、沿海ハ勿論ノ儀、浪華海岸

ノ処ハ神速トノ被 仰出モ有之候ニ、漸(徳川慶喜)一橋中納言江撰
 海防禦指揮被申付候迄ノ儀ニテ、今ニ衆人耳目ヲ驚シ候
 程ノ手段ヲモ不承候、何レ遠方ノ者眼ニ見候事ハ無之候
 得共、手段ヲ聞候テモ真実ノ事ニ候ハ、感服可仕候、此
 感服仕候処、則人氣ノ治ル処ニ候、敲重ハ勿論神速ニ可
 致、尤始ヨリ 御沙汰ノ事ニ候間、御催促被遊候様ニト
 奉存候、前言狂直ニ渡り、忌諱ヲ不憚ノ罪、恐々惶々仕
 候、愚忠深御逐容奉希候、

四月六日

重徳百拝

右一紙

小臣重徳昏昧無知申迄も無之候へとも、先年より国家ノ御
 大事ヲ苦心仕候儀ハ、今以一日ノ如クニ候、既 勅勘ハ被
 免候得共、非役ノ身分ニ候へハ、所謂不在其位不謀其政ト
 有之候故、先達而以来差扣罷在候得共、此節ニ到、攘夷ノ
 叡慮被為弛候欵、杯々風説仕、万一天下ノ姦雄諸道ニ割
 拠シ、天変ヲ相待候様ノ次第ニ可到欵ト、杞憂ニ不堪候
 伝ニ工執芸事以諫トモ有之候得ハ、苦心ノミ仕候テハ君

臣ノ実情無之ニ似候間、不願恐別紙言上仕候、何卒御海

恕ヲ以御一覽之上、不苦候ハ、

叡覽ヲ経候ハ、生前之本懐無此上候、乍併言狂直忌諱

ニ触レ、樽俎ヲ越へ候罪謝他無之候、頓首、

四月六日

重徳

右ノ一紙ハ殿下江書添差上候、

一〇〇九ノ二

(包紙ニアリ)
口上

昨夕ハ実々早々気毒ニ候、其砌ノ写漸出来為持進

之候、申入候通り、高評腹藏無之御教諭可給旨、

(島津久光)
中将殿へ御申可給候、要用、以上、

四月十四日

二白、差急乱書ハ元より、落手字等其俣御推覧

可給候、

冊子原寸

縦一四種

包紙原寸

縦 二七種

横二〇種 七枚

横四〇・五種

100 松平春嶽公ヨリ島津久光公へ

招請状

〔封筒〕
双松賢君

玉几下

春嶽

〔封筒ウラ〕

ノ

」

」

一 翰拜啓仕候、清和之候ニ御座候処、弥御清安珍重奉存候、陳へ昨日は段々委纏之御紙上ニ而、御推任叙為御欽、見事之鮮着御恵与被成下、忝致拜受呈々奉叩謝候、且又今夕七ツ時頃より御光来被下度奉伏希候、書余期後刻之面尽候、草々頓首、

四月十四日

越前宰相

島津左中将様

尚々、聊之御差支へ被為在候とも、御繰合御光駕奉

願候、已上、

文書原寸 縦 一七種 封筒原寸 縦 一八種

横 六四・二種

横 四・五種

101 京都ニ於ケル久光公春嶽公ノ世評

102 堤三位より島津久光公へ

礼状

〔封紙ウツ書〕
島津大隅守様

堤三位」

追日向薄暑候処、愈以御安福欣喜不斜存候、然は長々御滞留御苦勞之御事ニ存候、兎角御無音勝失敬御有免可給候、將過日は不存寄御文庫之内預御恵投忝儀存候、御答礼早速可申入之処、未出来かね候間、当月跡進入も可仕候、余り延引ニ相成候条、先不取敢以愚札御礼申入度、如斯候也、敬白、

四月十六日

文書原寸(折紙) 縦 一六・五種 横 四六種

103 高松三位ヨリ島津中将殿へ

中将昇進祝賀

〔包紙ウツ書〕
一 島津中将殿
慶章
高松三位

〔朱〕
〔紙〕

□

□

〔封紙ウツ書〕
一 島津中将公
座右中

座右中

□

□

追々過頃承合候〔疏〕流球島立島之方、自然着船候ハ、御

内恵仕御入奉、女房方御待受ニ候、書外期後便候、

御帰国共不相替御懇志被下候所也、

一 輪啓達候、薄暑漸催不珍御安泰恐賀候、誠此度は中将

御転任、殊ニ段々厚 御沙汰共被蒙

仰、幾久 御畏至極之事、御同慶ノ至ニ存候、茲而社一

昨年以來拔群御忠憤御忠功茂顯然と存候、右御欽厚申上

度候、表通に太刀馬定例之通進上候外ニ格出御英徳ニ順

尊罷在候儀、極内密相祝、此長刀一振先代拝領伝来秘藏ノ尺波平行安ノ作 正真

在銘候、何卒御贈祝申上度候、幾久御祀納も給候ハ、

本懐千万存候、却而御面働御迷惑歟とも存候得共、天下

ニ取無双之英勇タル貴公、何分ニも時勢之程唯々宜御入
府御帰国候共、何卒不論時刻御急助之程御勘考奉願入候、
実々は如茲御時勢柄ニ而候儀、貴公ヲ

帝都ニ御取留申上け度は心中一陪事ニ而、御内案重申儀
度篤々心事、猶又期後拜之時候、随分之時候御励專一存
上候也、

高松三位
保実

四月十六日

文書原寸 (折紙) 縦一九種 包紙原寸 縦三一・五種
横五七種 横四三・五種

一〇四 小倉領門司浦大久保浜ニ死体漂着ニ付出

役氏名書

覚

一 門司浦構楠原村掛大久保浜之死骸老人流寄ニ付、出役
名前并出夫左之通、

門司在番手付

上田重助

郡奉行手付

田中誠兵衛

浦奉行手付

永田喜平

大庄屋助役

富野古兵衛

楠原村庄屋

田宮治三郎

門司浦庄屋

柳井甚四郎

同浦方頭

階田五郎左衛門

楠原村方頭

孫右衛門

出夫

一拾四人

内八人門司浦
六人楠原村

但四月十五日夕より十六日迄、
昼夜交代番人ニ御座候

一八人

内三人門司浦
五人楠原村

但十六日夕大久保浜より同所先
ノ谷山墓所迄持越夫并場所伐私
埋夫ニ御座候

式拾式人

右之通ニ御座候、以上、

子四月十六日

村上銀右衛門
重松栄次郎

文書原寸 縦一五・五糎 横五九・五糎

二三 近衛忠房卿ヨリ島津中将殿へ

馬所望ノ件

(包紙ウツ書)
一從

内丞相公御書

(封紙ウツ書)
一島津中将様

几下

忠房

緘

(墨引)

口述

弥御勇健珍重候、扱明烏は御発途、今更残懐ニ候、昨烏
は御来臨、不相変何之御風情も無之、其上実ニ長御引留
申入、嗚々御困りと存候、其砌一寸申入候籠青毛の馬、

何卒、御所望申度候、其許御領之由ニも承候へ共、何卒不苦へ御所望申入度候、御領掌給候へ、深々忝存候、先は要事而已如斯候也、

卯月中七日

文書原寸 縦 一八糶 包紙原寸 縦三一・五糶

横六五・五糶 横 四五糶

101 京都滞在諸大名官位姓名書

(端裏書) 〔甲子四月十七日〕

正二位

参議

左中將

- (徳川慶勝) 尾張前大納言様
- (鎌須賀齊裕) 松平阿波守様
- (伊達慶邦) 松平陸奥守様
- (池田慶徳) 松平相模守様
- (鍋島) 松平 閑叟様
- (黒田齊博) 松平美濃守様
- (利根) 南部美濃守様
- (藤原) 有馬中務大輔様

左少将

従四位上

中將還任

正四位下

従四位上

左少将

左少将
従四位上

- (高瀬) 藤堂 大学頭様
- (鎌須賀茂嗣) 松平淡路守様
- (黒田慶繁) 松平下野守様
- (森秀) 佐竹右京大夫様
- (山内豊信) 松平 容堂様
- (宗城) 伊達伊予守様
- (久昭、従五位下ノ誤リカ) 中川修理大夫様
- (直惠) 井伊掃部頭様
- (成昭) 松平越前守様
- (定安) 松平出羽守様
- (頼隆) 松平讚岐守様
- (篤寛) 立花飛彈守様
- (久松勝成) 松平隠岐守様
- (長因) 丹羽左京大夫様
- (定敬) 松平越中守様
- (浅野茂嗣) 松平紀伊守様
- (忠誠) 松平下総守様

甲子四月十七日

文書原寸 縦一六種 横四一・五種

札候、謹言、

四月十八日暁天燈下認

重徳

1014 大原前左衛門督ヨリ島津中将殿へ

島津中将様

久光公帰国ノ件

大原前左衛門督

副啓

〔包紙ウツ書②〕
一島津中将殿

〔朱一封〕

〔藏下朱印ハ重復〕

〔包紙ウツ書①〕
一島津中将殿

〔朱一封〕

重徳

追日快晴薄暑相催候、逾御壮健珍重此事ニ候、陳は此度御暇御願之通り相済御帰国、今日ハ御発輿、御安慮可被成、是亦珍重存候、猶海上無異御帰着、御吉左右御待申候、長々御滞京聊無御障、万事御周旋御勤功ニ付、段々御昇進并ニ御拝領物等、幾久敷芽出度存候、猶又不相変御勤 王御尽力、所祈ニ候、仍早々要用耳御見送迄呈愚

此度御帰国之事、今日杯とハ実以思ヒモ寄ぬ事、先日大久保ニ一寸承候、実ニ無抛御訳柄、御むりならざる御事なから、御帰国ニてハ迹之処、実以不安心如何相成可申哉、小子一人御案し申上候も所謂杞人之憂故ニハ候へとも、心配無此上候、御遺策ても御申上被置候と存候、御面会申候得ハ、其辺も篤と御尋申承り度心得ニ候江共、其期ハ不来候へとも、日月ハ不待今日と相成、実以残念千万ニ存候、且又猷言之事披露之後ニ候へハ、別ニ御存意不被示との儀、昨朝大久保より御念示御尤ニ承候、從之披露後之事ニハ候へとも、猶又御高評非難も承候へハ、後來之心得ニも相成候事故、何卒矢張高評非難も御面御

ニハ候へとも相願度存候、且又去冬(天久保)以市藏内々被下物之

事厚辱存候、御請申からハ夫々相応之御挨拶御答礼等も

可致筈ニ候へとも、元来小家ヲ御憐察ニて之事ニ候へハ、

左様ニいたし候てハ却而御心切ヲ空敷いたし候訳柄ニ候

故、総て行とムかぬ事共、是亦御面会候へ、心底可述

尽之処、左もなく残念ニ存候、御量察御海恕可被下候、

呉々もくだく敷候へとも、将来之処御案し申候、逆も

此仄平天下とハ存られつ候、御勤 王御依頼無他念候、

攘夷ノ御献言真ノ攘夷と御申上、実ニ感服仕候、何卒々

々真実之事ニ相成候様祈申候事ニ候、是等之儀ハいつ迄

申ても尽ぬ事筆留候、何も御量察候、追々暑ニ向時気、

御自愛專要候也、

重ての時をはいつと白瀟を

へたてゝ帰る君をしそ思ふ

〔包紙①ニアリ〕
口上

尤即答ヲ不劣、船中御徒然欵、御帰国之上ヲ期候、

以上、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二八四号
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一九・五種 包紙原寸 ①縦 二七種 横三九・五種
横五三・三種 ②縦三五・五種 横四七・五種

106 大坂小松帯刀ヨリ在国お近どのへ

久光公御帰国等ノ消息

〔封紙ウツ書〕

お近どの
小まつ
帯刀
人々

無事平安

かへすくいとゐくなされ候やうせんしまいらせ

候、二条御用は高崎両人も御衣裳拝領たけハ同様ニ

仰付られ候、こほひしんたけさも元氣のはつ、くひ

玉遣し候まゝよろしく申置なられ候、もふ肌持もな

をり、ひとへにてよろしく御座候、少しハかも出候

事ニ御座候、かへすく御留主は中々さひしく、か

た／＼心配とそんしまいらせ候、何も細々の事は治
衛へ申付候まゝ、態と相のそき候、別紙遣しまいら
せ候、又々めてたくかしこ、

文にて申入まいらせ候、まつ／＼あつさに相成候へとも
何のさわりなく、さえ／＼しくくらしのはつと、いか計
り幾久しくめてたくそんしまいらせ候、ここ元にて
(鳥津久光)
中将様御機けんよく一昨十八日京都

御発駕、当日七ツ時分大坂江

御着遊され、尚御機けんよく入らせられ、今日迄御滞坂
にて、明日川口より平運丸江

御乗船御出帆之筈ニ御座候、則前之浜江御着船之御賦ニ
御座候、二ニ拙者ニ茂無異相勤、此節は暫ク御跡ニ相残
候様仰付られ、不調法者か様之時勢被相残、ありかたき
事ニ御座候、しかし大坂迄は御内用之義これあり召列ら
れ候段仰付られ、御当日御供にて下坂いたし居、無異相
勤居候まゝ、少しも／＼御案しなされましく候、さてま
た去ル十七日二条御城江御老中水野(重博)和泉守様より御用之

義有之候間、四時罷出候様前日御達ニ相成候付罷出候処、
鎗之間御掾江水野和泉守様御出ニ而、昨秋以来国事之義
ニ付骨折いたし候付、拜領物被仰付旨仰渡され、再罷出
候処、御奏者番より 御時服二枚拜領仰付られ、ありか
たき事ニ御座候 右の御衣裳は御のしめ井羽二重と、
相見候御給袋花之御紋付
(利用) 左候而扣処
江引取候、ろふ下ニ而大目付土井備中守殿より御達ニ、
和泉守殿より

公方様御目見仰付られ候間、暫ク相扣居候様致承知、相
扣居候処、暫ク間あり

御白書院之方江相廻候様仰出され、表御坊主案内ニ而罷
出候処、大目付・御目付・御奏者番より老通御礼、序に
相習置候処、

公方様出御ニ相成罷出候様被相違候付、御三之間江罷出
御礼申上候処、御奏者番より名前披露あり、御奏者番は
引取られ候処、

御直ニ永々在京国事周旋等御満足ニ被思召段、細々
御懇之蒙

上意、何共くく恐入候次第ニ御座候、何辺都合よく相濟、別而仕合之いたりニ御座候、か様な先例もなき事、誠ニくありかたき共何とも恐入候、是も

中將様之御蔭様ニ而、幾重ニも恐入候、其方にては嘸々ありかたかり候半と、そんなしまいらせ候、くわしき事は此せつ便より治衛旁之左右申遣候半と、そんな差下候まゝ、当人よりきゝとりなされ候、清太も下し候まゝ、これまたきゝなされ候、おのつからこゝろ祝ひもなされ候事とはそんな候へとも、此せつは誠ニありかたき事ニ御座候まゝ、こゝろ祝ひハなされ候やうニそんなしまいらせ候、此方ニ而は当日は至極取込にて、その事も相叶はず近々帰京之上ニ祝ひはいたし候半とそんなしまいらせ候、拙者ニも明日

御出帆ニ相成候ハ、兩日ハ爰ニ御用もこれあり候まゝ、廿三日方ニ帰京之賦ニ御座候、御跡ニ相残り候事思ひ明らかめ候へとも、既ニ

御立ニ相成候へは中々のし不申候、しかししかたなき事

ニ候まゝ、折角念入相勤候事とそんなしまいらせ候、来々月方ニは下りニ相成候ハんとそんなしまいらせ候、品々遣し候まゝ請取なされ候、何も細々の事は治衛江申含遣し候まゝ、よくくきゝなされ候、申遣したき事山々なれと

御滞坂中いそかしく、あらく申遣しまいらせ候、まっは折かくくいとあなされ候やう呉々もそんなしまいらせ候、幾久しく万年もと、めてたくかしこ、

四月廿日

文書原寸 縦一五・七糎 横三〇九糎

102 南部弥八郎報告ノ横港紀聞

横濱鎖港不可能ト下之関砲撃計画

〔表紙〕
「横港紀聞」

横濱開港之儀は、井伊（直親）・安藤（信正）之両氏執政之時分、外国

江許容相成候儀ニ而、最初下田に於て欠乏品御渡之約

は

朝廷ニ而 御免相成候事ながら、横港之儀は更に
勅許茂不被為 在候処、無拠筋とは乍申、再応之奏問
もなく、関東ニ而御一己之取計之上、追而奏問等、惣
而不都合のミニ付、列国之人氣不穩相成、種々之變動
も追々御座候儀は巨細申上候迄茂無之、既に開港以來
纒之年月ニ御座候処、外夷商法日々繁昌相成、諸物之
輸出時日を追ひ沢山ニ而、商館等も追々美麗を尽し申
候、随而日本商家之形勢も、昨年英国之軍艦渡來の一
件ニ付、其時分故郷江逃去、或は戸を鎖し潜居候もの
も昨冬より旧に復し、方今之所ニ而ハ追而盛に可相成
模様御座候、
一昨年之春以來、横港閉鎖之風説相聞得候付、英政府よ
り在留之国民為保護、軍艦三艘江陸兵千人程乗付差渡
当三月下旬入港いたし、右之兵卒上陸之上、旅宿借受
度旨申立、神奈川奉行類ニ心配仕候段、去ル十三日同
所調役より内話承申候、

一当正月横浜鎖港之為談判、西洋諸国江使節被差遣、右
之面々支那之上海碇泊中、英国之「ミニストル・アー
ルコック」茂船かよりニ而出会いたし候処、鎖港之談
は逆も平和に相整可申筋ニ無之候間、其戻引返し候方
可宜杯、品々噂も仕候儀ニ而、万一も相整可申勢ニ無
之、夫ニ反し、先年使節之時兵庫・新瀉延期之事すら
甚不納得ニ而、漸く輸入品物之内一二品之税を減し、
熟談相整候事ニ有之、当節鎖港之談ニ取懸り候共、品
々議論之上、詰り兵力を以て相拒ミ可申候、一昨年以
來之閉鎖論は全く

朝廷より発り候儀と相心得、就中仏国当今之帝は浪花
江入津して

朝廷江使節を差上、弁論之次第ニより兵力を以てなり
共遂に成功可致目途は、既三年前より相企、之に次て
英国亦之に先んし事を計らん事を欲し、夫に就而之名
義をもとめ居候機会ニ御座候間、当時世上風聞之通、
鎖港論被行候時は、関東より先

皇都之近海卒然と戦端をひらき候様ニも相成可申形勢
と愚察仕候、

一 英国ミニストル先より閣老之応接有之、(全利書)長州侯は亞・

仏・蘭江暴業有之のミならず、品々世評も相聞へ候、

はやく御征伐無之候ハ、必大事を生し可申、英船は

幸ニ暴発逢候儀無之とハ乍申、各国条約面ニ背き候事

は更ニ關係無之と難申候、若政府ニ而被成かたく、我

等ニ被仰付候ハ、日数二十日ニ勝敗可相決存候、将

亦世界之變化を不弁、漫も鎖閉を議し候向も、一戦有

之方早く相ひらけ候理ニ而、

薩州之如きは元來諸術相開け候有名之國ニ候処、昨年

僅之戦争後は別而相ひらけ、軍艦并運用船をもとめ、

其他武器類は勿論、經濟之器械迄も頻ニ買入候を以て、

右等之事情御推知可有之旨申出候由ニ御座候、

一 閩巷之風説、仏國より軍艦数艘長崎江入港し、長州之

儀を申立候段、三月初旬伝聞仕候処、此節同様之雜説

亦々相聞得、若於政府御取扱無之候ハ、直責寄可申

候間、否為御知被下度旨申立候段承申候得共、的実之
儀は承得不申候、

右之通當時横浜之形勢、外夷之事情等見聞仕候趣ニ

御座候、以上、

子四月廿六日

南部弥八郎

文書原寸 縦二八糎 横二〇糎

一〇〇 水戸浪士日光山方面暴挙ノ報告書

(端裏朱書)
「甲子四月廿七日」

此節日光山辺江浪人致蜂起候段相聞得差越候而聞

合仕候次第左ニ申上候、

一 四月初頃より築葉山寺内江四百人位致屯居候由、尤始

終武術稽古等いたし、盛成体ニ相聞れ申候、

一同三日石橋宿と申所江築葉山より辺道相通り差越候而

止宿、尤人数百八拾四人、小銃・鎗并具足箱亦是呉座

包之具足等為相持、長持老竿為有之由、騎馬七八人、

白木作ニ沈草掛御輿之様ニ取仕立、先之水戸侯之木像

之由、

一 右人数之内田丸稻野右衛門、年頃六拾七八才位、野羽織白麻ニ葵之御紋所墨書、乗物、田中愿藏年頃三拾四五才騎馬、藤田虎之助三拾才位騎馬、右三人頭取候人之由、外人教姓名相知れ不申候、

一 止宿之本陣江は葵之御紋付紫之幕張、城門口ニは白幕左右ニ竜虎と書たる高張相建、夜分通行之節ハ頭ニ天地と書たる高張、其外燈灯皆葵之御紋付之由、左候而

往来左右亦是所々江両三人ツ、見配り差出相固居候由
一同四日右人数都宮宿迄差越止宿、則吉連川^(重)之方江差越賦ニ而飛脚差立、然処被差留候由、三日滞在、

一同七日日光山江差越賦候処、山中致騒働、兼而獵人共ニ鉄砲御渡付相成居候由、其者共相集候処、大概千人余茂相集り、敵重ニ相固、尤御山内ハ戸田越前守人数^(金忠)相固、其故通行難出来、徳次郎宿と申所江止宿之由、

一同八日今市宿と申所迄差越止宿、日光山より道法武里位、其より両三人ツ、交代ニ致参詣、凡式拾位ニ相及

候由、三日滞在、

一同十一日鹿沼宿と申所迄差越候而止宿之由、
一同十二日栃木宿江差越止宿、三日滞在、其より大平山寺内明寺ニ差越候而、今ニ滞在、

一 毎日築葉山より大平山江相掛致応返、鉄砲・具足其外荷物等致運送候由、尤先触等は水戸内何の何某、亦是荷札等は水戸御用と有之候由、当分大平山江は三百人余致屯居候由、

一 所々江三人亦是拾人位ツ、人数差出、様子相探り候筋ニ相聞れ申候、

一 水戸侯之木像日光山江相崇、其より横浜異館江攻入との取沙汰等は、間々御座候得共、全趣意相分り不申候、
一去ル十七日日光山御祭ニ付、勅使今城中将殿^(全座)下向ニ而於道中筋ニ何欵願筋為有之と取沙汰茂有之候得共、実説相知れ不申候、

一来ル廿八日大平山下ニおひて勢揃有之筋ニ取沙汰ニ候処、五月五日ニ相延候由、

一日光山御警衛 公義守兵五百人位、外ニ戸田越前守・

秋元但馬守・秋田安房守人数出張相固居申候、

一日光山より大平山江之道法十四里位、

一築葉山より大平山迄凡十二里位、

一惣人数千人位と取沙汰御座候、

一去ル廿四日古河宿と申所江三拾人位差越候而致止宿、

問屋場帳面等相改申候由、

右之通承得申候間、此段申上候、以上、

四月廿七日

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一八九号

文書ト大略同文ナリ）

文書原寸 縦一七・八寸 横八九・五寸

〇三 新納嘉藤二ヨリ大久保一蔵へ

野州浪士及横浜異人ノ情態

〔端裏書）
大久保様

〔朱）
「甲子四月廿九日」

新納嘉藤二より

追啓、阿部様御内福村重次郎、御鉄炮組中浜万次郎

御抱之事承知仕候、先此度は年切ニ而御借人之手段

運も早く、可宜と考申候、被召仕候而御用立候へ、

其折御貰受之手数いたし安く、此方へ被付さへいた

し候へ、其上はともかくも子細無之事と考申候、

重次郎ハ訳も有之間敷、万次郎は板倉へ願書差出可

申、いづれも私共方給存之事ニ御座候、近々急場之

所ニ相働可申候、

去ル十二日之御翰相届難有拝見仕候、向暑之節御座候得

共、愈御壮栄被成御勤務、恐悦之御儀奉存候、次ニ小子

無異相勤申候間、乍憚御安意思召可被下候、京師之儀是

迄精々御尽力被為在候かひも無之時宜ニ成立、終ニ御暇

御願出ニ相成候処、御免被成、十八日 御発駕ニ相究十

一日御暇御参

内被為 在候処、

龍顔拜

天盃御頂戴、御拝領物等被為在、其上是迄之御功劳被為

褒、從四位上左近衛權中將推任叙被為

宣下候由、恐悅至極之御儀、

朝廷之御気色丈は美以難有御事ニ御座候、宇和島はとく(伊達宗統)

御立、越前侯(松平康永)・備前侯(細田茂政)・細川公子夫々御推任叙被為在候

由、無是非事ニ御座候、此氣運長州之幸ニ候、一橋始脚

下一寸之明リヲ貪リ、終ニ自ら夏虫の風情なる事ハ察知

無之や、いといたる浅まし、兎角

皇威振ひかね候氣運之數ニ候や、此節如之好機會とて

再期有之ましく、此上は埒もなく崩立候半欵、実ニ初発

御死力を抛せられ、

皇運已ニめぐり立むとせしをおもへハ、千載之遺憾此事

ニ御座候、爰許先無事ニ候得共、京師之模様ニ就而段々

六ヶ敷成立可申、板倉杯(藤勢)も頼れさるさまニ成行可申候、

水戸藤田虎之助(マツ)と初、浪士込百八拾人計、野州都賀郡

山田村大中之直隣大平山蓮乘院(蓮祥院カ)と云天台宗之寺ニ押入

而屯いたし居候由、市来壮七聞合ニ出、大中寺よりも聞ニ

来申候、近日右之人數勢揃致候由、夫迄も壮七見て出立

其御許江御届申上管ニ候、烈公位牌(齊昭)ヲ持立候而、横浜打

払之地組と聞へ申候、岩松万次郎殿ヲ新田之一統故、大将

ニ取立とかいたし候処、万次郎いやり逃而当地江被来

居候由、右之人數京之模様ニカヲ得、人數も重可申、さら

ハ終ニ横浜へ打出可申、此上は面々あたりて見るか宜候

不調之体ニ而初メ立候ハ、終ニ手袋引可申、さりとて氣

之毒ニ候、横浜異人之情態涯々敷儀は不承候得共、別冊

南部聞合書差上申候、宮之城公子より御聞被成度被仰越

候間、同案差上申候、佐次(岩下方平)右衛門殿昨日より横浜江被差

越候、可申上御返事ハ私より申上候様被申置候、今比は

目出度

御光着被為在候半と奉想像候、先は御報旁如此御座候、

尚可申上候、以上、

四月廿九日

大久保一藏様

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二九一号
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・五糎 横一一四・五糎

新納嘉藤二

1031 一橋慶喜外四老中ヨリ朝廷へノ請書

神宮御供料増加其他ノ件

関東より

御所江御上ケ 御所より御下札

一 昨年中

御沙汰之趣茂御座候付、別段之訳を以、当子年より年

々式千俵ツ、

神宮御供料御増加可仕候事、

格別之御事ニ付、現米式千石御増加之事、

一 闕字・平出等之儀如令条可相守海内布告之事、

一 御誕辰六月十四日仕置致間敷事、

一 仁孝天皇御忌日六日

新朔平門院御忌日十三日

右例月共心得可有之海内布告之事、

幕府精進日之通可心得事、

一 大樹代替將軍

宣下之後為御礼上洛可仕候事、

但実年拾七歳以下名代を以御礼申上、拾七歳相成候

ハ、上洛可仕候事、

書面之通、

一 三家始万石以上面々、家督官位之御礼として上洛可仕

事、

但拾七歳以下名代を以先御礼申上、拾七歳相成候ハ

、上洛御礼可申上事、

一 西国大名関東江往来之便伺

天氣勝手たるへき事、

但滞京十日不可過候事、

諸大名山城地往来之節可伺

天氣候事、

但滞京之儀不可限十日之事、

一 国務是迄之通忽而御委任之事、尤国家之大事件は伺

叙慮取計候事、

昨年御沙汰有之候通御委任之儀、今更被 仰出候迄

茂無之候、但君臣上下之名儀を正シ、末々迄泰順之

意相貫、書付類瑣末之儀迄も心得違無之趣可有之事、

一朝廷御忌日ニ重罪は勿論、軽罪之者仕置申付間敷候事、

一九門御警衛万石以下三千石以上之者江可申付事、

万石以上之者江可申付事、

一諸社 行幸之事、

但山城国内不遠場所ニ而春秋兩度位御定置、兼而被

仰出、諸人難儀致不申候様御手輕ニ奉願候事、

猶追々可被 仰出候事、

一諸大名国産之内一兩品年々貢獻可有之事、

但諸侯疲弊之折柄ニ候得は申合、五ヶ年目手輕之産

物以使者所可代差出、貢獻可致候事、

書面之通、但武伝江所可代より同様相伺、武伝より

差図之上其面々より奏者所江可差出候事、

一親王丞相薨去於

朝廷廢 朝之御方々は、海内鳴物停止之事、

但日教於親王丞相は可為三家三卿之通候、於伝 奏

議 奏兩役茂停止日教等忽而可為老中之通候事、

是迄幕府親族死去之節、以句当掌侍取計被止物音

候得共、以来其儀被止候事、

一宜秋門辺御取広相成候様可仕事、

但禁中より宜秋門は西方江曆西大將軍之凶方ニ付、

当年は御見合来り、丑年又は寅年吉月良辰相撰取掛

り可申事、

一御築地東北之辺御取広、御花畑仙洞故院御取繕可仕事、

一泉涌寺御掃除筋御手入等精々入念候之様、猶亦可申付

事、

一禁中御賄向御改革向入念候様可申付事、

一皇子皇女可成丈

御法体不被為成候様仕度候事、

但御永統之良法等々評議之上可申上事、

下札之外、簡条各可為書面之通候事、

今度

奏聞仕候拾八ヶ条之書面、御下ヶ札を以

御沙汰御座候趣、逐一奉畏候、尤諸事

朝廷尊奉之道を尽し度誠意より申上候、件々付八ヶ条
目御下ヶ札之趣は暗合之筋ニ茂有之、別而不都合無之
様可仕候、

元治元年四月廿九日

〔朱〕 一橋中納言 慶喜

〔朱〕 一松平大和守 直克

〔朱〕 一酒井雅楽頭 忠績

〔朱〕 一水野和泉守 忠精

〔朱〕 一稻葉美濃守 正邦

綴原寸 縦二七種 横二〇・六種 八枚

一〇三三 伊達伊予守ヨリ島津久光公へ

揮毫依頼ノ件

〔封紙ツラ書〕
一 双松明公

对翠拜

拜読、愈御清安奉賀候、扱昨夕ハ先刻是より申上候通、

無伏蔵御話合、胸次快爽仕、忝感謝之至奉存候、御約束

之通御賛御揮毫海岳奉深謝候、早々装治久敷至宝と奉存

候、甚欲情なから去月仲秋之御高吟と舞人の細島通行の

両首、短尺ニ希置候間、御閑暇ニ御染筆被成下度候、恐

々頓首、

即時

例文僅所略之、已上、

文書原寸 縦一七種 横四九・五種

一〇三四 久光公中将推任叙ニ付昌武ノ奉祝歌

昌武上

たゞにしもあらぬ世のさまなれば、参預あるへきとの御

こと

御勅あり、さるにつきてかしこくも

御推任叙之宣下さへかふらせ玉ふハ、文久四とせ陸月十

四日の事なりけり、邸中の人々かしこみ承り、門々たれ

もみな忝なさになミたとゞめ得す、かゝるためしはいにしへよりきゞ侍らす、さはいへ御参預のいらへはいやしきへらはへかもとより露しることならねと、かたしけなさのあまりひそかに目で奉りてしらへうたふ、

雲るより影あらへれて位山

高く出たる弓張月

澄のほるくらゐの山の弓張の

月はよひ／＼てりまさるらん

かしこさのかきりならずや祈る世に

かゝるためしは誰かしるらん

薩摩かた浦のなきさの真砂より

あらへれいつる玉のさやけさ

けふよりハ春のひかりのこと更に

のとかなりともおもひける哉

大君の大皇国の御はしらの

いしすへとなる君にも有哉

ひそかにおもひけることのありけれハかしこミ

一ふしをしらへあけたるふえの音ハ

まつたかうへの身にはしるらん

手のまひあしのふミところさへしらす、たゞ心のち

りをはらひつくさぬはいかになと人々いふをきよて

かたへらに、

おろかにもこゝろの塵をはらハすは

かゝる御代にはすまれさらまし

文書原寸(折紙) 縦一八・三種 横四九・三種

一〇三 朝廷ヨリ幕府へノ仰出

神宮ノ件撰海防禦其他

一 神宮之儀ニ付 御沙汰之次第精々遵奉之事、

一 撰海防禦敵重実備之事、

一 大樹代替之節は勿論、且官位昇進之度々上洛之事、

一 武家

朝覲扱又事ニ寄 御直達、将京都在藩是迄之通たるへ

き事、

- 一 外藩之面々は征夷府付庸之筋も候得は、其刃廉尚亦相立候様可有之事、
- 一 関東往来之便各藩可伺 天氣事、
- 一 武家官位昇進之儀、先以使者御礼申上、追而序之節上京御礼可申上事、
- 一 御委任とは乍申、事立候儀は、逐一可伺 叡慮事、
- 一 書籍類平出・闕字等追々猥雜ニ相成居候間、尔来屹度可有改正、但既往之儀は可被寛宥事、
- 一 犯 御諱候儀是迄邂逅相見如何之事候、以来屹度可相憚事、
- 一 雖武家官位必徑奏聞、可請^(金)
- 一 勅許事、
- 一 何事ニよらず被 仰出候廉齟齬不致様可有遵奉候、但天下ニ周流致し難き筋は打明言上可有之事、
- 一 御日柄之事、
- 一 勅使途中之礼之事、尚又屹度尊崇之道相立候様有之度
- 事、
- 一 九門是迄之処勤番之者も無之、余り之儀ニ候間、追々真之番所取建、時々交代ニ而も警衛可有之事、
- 一 途中之礼当春被 仰出候得共、尚又違背無之様普く布告之事、
- 一 堂上は惣而小録ニ付僮僕微少なる者申迄も無之相分候儀候得共、余分怪蔑を生し無礼ニ及候様之儀、万
- 一 有之候而は以外之事ニ付、末々迄心得違無之様可相違事、
- 一 諸社 行幸之事、
- 一 御領唯今之御姿ニ相成候は全時勢之儀ニ而、徳川氏より起候事ニ而も無之候得共、小藩ニも不被及は実ニ無勿体恐入候次第ニ付、何とか融通を以責而忒卅万石は可差出事、
- 一 諸大名国産之内一兩品年々貢獻致し候而、名義も相立可然候欵、
- 一 於京都は献上杯と称し、諸向江は自京都被

仰進なと、書認候様之儀、万一有之候而は、甚不都合之至候、其辺判然と名義相立候様有之度事、

一 当時宜秋門唯一重ニ而、廊下迄從路頭見透候は余り御手薄ニ付、九重之御名も空敷候条、不被差急儀候得共、詰り追々御造営有之度事、

一 親王丞相薨去之節、

禁中ニ而も廢 朝有之候処、鳴物停止京都而已欵ニ相聞、如何之事、

一 土木之儀御好被遊候儀は不被為在候得共、當時之

御封城余り御狭少ニ付、追々ニは何とか可被取広事、

(裏表紙ニアリ、朱)
「甲子」

冊子原寸 縦二八・五種 横二〇・五種 五枚

101K 南部弥八郎報告風説書

二冊

筑波山暴動一件、薩藩償金支払等

一〇二六ノ一

英国ミニストル先日閣老と応接有之候節、(毛利廣親)長州侯は並

仏・蘭江暴業有之のミならず、品々世評も相聞え候、

はやく御征伐無之候ハ、必ず大事を生し可申、英船は

幸於今暴発ニ逢候儀は無之とは乍申、各国条約面ニ背

き候事は、更に関係無之と難申候、若政府ニ而難被行、

我等ニ被仰付候ハ、日数二十日ニ可相決存候、且亦

世界之变化を不弁、漫に鎖閉を議し候向も、一戦有之

方はやくひらけ候理ニ而、

薩州之如きは元來諸術相開け候有名之國ニ候得共、昨

年纔之戦争後ハ別而相開け、軍艦并ニ運用船を求め、

其他大筒類ハ勿論經國之器械迄も頻ニ買入候を以て、

右等之事情御推知可有之奉存候よし申立候段承申候、

一間巷之雜説ニ、仏國より軍船數艘長崎江入港し、長州

之儀を申立候段、三月初旬伝聞仕候処、此節又同様之

雜説相聞得、若於政府御取扱無之候ハ、直ニ責寄可

申候間、早々否為御知被下度申立候由承り申候得共、

虚実相分り不申候、

一 近頃(毛利廣親・広封)長州侯父子壹万余人之兵を引卒、

京都江登り候段風説仕候、

一字都宮ニ而差止、常州筑波山辺江引取候水府攘夷家之儀は、元來彼辺為取締水戸より常式差出置候者共頭取ニ而、一ト先引返し候付日光御祭礼は無滞相済申候由ニ御座候、

右之通承申候間、此段申上候、以上、

子四月廿六日

南部弥八郎

英国龍動府新聞紙千八百六十四年二月二十日版

千八百六十三年十二月十七日横浜通信家よりの返書薩摩既に「リチャルトソン」を殺したる人の代に求めたる拾万ドルラルを償たり、

○薩摩の使者「コロネルニール」を訪ふて、彼是の談判の上其金を償ふことに至りたり、然れとも東洋国の償にて遅々漫々として、其償ふへき約束と其約束の全尾の間を久して諸望を遂たり、

○数日前其金を車にのせ、英のミニストル館の役所に輸

し来り預けたり、

○薩摩の使節議論の上収帖をもとめ、且其金は預ケものなりといえり、

○彼の不都合なる求めを以て固く定ることはいたりて、其使者直に東洋国風特に日本礼にて送与したり、

○其金算計し且一会話あり、

○其使者いふ、願くは薩州にて英の軍艦を買得ることを得は、詳に問知せん○「コロネルニール」答ていはく夫は英軍士卒に質問して告知すへし、しかれとも其造船家に命囑すへし、○薩州の一戦におゐて彼等の目的甚甚利益となりぬ、○彼等特に第二等の黒船を好む、(ピーラル) 船名 (ボルレス) 船名 此船は彼か言に甚損傷を得たりといふ、○此は「アルムストロング」砲を以ては戦はさりし船なり、

○既にして「アルムストロング」の談に及へり、彼等いふ、よく其有名の大砲の破裂丸僅に城市を破り、多くは国内一里も来り、樹木をやふり、又低く飛て寺中の

多人を殺せし、しかしなから「ピールル」は彼等の極めてこのむ所なり、

○城市の損傷著しく、三里の家屋を一度に焼き、高さ小山の樹木惣て火となりし、○一櫓船と蒸気船の外面并帆柱暗界に焼けて、恰も黄金の焼るか如し、○颯風大に鳴て雷の轟か如し、是実に鹿兒島の一戦なり、維時一千八百六十三年八月十五日なり、

○鹿兒島に於て別れ、我等に砲発し、我船と戦たる其人等爰に来て、もとめたる金を輸し、終に「アトミラー」ル「フレックカピティン」ル「コロネルニール」および「コンシユラル」隊の人々に贈物して、惣ての慰に彼等と戦ひたる勇氣なる士卒に蜜柑の大箱を贈たし、○其使者更に談合して戦時の詳なる談に及へり、○惣計日本人千五百人を損したり、

○薩の役人「ユラリュス」船に行んことを請ふ、「アドミラル」懇に小船を送て迎へたり、然れとも大君政府之をゆるさず、○是は彼の弱き言訳の後頗る不審議

なり、○彼等は政府をさ「リチャルトソン」を殺せし者を罪すること能はず、されとも却て「アトミラー」を見舞ところの役人を防く力は十分なり、

○「コロネルニール」如此戦を起さずして此大事件を定めたり、而して政府は如此人を誠に盛なりとす、○「コロネルニール」は只使節の役にのみならず、猶一人にして東洋国の肺肝を透見す、其肺肝は「コンスタンチノツボル」より江戸にいたる迄同しき也、○彼の任る官は彼トルキ様の試功に相合す、○東洋国は遅漫にして時刻の貴きを要とせず、○「コロネルニール」の所置は其難き一なり、一來ハ限なき延引を日本人に許せし延期に依て、此処のミならず、支那に在ても論者に議せられ、新聞紙によつて誹られ、一來は英政府におゐて成丈穩に事ならんことを欲するを以てなり、○嗟かれ何そ能く彼業を所置せしや、我言を待たず、○かれ真の才子のごとく上の二条の間を行ひし、○彼商人に日本地を立退くことを命せしが、豈果して容

易ならんや、其時限其黄金果して幾何の費なるをや、

○彼遂に如斯なきよるものは売買の時を移し、黄金の費大ひなる所以をもつてなり、

○埠頭も今の時勢に準し、曾て産物も十分ならず、且亦

商人も曾て富にいたらず、

○横浜已に要地となり、家屋香賣の如く生し起り、地代

莫大に上騰せり、

○薩摩已に金をおくりたる後、大君政府「コロネルニ

ル」に書を贈ていはく、何の幸そ我輩再びまた太平を

見る、且兩國間の親睦永久にして復不平の事なからん

ことを望むと、○我輩も望む所なり、○然れ共何年も

果して起らずといふべけん乎、大凡は定むるといへど

も他の事おこるへし、

右之通書生清水卯三郎翻訳仕差出申候間、差上申候、

以上、

子四月廿六日

南部弥八郎

冊子原寸 縦二七種 横一九種 六枚

一〇二六ノ二

(表紙)

「償金渡事件

要」

風説書子四月中

南部弥八郎

京師在留肥後藩人より之書状子二月廿日
仕出し

將軍様近々御暇御参

内相濟候は、直ニ下坂、無程御還府之由也、

一松平大藏侯・島津大隅侯
(慶永) (父光)

朝政御参与 御免ニ相成候、

一長州江筑前家老説得ニ参り候処、中々屈し不申由ニ御

座候、

一大和五条も又々少々ツ、起り、静ならずと申事ニ御座

候、

右前後文略、

一 三月廿一日閣老井上侯江差出、
(正重)

岩松滿次郎様御在所最寄江、去冬中浪士共相集、不容

易儀等度々御内意を申勸候ニ付、再三御断被成候得共

承知不仕、無御抛旧獵御出府越前守様御屋敷江御逗留

被成候処、追々長引候ニ付而は、御家来共も度々交代

仕、右之旅用其外爰許数日御逗留ニ付、品々御不都合

御失費多ニ而、旧来御不勝手之御中、別而被成御難涉

候、然処当節は御在所近辺江集居候浪士退散、至而穩

之趣追々御承知被成候ニ付、此節御帰郷被遊御用之節

は、早速ニも御出府被成度思召、越前守様江御内談等

も有之、越前守様ニも右之御次第柄無御抛思召候ニ付、

御帰郷相成候様被成度、不苦儀可有御座候哉、此段各

様迄無急度御内慮奉伺候様、越前守様被仰付候、以上、

阿部越前守様御家来

三月廿一日

柴崎津右衛門

同日夕付札

覚

内意之通相心得不苦候事、

一 關老井上侯江土州侯より再願書

私領国之儀は、隣国江通路相隔、実ニ辺鄙之土地ニ而

他所より入錢無之、從來金錢不融通ニ御座候処、近来

至而大小錢共扨底ニ相成、國中一統及難儀候ニ付、如

何様ニも平均仕度儀ニ御座候得共、從素勝手向不如意

之上、先年大地震已來風雨洪水等之天災打つゝき、国

力疲弊之折柄、海防之手当其外時勢不得止的用類相嵩、

弥増及困窮、前件補恤之手段必至と差泥、当惑至極仕

候、依之右為一助領分出銅を以、別紙図面之通錢札為

致出来、領内限相用申度奉存候、右は先達而家来之者

より一応伺之節御差図之趣も御座候得共、実以無余儀

筋ニ付不及是非、猶亦相願候、何分ニも前条之次第弥

以御憐察、出格之御沙汰奉蒙仰度奉歎願候、以上、

二月七日

松平土佐守

国許日付

一 三月廿七日關老同人より相渡

大目付江

御目付

御上洛御供并右御用ニ付上京之面々、夏服差支候者も有之哉ニ相聞候間、廻船江積込廻し方為取計可申候ニ付、右夏服差遣度面々は不相嵩様荷造之上、小網町巷丁目丸屋卯兵衛方江、掛り御代官手付手代詰合居候間右場所江四月五日迄に可被差出候、

右之趣 御上洛御供并右御用ニ付上京之面々江可被相達候、

三月

一 四月二日關老牧野侯(忠恭)より水戸家老江相達候書付

此度攘夷之儀申立御領分最寄江浪人等多く相集、元御家来或は御領分之者相加、不穩趣ニ相聞候、右は横浜鎖港之儀ニ付、各国江御使節被差遣、且

御上洛御留守中之折柄ニも有之、万一御親藩御家来等相加、騒乱等相発候様之儀有之候而は、以之外之儀ニ候間、取鎮方殿敷御取計可有之、尤御料私領引合候ハ

、時宜次第御打合御取計有之候様可被申上候事、

右水戸殿御城付江相渡

一 右は常州筑波山江浪士相集候ニ付、水戸其外江鎮靜方御達相成候、尤水藩山田一郎・藤田某其他六七人頭取(小四郎)之由風聞有之、從來攘夷之企盛ニ候処、近頃長州より兼而懇に相交り候者差遣し、言語ヲ以憤発為致候故、右党之者共

此御方様并会津・越前・宇和島等を品々悪評申唱候由(松平容保)(松平慶永)(伊達宗城)

ニ御座候、其上長州佐久間勝二郎と欵申者、水藩沼田(久次郎)某と兩人横浜江忍入風便之砌、放火可致企候由ニ而、

同港中探索有之候得共、相知不申趣ニ御座候、

一 先達而上総・下総ニ而及騒乱候浪人、三月廿九日夫々刑罪相成候人数、

獄門

三人

死罪

拾人

右之外佐倉江預ケ之式人は遠島ニ可相成欵之由ニ御座候、

一
日光道中石橋宿役人より支配所御代官福田所左
衛門江相届候書付

乍恐以書付役人惣代問屋新右衛門奉申上候、水戸様御
家来田丸稻之右衛門様、当月四日小栗村出立ニ而宇都
宮御泊之御先触ニ御座候処、俄ニ同日当宿江御泊ニ相
成、御同勢百七拾人余御本陣其外下宿五軒、表門江は
白地ニ御紋付之御幕を張、玄関江は葵御紋付紫之御幕
を張、内玄関ニ白地之幕を張、御行列其先江切火繩鉄
炮左右ニ式拾挺、中央ニ從二位大納言源烈(備川齊昭)公神輿、
いづれも白丁ニ而人足ニ為相持候、鞍置馬三疋牽立、
其余鞍置馬六疋宿方より差出候、荷物之儀は御長持老
棹、凡九拾人御同勢之内乗物老挺、引戸駕籠老挺、乗
駕籠四挺、人足五拾老人、馬拾式疋、不殘賃錢相払候
而、其余四拾九人、鎗鉄炮并笠持手代り共無賃ニ而差
出、大將田丸稻之右衛門様遊軍惣督と印、山田一郎様
・木村久之丞様其外御同勢何れも白洞着ニ而たすきを
懸、割羽織野袴着用、中間体之者老人も無之、不殘白

木綿ニ而鉢巻いたし、陣笠をかぶり帯刀ニ而、鉄扇・
鉄棒を持、行軍隊と申帳面を所持、百七拾人之内全く
侍体之者八拾人程相見江、其余は俄ニ日雇新入之体ニ
相見江申候、御旅宿中権威を震ひ、御同日五時頃当宿
出立ニ而宇都宮通り、白沢宿泊之御先触差出、尤御旅
籠料は老人ニ付銀式匁五分、弁当料銀八分、都合銀三
匁三分御払御座候、此段御訴奉申上候、以上、

日光道中

四月八日

石橋宿役人惣代
問屋新右衛門

福田所左衛門様

御役所

一 当月十七日、日光御祭礼ニ付御門主様御登山之管候処
御延引相成候、
一 十七日、廿日御祭礼警衛秋田安房守・板倉内膳正・御
目付代御使番有馬式部(純全)、右一件ニ付急速出立并土屋采
女正頭取ニ而最寄之大名式拾三軒江有合人数可差出旨

相達、尤江戸御人少ニ付右之内在府之向御暇は不被下、

一 四月六日 京師より申来候内

菊池久藏
二十一三才

当子年三ヶ月詰御警衛訓

春

松平阿波守
(経須賀齊裕)

伊達伊予守
(宗城)

松平甲斐守
(柳沢保中)

夏

加賀中納言
(前田齊泰)

松平隠岐守
(久松勝成)

佐竹右京大夫
(義亮)

秋

藤堂和泉守
(高秋)

真田信濃守
(幸教)

堀田鴻之丞
(正倫)

冬

松平美濃守
(黒田齊壽)

溝口主膳正
(直壽)

松平三河守
(慶倫)

一 四月九日

水藩

菊池久四郎二男

右九時分籠口細川侯屋敷留守居方江相越、中役対之
処、小石川御屋敷離散いたし、三笠町新徴組之内懇志
之世話ニ相成居候処、新徴組ニ而極密咄合之筋有之、
連判ニ加り可申旨相勸候処、不筋之企迎及断候得は、
密事を打明し候上、連判無之者可及殺害と久藏を付ね
らひ候ニ付、三笠町出奔いたし候間、何ニ而も宜召拘具
候様申出、若其儀難出来候ハ、座敷を借受、麻上下白
無垢を頂戴切腹可仕申、脇差を抜候ニ付、居合候下役
相支候処、其者之右之方衣類を五寸程切り、中指少々
かすり、右等もの騒ケ敷故障子外ニ張居候廻り方之者
直ニ組付候処、頭上三寸程疵受、又一人組付腕少々致
怪我、当人も足を三四寸切り、無程取押水府江懸合候
処、為引取徒目付其外相越、内分ニ而引取、六半時頃
召連帰候由、尤右等之処行全く乱心欵と申噂ニ御座候、
一昨春以来横浜鎖港之風説英国江相聞得、政府より在留

之国民為保護軍艦三艘江陸兵千人程のせ付、当三月下旬入港いたし、右之兵卒上陸旅宿借受度由申出、神奈川奉行其外類ニ心配仕候段、去ル十三日同所調役より内話承申候、

一 英国ミニストル先日閣老と応接有之候節、長州侯は重・仏・蘭江甚數暴業之上品々世説も相聞得候、はやく御征伐無之候ハ、必ず大事を生し可申、英船は幸暴発に逢候儀も無之とは申ながら、各国条約面ニ背き候事は、更に關係無之と難申候、若政府ニ而被成かたく我等ニ被仰付候ハ、日数二十日ニ勝敗可相決、將亦世界之變化を不弁、みなりに鎖閉を議し候向も一戰有之方はやく相ひらけ候理ニ而、

薩州のときは元來諸術相ひらけ居候国ニ候処、昨年僅なる戰爭後は別而相勝れ、軍艦并運用船を求め、其他武器は勿論、経国諸般之器械迄も買入候を以て、事情御推知も可有之奉存候旨申出候由承申候、

一 三月初旬閩巷之雜説ニ、仏郎西之軍艦數艘長崎江入港

いたし、長州之儀を申立候段風聞御座候処、此節又同様之雜説申触、若政府ニおゐて御取扱無之候ハ、直ニ責寄可申候間、早々否為御知被下度旨申立候段承申候得共、虚実相分り不申候、

一日光宇津宮辺横行いたし水藩之攘夷家、常州筑波山之最寄江引取、日光御祭礼無滞相濟申候由、右騒乱之徒は從來水府より為取締教輩彼辺江差出有之候者共ニ而、鎮静方周旋可仕処却而右様之処業何共申様も無之、尤長州ニ而旧秋以來諸事不都合相成候処、兼而久敷水藩と結び居候事故、教輩之間牒を廻し、右様之激発ニ及はせ、且亦

此御方様并越前・宇和島両老候・会津侯を指し、不謂惡評を唱え候由相聞得申候、

右之通見聞仕申候間、此段申上候、以上、

子四月廿六日

南部弥八郎

英吉利龍動府新聞紙千八百六十四年二月二十日版

(同文書ハ一〇二六ノ一号文書ノ後半部ト同文ニ付省略ス)
冊子原寸 縦二七・五糎 横一九・五糎 一五枚

〇二〇三 久光公官位昇進ニ対スル献上金明細書

三通

二〇二六 水府浪士常野ノ件及大和五条一揆再発等
風説書

(表紙)
「風説書」

子四月十四日付同十八日達日光御奉行小倉但馬守(正義)
殿家来鳥村清藏より書状写

一四月七日定便差出候後、当地陣屋詰戸田越前守留守居(徳川齊昭)
加藤勘之丞より水府浪士と唱候者、前中納言殿位牌を
輿ニ乗せ、騎馬拾人外ニ浪士百五拾人程銘々手鎗を携
鉄炮は袋ニ入為持、去ル五日宇都宮宿江着、同夜同所
止宿、時宜ニ寄日光山江相越候哉之旨注進申出候ニ付
夫々手配申付候得共、此地御警衛人数秋元但馬守・戸(志願)

田越前守人数如何ニ茂手薄ニ而、両家合せて百人にて
足不申候ニ付、近国諸家江も人数繰出し方可然達候処、
是又遠方何れ茂山路を越来候御場所にて、急速之間ニ
合不申、彼是致し候内、同八日八ツ時頃ニも候哉、宇
都宮を引弘徳次郎宿と申日光より六里隔候宿内江相越
し候注進有之候得共、同日茂同宿ニ止宿、翌九日未明
ニ日光江着致し候杯と風聞有之、同九日今市宿日光よ
り二里之処迄押寄、尤其節ニ至候而茂、追々諸家増人
数も着いたし、獵師共茂急廻状を以出張之儀御触ニ相
成候間、追々人数集り、八百人ニも相成、力を得待居
候処、同日八時頃浪士三拾人程日光江致着、

御宮江参詣致度旨申出候処、右之形勢如何之儀仕出し
可申儀難計ニ付、先拾人ツ、参詣 御免ニ相成、嚴重
警衛いたし、十人ツ、参詣いたし候処、是非奉行ニ逢
言上致度事件有之旨申候得共、御断ニ相成、再応御逢
之儀申出候間、無抛御逢可被成旨御答之上、同十日浪
士之付添参候由ニ而、齊藤佐治右衛門・須藤健之丞と

申兩人御同所江罷出御逢ニ相成申候、此節一同必死之覚悟にて、時宜ニ寄候而打捨候積リニ而用心いたし候処、先何事茂無之引取申候、乍去右之者共申立候事件は攘夷之儀御手延ニ相成候を彼是申上、其後浪士共当山内を借請罷在度申出候得共、不相成旨御断ニ相成、左候得は、浪士共騒立候程茂難計抔申候而引取申候事ニ御座候、

一 今十一日今市宿引弘之趣ニ候得共、何方へ罷上候哉相分り不申候、此後之模様如何成行可申哉難計候得共、御固メ人数追々相集候間、心強く相成候事ニ御座候、猶以字都宮家来より之注進は本文之通候得共、銘々手鎗携候儀ニ無之、三拾人程鎗携、鉄炮は十五六挺有之候、騎馬茂拾人程有之候得共、是は拾五騎、尤乗馬は疋疋、外は小荷駄宿々ニ申付、道具のミ持参り候趣御座候、

一 四月十四日申刻改人数左之通、

秋元(本朝)但馬守 百五拾人後詰共

戸田越前守 二百人計同(忠愍)

大久保佐渡守 八拾屯人(忠美)

大田原銚丸 六拾人(勝清)

戸田長門守 七拾人(忠行)

松平肥後守 千五百人程(容保)

但是は午刻着ニ御座候、

御神領獵師共 八百人

当地同心 百五拾人

右之通御座候、

一 水戸表小川館中士一条ニ付追々申上候通、日光為拜礼去ル七日当所出立、今市宿止宿罷在、追々拜礼相濟、別紙先触写之通昨夕同所出立引弘、尤五六人相待居候者有之候処、是以今朝出立可致趣ニ相聞候段、彼地役人共より申越候、猶御警衛向等之儀無油断申付置候、此段御届申上候、以上、

四月十二日 戸田越前守

先觸写

一人足 四拾人

一馬 拾五疋

右者今度主人儀 日光山參拜相濟、今十一日四ツ時今市

宿出発、水戸表迄罷越候条、前書之人馬駄々無遅滞早々

繼立可給候、以上、

子四月十八日

水戸

田丸稻之右衛門内

川島忠兵衛

十一日 今市宿出立
鹿沼泊り

十二日 合戰場泊

十三日 小山泊

十四日 下館泊
筑波泊

人馬出払高

一人足百拾四人

一乘馬四疋

一荷馬拾式疋

一飛乘駕籠廿式挺

右之通御座候、以上、

四月十一日

今市宿

一去ル十三日頃井伊掃部頭領分野州安蘇郡佐野より三里

程隔候大平山登山集屯罷在候趣相聞候処、去ル十五日

夕領分佐野犬伏町吉兵衛と申者方江罷越、宿役人ニ面

会致度趣申聞候間、問屋当番吉左衛門・年寄市右衛門

相越候処、前中納言様御遺志相繼、尊王攘夷之士儀相

立、

皇国之御武威不取失様致度、右ニ付領主役場其外へハ

密々ニ而、為国事金子調達相頼度、自然迷惑之義茂候

ハ、物持共江案内いたし候様、只管取續候程之体ニ

而内談有之候、併内心ニは及異儀ニ候ハ、強談は勿論

難題可申出、一同当惑仕、違背候ハ、何様変事出来可

仕義茂難計候ニ付、無拗申旨ニ任せ犬伏町年寄重右衛

門外式人名前を以、金子百両相渡、請取書差出し罷帰

候段届出候ニ付、此上取締方之儀、嚴重手賦申付置候段、
彼地役人共より申越候、掃部頭在京中ニ付、此段無急
度各様迄申上置候、以上、

四月十九日 井伊掃部頭内 山本運平

一 大平山浪士・筑波小川館浪士共、諸所近国富貴之百性
共へ攘夷ニ付、軍用金為差出、浪士共は金子等多分ニ
貯置、持運ひニ茂馬ニ乗せ往来いたし候趣、茂風聞御座
候、

一 常州辺不穩趣ニ付、日光為御警衛先頃増人数差出置候
処、日光奉行小倉但馬守様江申立、増人数之分一ト先
引取候段申越候、此段御届申上候、以上、

五月八日 秋元但馬守家来 大沼太郎八

一 私領分下野国足利郡足利表、同国都賀郡栃木辺江追々
浮浪之徒相集り、去ル十四日栃木最寄大平山大権現江

參詣之趣ニ而、凡三百人程神輿体之物守護之上止宿罷
在、其外領内在々所々江止宿徘徊等仕、此上如何様之
儀、可仕茂難計、彼地有合人数ニ而尚又嚴重手筈仕置候
段申越候、兼而被 仰出之趣、茂御座候間、此段御届申
上候、以上、

四月十八日 戸田長門守

大和五条一揆再発之説

一 去廿一日御届ケ申上候和州吉野郡辺村々寺院等江浪人
共入込止宿仕居候趣之処、此節追々人数相増、吉野山
上之坊江は千人余罷在、下之坊江は七百人計止宿仕、
其外村々寺院民家等江茂十七八人位ッ、旅宿仕候趣ニ
付、百性共江次第柄相尋候処、吉野山江老ヶ所、宇田
郡大禹ヶ嶽麓江陣屋取建候様ニ御座候、諸方より杉丸
太・石等運送仕候、近郷より人夫相雇候ニ付、農業肝
要之時節難波仕候趣ニ御座候、委細之儀は(山岡景恭)奈良奉行并
(柳沢保中)松平甲斐守より御届可有之候得共、手付共差出風聞相

糺、此段御届申上候、以上、

四月廿九日
五条御代官
中村勘兵衛

於京都被 仰出候御書付之由

一兵備之儀ニ付而は度々申遣置、一同油断は無之儀ニ候得共、猶今度

聖諭之趣も有之候間、此上一際行届候様致度、就而は日用不可欠之品ニ而も、銅鉄之器物以来相廢、手元之分は悉下ケ遣候ニ付、速ニ砲器ニ鑄立可申候、両山紅葉山等之燈籠其外迄も銅鉄之分は、追々砲器ニ鑄換候様可致候、一同格別ニ奮致致し、兵備行届候様可致候、

子五月

右五月朔日被 仰出候旨風説御座候、

一私在所常州真壁郡下妻陣屋詰家来之者より申越候は、同州筑波町江水戸小川館遊士之者之由出張罷在、右之

者共より去月晦日陣屋下城廻村年寄長兵衛・同与三石衛門、西当郷村同孫左衛門江申談儀有之候間、役人差添筑波町迄可罷出旨、同所町役人共より書付差越候付、城廻村年寄長兵衛差添、右三人之者煩ニ付代三人罷越候処、同二日朝帰村申出候は、筑波町旅宿八軒程江遊士共凡百人余茂罷在候様子ニ而、暮打廻し殊之外敵重之場所へ三人之者呼出、遊士共申付候は、横浜表交易追々増長致、右ニ付昨今は別而在々綿杯多分作付、場所ニ寄畑地へ桑を仕立、自然と日本国之穀物出来方薄相成、国恩ヲ思難見忍事ニ付、万人救之為我等共身命ヲ相捨追々横浜江押出、異国人を打払候筈ニ付、有徳之者は金子を以骨折可申、依之者人ニ付金千両ツ、翌二日迄ニ差遣可申、若相背候ハ、即座ニ一命可申請、即答可致旨申威候付、種々談判仕候得共不行届無余儀、夫々当人共江可申聞旨申立候処聞入無之、不屈者ニ付引立首刎可申趣ニ付、既ニ引立候ニ付無抛金子可差出候得共、大金之儀日延申談候処、其儀は不相成、勘弁を以金七

百兩宛可差出旨申聞候付、其場は退座仕候而、筑波町役人共ヲ以相歎、漸々老人ニ付金百兩ツ、可差出旨申聞、其通約定仕、差添罷越候長兵衛茂代之者前条遊士共方へ引止置、延引候ハ、直様銘々宅へ多人数差向可申旨申聞候間、無抛儀ニ付夫々出金仕候段、跡兩人代之者婦村、在所役場へ申出候趣申越候、然ル処右遊士と唱候者は何者之所業ニ候哉、寔と相分兼、殊ニ在所近辺之儀不取敢、兼而申付置候有合之人数夫々手配は仕候得共、此節御役場も可被仰付家来共追々当地江呼寄置、彼地至而手薄ニも相成居候間、前条之通多人数相集罷在候趣ニ付、此上如何様之儀出来可申も難計奉存候、就而は若已後領分江罷越、乱妨之所業も御座候ハ、召捕、若手余り候ハ、打捨、又は飛道具等相用ひ候心得御座候、右は此節柄之義ニ御座候間、先此段御届申上候、以上、

四月六日

井上伊予守^(正兼)

一 去月廿五日、私在所常州真壁郡下妻陳屋^(陣)下城廻村役人共より其筋へ申出候者、水戸様御藩士之由にて、伊藤益荒・千葉小太郎・佐々木熊蔵・熊吉彦十郎と申者、從者四人帶刀ニ而、鑓二本為相持、駕籠又は馬上ニ而罷越、重役之者江致面会度旨申聞候段、其筋より申出候間、先代官之者同村名主九兵衛宅迄出張及面会候処、彼等申聞候は、拙者共は大平山ニ罷在候大將と唱居候田丸稻之右衛門組下之者ニ而、兼々横浜攘夷決心之者追々多人数組合ニ相成、近々打出度、依而右攘夷之儀當時

公辺江伺中之事ニ而、何れ来月十五六日頃ニは御差図も可有之存込ニ候、然ル処仲ケ間多人数ニ而日々送方ニ差支、尤主人よりも少々之手当も有之候得共、中々以取統方不足ニ而、加之主人方ニも武具等之手当も有之、旁不行届之次第、乍併等閑置候得は乱妨仕候者出来候も難計、右様相成候而は、於主人も心外之次第、殊ニ願之妨ニも相成候儀旁心配之余り、無余儀所々御

領迄願出、攘夷報国之志遂一ニ申込、尤ニ被思召候ハ、右願中之飢餓ヲ凌候為、思召次第合力申請度、此段拙者共へ使被申付候趣申述候間、中々合力等之儀は不容易義ニ付、種々以方便真偽取交及談判相断候処、先納得いたし、翌廿六日朝出立、下総国宗道村の方へ罷越候由、在所詰家来より申越候、此上如何様之儀申来候哉難計候得共、前条之次第は先穩ニ引取申候、此段無急度御届申上候、以上、

五月

井上伊予守

一私領分野州都賀郡平井村地続大平山江、去月十四日より浪士共追々相集、右平井村外他領三ヶ村役人共呼寄、主用ニ而相越居候間、人馬可差出旨敵敷申談有之候処、勤農之時節ニ付甚難涉之趣相断候所、違背候ハ、其假ニは難差置杯ト申威し候ニ付、無余余承知仕、壹ヶ村ニ而毎日拾五人位も差出、時宜ニ寄候而は其余も差出候日も有之、右人馬を以荷物并米等ヲ運送為致、或は右

山上平地之場所草刈払方ニ遣候趣ニ御座候、其上右浪人共最寄村々江散乱仕、寺院ハ勿論重立候民家等江罷越、明渡候様強勢ニ申威し為立退、止宿罷在候、此節ニ至り候而も更ニ退散之様無御座、日増党類来集仕不容易形勢ニ御座候趣、彼地之者より申越候、猶取調可申上候得共、先此段御届申上候、以上、

五月五日

井上伊予守

一私領分常州真壁郡酒寄村名主九兵衛・百姓吉兵衛・北椎尾村名主長七郎江、去月廿九日筑波町へ出張仕居候水戸小川館中之士山田一郎より申談儀有之候間、可罷越旨以書面申越候間、不取敢三人之者旅宿へ罷出候処、一郎申聞候は、承知之通所々より金子借用致、漸々五六万両も出来候得共、何分多人數之儀ニ而引足不申、無抛各方よりも借用いたし度、右ニ付而は従是出向借用可致答候得共、右ニ而は女童共恐惑いたし、銘々可致迷惑候間、是迄相招候、就而は各方力之届丈借用い

たし度、尤金高之儀は当時当町名主鎌八より可致承知

と申聞候間引退、鎌八へ承合候処、九兵衛ハ三拾両、

吉兵衛は百両、長七郎は五十両之割合之旨ニ付、中々

難及、微力候間減金之儀様々相歎候処、漸々承知ニ而

九兵衛拾五両、吉兵衛三拾両、長七郎十五両ニ掛合行

届、即刻金子取揃、山田一郎へ相渡候処、忝旨叮嚀ニ

挨拶いたし、夫々へ少々之酒代呉候間貰請引取候段、

在所表より申越候間、此節柄之儀ニ付此段御届申上候、

以上、

五月七日

井上伊予守

一前書浪士共此節は大平山江田丸稻之右衛門大將ニ而集

り居、筑波表江は山田一郎頭取ニ而、諸所より軍用金

集メ方取扱いたし居候由風説御座候、水戸殿へ再応御

取押方御達御座候得共、中々多人数之事故、急速御取

押方相成兼候哉之風聞も御座候、尤水府出之浪士計御

取押ニ相成候哉之風聞も御座候、

右之通風説等諸所承合、此段申上候、以上、

子五月廿九日

冊子原寸 縦二七糎 横二〇・五糎 一五枚

1015 土持平八ノ報告書

綿船一件溺死者一人埋葬ノ件

(端裏朱書)

「甲子五月三日 小倉より土持平八」

先月十五日暮時分、小倉領門司浦之内大久保浜江死体壹

人流寄候を、浦人共見当、直様形行同浦在番江申出、先

達而及焼失候蒸気船乗組人数之者共ニ而は無之哉、役筋

より掛合之趣相達、翌十六日付役永田半次郎、御用達重

松栄治郎・村上銀右衛門共召列差越、死体細々見分等仕

候処、数日相成候形ニ而、遭骸骨柄迄ニ而面部人相等不

相分候得共、衣類は常体ニ而刀下緒を以上帯より掛結び

付居、且小袴散々ニ相成、切々腰ニ巻付、愁傷之為体、

士分と致觀察、懷中相披申候処、鼻紙入之内江大田小平

次と書記候紙札七枚、外ニ同人江被相渡候御書付一通有

之、未墨色も不相替致分明、髓成証拠も有之当人江別条無之形ニ相見得申候、然処最初見当候者共江猶又承合候処、右流寄候場所より青浜之沖蒸氣船沈場之間、海上差渡し凡沓里余も相隔候欵、左候は一旦洋中江死体払出、海底何そ江掛り沈居候を、同十五日北東風海面吹荒候故、浪ニ巻れ地方江打寄たる共ニ而は無之哉、浦人共評儀仕候、依而死体取置方ニ付而は、先々通田之浦真楽寺無常塔同所ニ葬置申度、其筋役々江曳合候処、田之浦江は当分瘡瘡致流行候折柄ニ付、纒之村内他所より死骸持入候儀、畢竟愚昧之浦人共忌避色々苦情筋申立、段々人氣差障候廉も有之、何卒大久保浜流寄候場所江葬置可具旨、無余儀申承、勿論田之浦真楽と申而も山々打越ニ而、汐干之時は浜辺より致通融、六七町程も可有之哉、格別遠方ニも無之候得共、前条担越候儀頻ニ相拒、無致方応其意、其場之墓所見分仕候処、右流寄候落より式丁位相隔山手江引上り、浦人共印塔場之傍藪原四五枚敷雜弘無常地ニ借受、諸事は迄之通杉箱等相求入棺為致、結縁ニ付

而は一ヶ寺ニ円置候方後年ニ至り可宜や奉存候付、田之浦真楽寺住持性空江引導相頼、同夜五ツ時分致内葬、私付役并御用達兩人問屋和泉屋三九郎等召列、野辺致見送、跡取始抹旁堅固ニ取計、且卒都婆後江為後証性名等書記置申候、且又別紙人相書通、刀沓本、懐中入一ツ、金子所持品等江致封印、忽而親類共江差向送越置申候間、此段申上候、以上、

但別紙人相書并右取置方立携候役々浦夫人數、御用達共より差出候通御座候間、銘々式通相添差上申候、

子五月三日
（常秋）
 小倉滯船
 唐物締横目
 土持平八

田畑平之丞殿
（正右衛門カ、四郎）
 市来正之丞殿

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三〇〇ノ
 一号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・七糎 横三一三・五糎

1010 土持平八小倉ヨリノ報告

長州事情

(繪裏朱書)
「甲子五月三日小倉より土持平八」

此節動靜等風評追々承合、去廿日付を以申上置通ニ而、其後格別相変承得候儀無之、始終雜説紛々之形ニ而、突留慥成儀相分不申、然処先達而下之関伊兵衛山口城下より諸所承合候儀御座候得共、虚実不分明之廉も有之、又々押返長府より山口諸所相掛商人之姿ニ紛入、探索方仕候様申論置候間、後日相分次第尚亦可申上候得共、先是迄承得候形行左条ニ申上候、

一先達而

勅諭ニ而幕役より萩様御^(井原主計)大身方江御用召之御奉書到来毛利九郎太江上坂被仰付候処断申出、直様同人押隠居被仰付、折角御評儀之央、水戸様より為御使者上下式拾七八人三田尻江致着、子細不相分候へ共、御召一条之儀共ニ而は無之哉致風評、夫より御上坂之処御延引と申事ニ而、今度筑前様御下国ニ付、大膳^(黒田齊博)太夫様御父^(毛利慶親、広封)

子江御面会之上、御示談之御訳筋有之、右御都合振ニより御大身御上坂可相成欵、或は当月宇佐八幡宮江御旧例之奉幣使御下向之御賦ニ付、右御通行之節御待設何欵御歎願之御訳有之、夫迄は御上坂御見合相成候御評決候哉ニも取沙汰有之、是以未突留たる儀は不相分、左候而筑前様事、先月廿日小郡御着ニ而中二日之御逗留、大膳太夫様御父子江御面会被為在、御談合振至極御機蜜之御訳柄と被伺御内情之程容易ニ分兼申候、併是迄国内秘事仕候儀共洩易く、畢竟諸家之浪士或凡下体取集之奇兵隊剽輕之者共而已ニ而、追々奔走之者有之故、何ぞ付雜説諸所江流れ、入乱候糸口を以引出候道も可有之哉、段々品を替諸方手を付置申候間実否相分次第追々可申上候、

但筑前様御通行ニ付、芸州國境迄萩様使番惣頭ニ而、上下三拾人小銃隊切火繩ニ而警固之武士被召付、小郡駅迄御見送、又々同所より馬関迄之間同断、左候而惣御供上下不残御酒肴御饗応有之、御会釈向至而

御叮嚀之由、

一先達而^(実美)三条殿一列公卿之面々、下之関諸所台場炮撃順

見有之、白石正一郎所江中四日御逗留有之、中途御行

列前後警固之武士小銃隊多人數相堅、山口之様御退駕、

然ニ跡又承合候処、右之内錦小路殿事御胸痛之御煩ニ

而、御滞宿之処、先月廿一日比俄ニ御痛強ク、吐血ニ

而終ニ御遠行、享年廿二と申承候、尤右形行早々山口

江御申越相成、三条殿警固八拾人余之手廻ニ而御遺骸

御迎として、同廿七下之関江御発足、昨日山口之様

御廻棺相成、彼表ニおひて御葬式有之御内定と申事ニ

御座候、併弥昨日御立有之候哉、中途御行列立等之次

第、未今日迄相分不申候得共、御病死之儀は相変無之

由、

一長藩并浪士共事、追々申上通、渠等之徒党各国差廻、

就中京・大坂表之動静始終相伺、勿論肥前表長崎筋江

為主用通行駅々人馬繼立、罷通候者追々見懸、右は第

一外夷船聞合と相見得申候、然処此三五日下之関取沙

汰ニは、近々既夷賊軍艦襲来と申触し、商人共家材銘々

遠在江持運、且山口より追々早打ニ而人勢繰出、商儀

区々之形ニ御座候、此内之世評ニは、二月十五日ヲ限

り夫より入寇不致候ば参らすとの風説も先比より相絶

一旦人數減少之賦ニ而、三田尻之兵卒曳取相成場合之

処、先月中旬比より、幕命ニ而諸侯より御人數被差向

との説起り、内心は不相分候得共、表ニは弥奮發激烈

之勢ひと相見得、然折柄先日筑前様御通行已来、再夷

舶参るの説生れ、其風評何方より流込候哉不相分、左

候ば前段御征罰之評ヲ夷人ト表したる事共ニ而は無之

哉、虚実承合候得共何れかいづれ、両件其筋と見居兼

申候、併先方今之形容夷舶ニ向候形ニ取沙汰仕候、左

候ば長崎より洩越候欵、頗奇兵隊之衆儀近比承るニは、

不遠賊船渡来ニ付、長藩諸家之浪士ト交を結、

皇国之御為ヲ存、国家ヲ捨攘夷之道を開くと尽力炮戦

せし時ニ臨、小倉藩去夏時分之如く、夷船江薪水等送

り候ば魚ニ水之勢ひを得候、増而傍觀ニ打過候ば、仮

令夷賊と炮戦央たりとも機ニ乘し、則彦島出勢之征兵三百人を押寄、追々千人余之奇兵を以取囲、城方江差向火矢ヲ飛し、類火煙ニ紛切入候ば風前之塵を払ふよりも心易く、手も無之儀と奸策いたし、小倉藩も其說風ニ致伝承、仰天之為体、勿論先達而長州御征罰等之御内命被仰渡候而より俄ニ籠城之用意専と心得、当時外堀等土揚いたし、左候而城柳外廻之作事日々太粧之形ニ相見得候付、内々承合候処、万一諸侯より此表御出勢之儀共防長江響合候ば驚破渠等共田之浦より門司浦大里之間江押渡、要地ヲ踏へ候ニは別条無之、假令其時機ニ至り小藩之徴兵を以、先鋒血戦之術無之、依而守城防禦之策ヲ大要と心得、十五日より廿日が間必死防戦仕候ば、其内諸侯之御援兵追々駟集可申哉と一事ニ評儀相約候由ニ而、外ニ全策略無之段役筋より承届申候、

一吉川監物事、家来末々ニ至り萩様当御政事ニ致同意候哉否之儀共、去秋之比よりは迄段々渠か内存之程探索

仕候処、弥隔心之形ニ相見得、勿論大膳様より再三御使者被差立候節々、病氣と相唱、始終面談不致、尤同人事折角

公武御合体之道致理解、去夏中山侍從殿来着之時分ニ(忠光)も、大膳太夫様御父子江屢諫言いたしたる儀共為有之由候得共、益田右衛門佐始一味列藩之輩傍より、勤王慷慨之暴論を以相拒候処、一己之宿意不相遂御信用無之、依而自家之陣屋馬関江出来候を悉く取除、出勢惣而曳取、夫より近比迄は音信相絶たる形ニ相見得候処、如何様監物深意之訳も可有之歟、先月中旬比より御加勢として凡七拾人出勢、主将名前等未相分候得共、関内西谷寺致陣所ニ、左候而前田と檀之浦との間江台場老ヶ所築方被仰付、自金を以相勤付而は、出勢之者共飯米薪等ニ至迄惣而岩国より差統相成候由、然ニ監物内情之儀は不相分候得共、当座御会釈向迄之事共ニ而は無之哉との旨、萩藩中よりも見疑ヲ相掛候形ニ而、奇兵隊等江は勿論、其外屏藩江取会候儀共曾而無之由、

一石州浜田亀井（森監）隱岐守様より為御援兵五十人山口表江御

出勢、且又当分芸州境小瀬川口江萩様より炮台御築方

有之、右御加勢夫八拾人被差出、左候而毎月一兩度ッ

、隱岐守様より山口江為御見舞御參殿有之、至而御親

ミ厚く、依而は先年来何ぞ御所縁も可有之哉承合候処、

十五ヶ年跡浜田之御城御焼失ニ而、武士小路市中不残

及類火、数多之死人等有之、其節萩様より御米三千表

・鎧五拾領、其外御番所備付用之武器類被進候儀共有

之、勿論御領分之内五穀無多事々御払米相成、右旁

之御訳柄を以、前条通御会釈宜敷形ニ相見得申候、

一先月廿日比、前田村台場堅之奇兵隊之内、名前不相分

候得共、年比廿計之者、同所大庄屋之娘江兼而致懸想、

追々馴染合蜜通之段致露頭候を、奇兵隊共聞伝、役筋

等之指揮も不受、両三人申合詰腹為切、終ニ死体浜辺江

担越スタ／＼切試、剩右之首途中江晒し、合手之女髪

毛薙、行状不宜者ニ而此通と申事を大庄屋兩親江申送

届候処、親類より遠島願出候儀共有之、又或時下之関

商人共兩三人相会、酒肴取囉し相給候中ニ一人致酒狂

候者を不意ニ奇兵隊共兩三人列而通掛、無体ニ町家江

踏入、子細も不聞入直様一人之首搔落、長府領高札場

江持越晒者いたし、尤右式取締ニ付而は長府目付其外

役々三拾人程混より出張、兼而右体之者は手を付置、

糺明之上、夫々役筋より取捌相成候風格之処、奇兵隊

江政事迄立携候儀、役々不納得ニ而、右兩件より段々

互ニ毛ヲ曳キ疵ヲ求、双方非分申争、依而只今御兩家

御役々御評儀区々之形ニ而、右而已ならず様々異論差

発、軍陣之法令不被行、不遠目前之味方之戦争曳起可

申哉、上下懸念ニ存候者も段々有之由、

右通御座候、以上、

子五月三日

小倉滞船
唐物締横目

土持平八

御家老座
奥掛書役勤

田畑平之丞殿

市来正之丞殿

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三〇〇ノ

二号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六種 横八二五・七種

一〇三二 近衛忠房卿ヨリ島津中将殿へ 副書共二通

国事御用掛辞退及短刀所望

一〇三三

〔包紙ツッ書〕
一島津中将殿

几下

忠房

〔朱紙三ツ同シ〕

□

□

□

〔封紙ツッ書〕
一島津中将殿

几下

忠房

「

」

尚以、毎々御所望申入、甚申入兼候得共、何卒〳〵
宜御頼申入候、かしこ、

薄暑之節弥以御勇猛珍重候、誠ニ旧冬来長々御滞京、段

々不一方御粉骨御尽力、実ニ御苦勞〳〵奉存候、先々御
滞無御帰国ニ相成、嗚々御畏と存候、誠ニ時々刻々国事
切迫之形勢

朝憲御衰頽、実ニ此末如何可相成哉、唯々心痛之事ニ候、
前殿下・愚拙国事御用掛辞退候処、

御差上前殿下ニハ再三之御辞退ニ付被 聞召畏入候、愚

拙儀ハ不被 聞召、甚々痛心之事ニ候、御察し可給候、

尚又此末御上京勤王ヲ被尽候程祈り入存候外無他候、扱

先頃九寸三部之短刀御所望申入候処、御恵給早速ニ拵申

付、度々重宝致楽シミ居候処、此頃舍弟一乘院門跡上京

〔近衛忠房〕

ニ而段々所望、無抛譲り候事故、甚申入兼候得共、九寸

三部之古刀之短刀御所望申入度候、何卒恵給候ハ、深々

大慶ニ候、仍申入試候、扱此茶菓御一笑ニ進入候事、

五月六日

文書原寸 縦一六・三種 包紙原寸 縦二七・三種

横 四五種

横 三七・八種

一〇三二ノ二

(包紙ウツ書)
「内府様より

大隅守様へ

御書

ノ

ノ

鹿菓一箱(鳥津茂久)修理大夫殿へ進入申入度、宜御伝希候、以

上、

副書ニ申入候、先達而ハ修理大夫殿ニ御所望申入候反物類、早速恵給深々喜悅候、早速より色々ニ致、深々喜悅候、宜御伝声可希存候也、

忠房

島津中将殿

几下

文書原寸 縦一六・五種 包紙原寸 縦二七種

横二三・七種 横三八種

一〇三三 大原重徳卿より島津中将公へ

関東風説之件

(包紙ウツ書)
「島津中将殿

重徳

緘

(封紙ウツ書)
「島津中将殿

重徳

二白、時氣御自愛專要所祈ニ候、万々後便ヲ期候也、風説書二冊ハ御家来へ渡し置候、御覽可被下候、以上其後ハ打絶御無音、無申条事ニ候、追日暑氣逾御清康珍重存候、陳ハ当節時勢大ニ切迫いたし、心痛のミの事ニ候、就てハ関東之模様風説書風と手ニ入、甚敷事共大ニ仰天いたし、虚実之程吟味いたし候へとも、更ニ相分り不申、実ニ心配如何可致当惑之処、(吉井及実)幸輔来り段々咄しいたし、虚実不相分候へとも、先為見候処、書取何卒真偽吟味治定御国元へ可達との事ニ付、追々吟味候へとも不相分其内愚案ニ迎も分明ナルコトハ分ル間敷候へとも、風説ハ風説ニシテ全体之処一帳ニ認候通り之事故、虚とも定メかたく実とも定メかたく候へとも、自然、真実ノ時ニハと存候へハ、何とも御六ヶ敷と御案し申上候ニ付、貴兄

御上京ならてへと存候ニ付、一帳ニ認候次第ニ候、何卒御勘弁所願ニ候、巨細御使之仁可申述、先小子之存念荒々申入候、匆々要用而已如此候、不典、

五月八日 燈下認、乱書御免御推覽、

文書原寸(折紙) 縦一八・二匁 包紙原寸 縦二七・六匁

横四八・六匁 横三九・四匁

1033 水戸浪士日光山方面ノ情報

(端裏朱書)
「甲子五月九日」

日光山辺江浪人致蜂起候付、再度差越候而聞合仕候
成行左ニ申上候

- 一去ル五日、於大平山ニ勢揃有之筈候処、未人数不相揃延引相成候由、勿論千人ニ相成候而より可有之との取沙汰茂有之、当分大平山之内江調練場切開方有之由、
- 一山田之内大中寺と申寺江長州浪人四百人位差越賦之由
- ニ而、当分修甫等有之由、尤大平山より半道位相隔居申候由、

一栃木町之内金龍寺と申寺江頭立たる者老人致止宿、勿論一刀流千葉周作門人十二三人相抱、隔日ニ稽古為致候由、

一於栃木宿、陣羽織并着込数枚追々出来、其外武器類并同断之由、

一字都宮并関宿・古河・栃木宿陣屋為借入由候得共、皆断りニ相成候由、

一大平山通口江四五ヶ所御番所取拵、通行之人々時々相改候由、尤入口ニ下乗と云杭相建、本寺蓮乘院ハ御殿と唱、住持当分上野江相逃し居候由、

一諸所江致周旋、追々其党ニ加り候者有之候由、尤法令ハ嚴重ニ有之、不埒之者ハ水戸之方江送返し候筋ニ相聞れ申候、

一当秋比迄滞宿之賦と取沙汰御座候、
右之通承得申候間、此段申上候、以上、

子五月九日

文書原寸 縦一七・八匁 横五四・八匁

一〇三 松平大膳大夫ヨリ攘夷ニ付朝廷へノ伺書
五月九日

御窺申上候事

一 癸丑墨夷之請不被差許候得は、可及戦争と閣老言上之
処、無是非儀と被思召候御旨被

仰出候趣は、御沙汰書に相見、委細奉

勅始抹可申上候通に御座、是即は和議を斥け戦争に決
し候正義正理にて、先皇攘夷之御大典ニ而可有御座、

然処此度即今之掃攘を妄挙となし、武備充実、他日之

征討を以御大典と被 仰出候は、乍恐

朝議前年と御齟齬と被為在間敷哉と奉伺候、即今之掃

攘より御手始相成候ハ、武備茂漸々充実致し、爰に

他日之征討も相整可申、其次第を茂不被立、武備充実

征討と而已被 仰出候而は、其実は是迄之御処置ニ不

相変、上巳上元之禍乱又々引起候茂難測、差当り諸僞

沸騰、生民塗炭之

宸憂は如何して御安し可被遊欤、如何程大艦巨炮御制

造相成候共、六十州中夷狄同様之人心に成果候ハ、
最早御国体之御挽回は御六ツヶ敷可有御座、利を捨て
義を取り、先人心を御化興相成候ハ、大艦巨炮ハ且戦
且備候而充実も可至、無不戦之精兵と申一語源旨者之
候哉に奉存候事、

一 攘夷之

勅命藤原実美卿之御矯と被 仰出候処、実美卿議奏御
(三卷)

任は去戌十月八日ニ而、夫より以前破端攘夷之

叡慮を伺定め候、其節家臣之内開国航海之説を令密疏

候者有之候付而は、御懸念に茂被

思召候段被 仰聞、早速其罪取糺し、戊午年来之

勅詔并御沙汰書之御旨都合は奉承知居候得共、猶又委

細御窺申上、御付紙を以被 仰出候御旨意ニ本き破約

攘夷を以、弥御国是と考定、其段言上仕候処、

叡念御符合武刃周旋之儀

叡願ニ被為在との御沙汰被 仰下候、彼是之次第攘夷

之

勅命、戊午年より六年來之御鏈合

叡念之御切逼ハ、無余義次第にて、速に貫徹と被仰出儀

ハ

勅文中毎ニ奉伺候、且又十八日變動後、幕府之御沙

汰書に迅速ニ可奏掃攘之切、又列藩江之

勅諭ニ勤 王之諸藩不待幕府之示命、速ニ可有攘夷と

被 仰出候得は、定而御矯命には被為在間敷哉と奉存

候事、

一 討幕之師と被 仰出候は、如何様之

勅旨ニ被為在候哉、大和国行幸之御一挙ニ而茂可有御

座哉、右は兼而 御親征之

思召被為在候段、一昨戌秋

宸翰内密拜見仕、始而奉窺居、攘夷之

叡念貫徹仕兼候付而ハ、乍恐

玉体を以天下に御先立之御実行被為頭候ハ、人心感

奮貫徹之驗可相立との主意にて、石清水迄

行幸之儀、(二条齊敷) 関白殿下迄密建仕候処、豈料、大和国

行幸と 宸断被 仰出候次第、委細ハ奉

勅始抹ニも申上候、其節在京之因州米沢には其次第家

臣共より申入置候由、全以実美卿御主議ニ而は無御座

候、然るを討幕之師と被

仰出候は実以恐多御事と奉存事、

一家臣共狂暴と被

仰懸候三ヶ条は、先達而委細奉

勅始抹并取調書申上置候間、改而は弁解不申上候、微

賤之者にて候得共、先祖以来恩顧之者ニ候得は、条理

明白従服仕候様諸事申付度奉存候ニ付、微意之趣被

聞召分、早々御沙汰被

仰下度、謹而奉待候事、

右先達而差出置候奉

勅始抹并取調書ニ茂申上候儀ニ御座候得共、此度

勅幹拜見被 仰付候付、乍恐猶又前書之件ニ御伺申上候

間、何分之御沙汰被仰下候様奉願候、以上、

四月

右考紙

治部卿

此度

勅翰并御請等之御写、謹而拜見仕候、然処先達而差出置

候奉

勅始抹并取調書江被為对、何分之御沙汰被

仰下候上に無御座候ハ、

勅翰之御旨趣家来中へ及布告候様ニ茂難相成次第に付、

先迄は布告之儀(虫損)差扣置候間、別紙御窺書之趣を以

朝廷向可然様御取計可被成下候、此段奉願候、以上、

四月

(毛利慶親)
松平大膳大夫

冊子原寸 縦二八糎 横二〇糎 四枚

1011 出水郷横目等ヨリ谷村孫八へノ届書

大和吉野山真如院使僧ノ件

和州吉野山

真如院弟子

右は出水野間原御番所江參掛、法用ニ付飯隈山江罷通度

申出候ニ付、差留置応答之次第申上候処、右は往来手形

致所持居候者ニは候得共、当節柄疑敷者候条、出水郷士

是枝泰珠院を以尚亦為致対談、法用之趣意等遂一承届候

上、何分早々可申出旨被仰越、同人ヲ以細々為致対談候

処、治部卿申出候は、私事生国尾州名護屋藩亡勝野庄太郎

五男ニ而、七才之砌より右吉野山真如院弟子相成居候、然

ニ当八月聖護院宮様吉野山江御入峯之御模様ニ付、防州

徳山之十乗院儀当三月二日真如院江致登山、十乗院より

日州飯隈山蓮光院方へ、右御模様之段内分口達之為使僧

可罷下承、同十九日吉野山致出立、廿二日大坂より出帆、

去月六日防州新泊江着船、同日徳山十乗院方江差越、六

日程致滞在、夫より長州萩之養学院方江差越、前件御模

様ニ付使僧之段申聞、同日致出立候処、養学院役僧宝藏

院名前之者同所城下出迦迄案内として差遣具候上、長崎

神護寺江罷通候筋之添状迄茂養学院より貰請、下之関之

様致通行、九州路罷通差越候段治部卿申出候ニ付、宮様御入峯之儀拾九之御歳御一世一度之御例ニ候処、此節は何様之訳ニ而候哉、且亦真如院門弟ニ而十乘院より往来手形差出候哉、殊ニ長崎守護寺江差越候添状、何様之訳ニ而養学院より貫請候哉為致尋問候処、御入峯之儀例外ニ付而は

叡慮又は宮様思召欵茂不相分候得共、当時夷賊追々来船之折柄故、為御祈禱御入峯之哉(有脱カ)ニ内々承、未表向ニ相発候儀ニ而は無之段申出、尤十乘院儀は大峯三之宿故、右通往来手形差出呉、其外長崎江之添状貫請候儀は、御国江差越候者は、長州番所諸所改方別而六ヶ敷、容易ニ通行難成候ニ付、長崎守護寺は東山派ニ而候得共、以前より之知人ニ而、差越候筋添書ヲ以可罷通旨養学院より任申ニ貫請、右を以下之関番所等致通行段治部卿申出候、一蓮光院儀、先比遷化相成候旨申聞候処、於其儀ニは、伊予之防又は永徳院川原遍淨院父子、山下泰応院儀も以前より之知人ニ而、前文御入峯之御模様申聞度、殊

ニ蓮光院兄弟は入峯之砌より入魂ニ而、御国之様可罷下段も承候儀有之、昨年より其心組ニ而候候処、折悪敷吉野山焼失、殊更大和一揆騒働之儀ニ付、是迄他出等難成折柄十乘院より右通真如院江相談之上、此節之使僧幸ニ存差越候段申出候ニ付、袈裟筋は何様ニ候哉申聞候処、白地ニ水色免許之段申出候、

一右通申出候付而は、法用ニ付飯隈山江罷通候外子細有之間敷相聞得、勿論乍蔭召付置候番人等江始終之様体等気を為付候処、何そニ付不審等敷儀全無之、間々幼童等敷儀共有之候付、猶亦泰珍院を以何欵之物咄等為致物越ニ承候処、此比吉野山辺ニ而武術等も致執行候杯と相咄又此節下之関江通行掛段(邊)之浦井赤土台場等致見分候処、余多之砲数ニ而百五拾封度二挺、八拾封度五挺、三拾封度拾六挺船ニ備付有之、其外騎兵隊先鋒隊等陣営を立、大粧成形勢ニ相見得居候杯と無何心体ニ致物咄、殊ニ当月十日前後ニは長州江夷船渡来之趣、長州より長崎江差越候者共より注進いたし候飛脚之由

ニ而、中途ニおひて行逢候段茂相咄、法旨は勿論世上之形勢等年輩不相応汲受候者ニ相見得、就而は前文坊州(筋カ)徳山之僧別意申含為使僧御国江差遣候欵茂難計、何分方今之事情ニ候得は、無子細者と一途ニ難差究、然共不審を起シ疑を生シ候儀は人々浅深不同茂有之事ニは候得共、当時柄使僧一向之者と難振向者ニ御座候間、此段申上候、已上、

子五月十日

出水表
縮方横目

川元 瀬兵衛

右同

塩田 十郎

出水方限

抜米縮横目

福田 助七

右同横目勤

鮫島次左衛門

出水地頭代

跡縮横目

平川 助七

出水諸横目

土岐新兵衛

琉球産物方掛
御裁許掛
谷村孫八殿

文書原寸 縦一六・五種 横三四一種

二〇六 井上大和ヨリ大久保一蔵へ

京撰ニ於ケル朝幕ノ動靜ニ付

(端裏朱書)
「甲子五月十一日」

別啓

御立後即議伝両職之家々へ投書 尹宮 陽明家之御事も為有之ヤ、又今之国事掛御免ニて、九条・鷹司等へ被仰付可然との事、然処右ニ就而欵、一昨日有栖川御父子(敏仁親王・煇仁親王)・(実良)・(道孝)・(大納言カ、輔政)一条様・九条大納言・鷹司中納言へ国事掛被 仰出候、議伝之面々ハ御辞職御願意、是より先 尹宮 陽明家も御辞職之事有之候得とも、無名之投書ニ付 御辞職トハ余御残念之御事ト 山階宮様より御差留ニ相成申候、
宮方ヲ始是迄之国事掛へハ昨日より十人ツ、交代、一橋

会津・諸司代之三家より守衛被差出候、去月廿九日將軍

參 内之管候処、浪士相集り候風説有之、參 内延引ニ

相成、尹宮ニハ早々御退出、陽明家御召ニ相成候へ

とも、御父子とも御不參、尹宮ハ夫より御所勞、于今

御參 内なし、山階宮ニも其日暮時分御退出、御用心

ニ而御蜀ト申事故、笑而のミも不被居、御列外御供たる

心掛、歩行仕候へとも、あやしき者一人も相扣不申、誠

ニ嘆息之至ニ御座候、將軍も七日ニ御発駕、一橋ニも一

昨日より摂海巡見のため下坂ト申事、其外小路取縮旁日

々相變申候、右申上度、乱草真平御有免可被下候、以上、

五月十一日

大和

一藏様

御下

文書原寸 縦一六・六種 横一〇三種

1014 伊達伊予守より島津久光公へ 別啓共二通

近状音問及宇和島藩士鹿兒島行ノ件

一〇三七ノ一

(包紙ウツ書)

平安

島大隅守様

密呈

伊伊予守

(封筒ウツ書)

「島津中将明公閣下

密啓

予州少将拜

(封筒ウツ)

封

拙翰拜呈仕候、向暑之候御座候処、先以

御全家様愈御安康可被成御揃奉南山候、先頃ハ御首尾能

御暇參

内相濟、加之御昇進被蒙仰、積年之御忠誠御尽力願達、

恭悦之至奉大賀候、其後御発軔、今程ハ疾ク御帰国御安

悦之程奉遙察候、乍然御自国之御政務御多忙と奉存候、

扱又御在京ハ格別御懇交被成下、感激難尽申奉存候、其

内失敬而已、恐悚仕居候、先頃御航海之時、於播洋平運

丸器械少々不工合ニ相成、別船より御通航相成候趣、平

運丸乗組高崎(五六)兵部より領海三机港碇泊いたし、一封家来

へ報候故承知仕候キ、其後無御滞御安着と奉賀候、僕も

十四日乗船、翌望日第二時帰着降心仕候、老父所勞も同
扁中漸安ニ相至候方にて仕合ニ御座候、乍然右体故今以
山海難參、練兵一見も不仕候、乍前後神京も尔後先々佑
然之由、日々如何と想像仕居申候、大蔵・長良兄等も此
頃ハ帰国、安心と相察申候、先ハ前文御頸申上度、万纏
之心緒日夜可申上候、恐々謹言、

仲夏旬一
伊々予守
宗城

島津中将英明公閣下
侍史中

二仲、時下為

朝野御保体奉専念候、(大久保)市藏始知己之衆御在側之時可
然御一声奉憚候、僕瓦全作失礼御放念可被成下候、

已上、

文書原寸 縦一六・九種 包紙原寸 縦二八・七種 横三八・八種
横 七九種 封筒原寸 縦一八・五種 横 四・二種

一〇三七ノ二

〔封紙ウツ書〕
一別啓内用

以別楮申上候、然ハ此度家来共蒸気船運用航海術、船上
砲術等修業申付度、江戸表へ出候事、当然候得共、幕風
甚安心難致事御座候間、尤御迷惑御氣之毒奉存候得共、
左之者共差出候間、無服藏御家頼衆にて使役教示有御座
度御一声奉希候、貴藩へ差出候ハ、大安心、第一当節柄
国論一定不致、先方ハ懸念、貴国にてハ明白論故、それ
らも極々仕合ニ御座候、勿論皆々愚昧且下地も無之故、
嗚々御家頼も骨折事と存候条、呉々可然御沙汰可被成下
候、恐々頓首、

五月十一日

奥小姓勤
今泉彦六
上田一学

外ニ輕輩四五人

尚又修業之者故、一切御取扱向無御座様、勿論希上
候、可相成ハ都而家来より委曲可相願候条、御国法

に御障碍なき筋等聞取可被下、万一心得違も候ハ、
早々御差返し可被下候、已上、

三伸、一日も早く為習度候故、趣次第貴所へ不相待

差立可申欵も難測、御心得被下度候、不備、

文書原寸 縦一六・九種 横八二・二種

1036 小松帯刀ヨリ中山大久保へ

京都ノ状況其他

御立後当地之形勢、去ル三日迄之形行は先便申上越候
通、其後之形行左ニ申越候、

一何そ別段相替候事ハ無之候、先無事ニ御座候、乍毎流
說等は不相替御座候、申上程之義は無之候、

一大樹公去ル七日早天御出立ニ而下坂ニ相成申候、日数
三十日計は浪花滞留ニ而、海岸見分等有之由、左候而
蒸氣より御帰府之由、(徳川慶喜)橋公も八日ニ下坂相成候よし

何御用と申事ハ存不申候、定而海岸巡察

大樹公江御同等ニ而可有之と相考申候、

一閣老(忠精)水野様滞京ニ相成候段、先便申上置候得共、水野
ハ御供ニ而淀残りニ相成申候由、

一大樹公

朝廷江御請書跡便より差上可申段、先便より申上候、尤
候得共、右は大島(西郷)より差上申候間、別段不差越候、九

門外柵出来之図面ハ、内府公より拝借写取差上申候
間、御差上可被成候、未取掛リニは不相成候得共、御

治定為相成哉ニ被聞申候、乍併

近衛(忠實、忠房)兩御所様は御不同意之由承知仕候、(齊敬)二条様折角

御取締ニ可宜と一橋辺と御談判有之候事ニ被伺申候

一尹宮之処、三日便ニ申上候通、其後相替候事も無之、

于今御不参之様ニ被伺申候、竹下老条ニ付伊丹も被悪
候、兩三日は不参と申事ニ御座候、定而引入心得ニ而
候半と存申候、竹田ハ会津潜居候由ニ御座候、先日会
人ニ取会候得共、為何咄もいたし不申候、

一御屋敷中無事、仕合之至御座候、

一宮之城ニ茂御煩、未寸切と御快氣無之、御痛ミハ御快
(島津久治)

由候得共、御步行等被遊候義御出来不被成候間、御引
移も不調候、御駕籠へ被召候義共御出来兼故、彼之御
方ニ而御養生ニ御座候、しかしもふハ御宜敷方ニ御向
被遊候間、近々之内ニは御引移も被相調候半と奉存候
間、御懸念被遊義ニは無之候、

一昨日は岡崎ニ而調練有之、我々共ニも出張、早朝より
昼迄ニ相仕廻候、

一久留米御船老条御挨拶之義、大坂へ申遣し置候へとも
只今家老有馬監物参り申候付、当人江細々申述置申候
間、左様御承知可被成候、

一江戸表一騒之義も巨細相分不申、取々之説ニ而突留候
事分兼候間、慥ニ承出次第ニは早々可申上候、長引合
之事ニは相違無之向ニ御座候、(木戸孝允)桂小五郎罷越候義承申

候、爰元外方之義も細々手を付置候間、追々可申上候
(方平)岩下より一騒老条之一鋤差越候付差上申候、

一大脇弥兵衛・倉野直右衛門・国分次郎兵衛三人、長沼
方江入熟(塾)被仰付置候得共、先生と少々議論いたし、と

ふも夫成召置候而ハをかした者故、(西郷隆盛)大島抔談判之上江
戸表江被差遣候方可然と之事ニ而、奉伺答候得共差掛
之事故其通申渡申候間、其段御申上置可被成候、此方
之人教之説何そあしき事ニ無之候間、其通取計申候、
右ヶ条書を以申越候条、両御前江御申上候義共可然様

御取計可被成候、此旨御内用を以申越候、已上、
五月十二日 小松帯刀

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三〇七号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六種 横二七四・二種

一〇三九 吉井幸輔ヨリ大久保一蔵へ 二通

上海ニ於ケル貿易及武器購入ノ件

一〇三九ノ一

方今人胆ヲ壮ニいたし候儀ハ勿論ニ候得共、亦器械不相
備候而は、兎角権ヲ此方ニ取候儀出来不申、幸今般航海
不為蒙 御免候ニ付而は、上海辺ニ而器械相求候ハ、彼
是都合も可宜、且ハ外国之事情茂祥悉相分り可申候間、

航海御開キ之御存慮有之候ハ、弊藩よりも蒸氣船差出可申候、左候而兼々御説もいたし置候通、国家疲弊之折柄御座候間、茶其外国産之品持越、武器買調申度、何レ張出シ候而武器も手ニ入レ候ハでは埒明事ニ無之、尤此儀ハ只管

皇国之御為を存候計、外ニ余念無御座候、されど又不容易事件ニ而、又々誹謗茂可受候得共、唯今之御仕向ニ而は貿易之利商人のミニ在而、驕りヲ極メ候計、一モ武備充実して 神州之御為ニ相成候事ハ無之、只無益之交易不堪歎息次第ニ而ハ無之や、右様産物を以器械相求メ候得は自ら物価沸騰、下民難儀ニ可及、此儀ハ実ニ難忍儀ニ候得共、何迄茂醜夷之輕蔑ヲ受ケ候より、武備充実、皇威相立、彼か悔ヲ不受様いたし候方急務欤と存候、何分不容易事件ニは候得共、兼而任御懇意、先生迄御内談申上候、

但此儀御納得被成、近々器械買求方として航海いたし候ハ、其術業モ熟成シ、海軍モ是より起り可申候間

御塾生之内よりモ御差出被成度候、

右之通勝麟江(海船)及内談候ハ、兼而持論之事ニも有之、其上 御家を欣慕之人ニも御座候間、定而同意可有之、左候ハ、先一艘御人撰ニ而兵庫江御廻シ、御産物十分御積込ミ、上海航被仰付、大炮劍銃御取入相成度、其上ハ五代等が策モ如何様共御施行相成候時宜可有御座候得共、先初発ハ何分ニも彼方御打合御取起シ被為在候方大ニ可御宜、愚考仕候、今度航海相開ケ候付而は、不可失之好機會と奉存候、何分御吟味之上早々御報奉願候、已上、

五月十二日

(吉井友実)
幸輔

一蔵様

文書原寸 縦一六・四糎 横一七八・七糎

一〇三九ノ二

細島より之尊翰去ル十日相達、拜見仕候、先以 御機嫌克被遊御着岸、恐悦御同慶奉存上候、其後無御滞御着城被為在候半と奉恐悦候、しかし器械相損御移舟之由、嘸

御配慮奉察候、次ニ貴兄ニ茂無御障御帰着被成御座候者
奉欣喜候、御母公如何之御様子御座候哉、貴兄御着相成

候ハ、御塩梅モ被為直候半と奉存候、爰元御邸中一同無
事、朝夕大島・伊地知等取会、近々大夫ニ茂会合、岡崎

調練現打セ相始り、随分振立居申候、昨日は大夫始出張
申、盛んニ出来申候、一戦ハ立派ニ相調可申と相考候、

当地之形勢も格別相変候儀も無之、段々風説ハ起り候得
共、例之虚唱ら敷被相考候、將軍引払後猶亦京中淋敷相

見得申候、

一御着後如何御国事御手モ相付候哉、上海航被相始御事

共候ハ、必ス勝麟江打合置申度、無左候而は後來御

手延兼候訳も到来可致歟、肥藩江口純三郎等も参り候

而、どふそ兵庫へ御打合、海軍御取起被為在度頻ニ申

立候儀ニ御座候、猶別紙を以申上越候間、篤と御勘考

可被下候、

一水本一条別紙通申来候間、是亦早々運立候様御取計可
被下候、先は

御着城之恐悦等旁申上度、如此御座候、猶奉期後喜候、
恐惶謹言、

五月十二日

吉井幸輔

大久保一藏様

侍史

文書原寸 縦一六・四糶 横一三〇・六糶

100 九鬼式部少輔ヨリ川越侯へ

参覲交代制復旧ノ件

(表紙)

五月十八日

〔貼紙〕 「此書も川越侯へ御日書入御見候而已、是初女も立限

相成候と存候」

謹書愚衷以再奉呈

川越侯膝下

藤原隆都百拜

中庸曰、夫孝者善繼人之志、善述人之事者也、行其礼奏
其業、敬其所尊、愛其所親、事死如事生、孝之至也、今

關東大政妄變、古格改旧例、其事雖似被遵奉

天子、然實失其職、威却至於有被惱

宸襟之事、請速復古格旧例、以善繼述其 祖先之職業、

以慰 祖先之神靈、其中年始嘉儀最至重也、如賜其時服並

御盃、是即親諸侯正尊卑之典禮也、如興行其謠曲以饗諸

侯、而其余沢及士民、是即和人心共歡樂之雅樂也、次如

其嘉祥玄猪亦是 御当家之為 御吉例共不可廢也、且如

被置其諸侯之妻子於

御城下、是即為本朝古來使人心不離散之要典也、夫人心

不離散則天下之諸侯一致而心 將軍之指麾、是為

天子被尽忠節之基本也、故如迎其夷舶嚴防禦、以威伏夷

情等之事、是即此要典之功也、 大將軍嘗過而脱此要典

毛利忽叛逆而闇殺 幕吏

天勅既顯然被糺其罪、是可奉真恟怖感激矣、且腹心股肱

普代恩故之諸侯、以何一言為、是不奉忠言而容易使其妻

子趣我國郡矣乎、不知其心忠与不忠、請疾令使普代恩故

之諸侯其妻子先來

御城下、其余如外樣之諸侯暫試志

東照宮之御恩沢之厚与不忘之魂魄、以時宜加褒貶可也、

今公幸在當職、既使上下之衣服復古格、復使此妻子置於

御城下之旧例、亦可易且又講武所雖於勵武芸甚盛然、其

實未至於全備、請待

還 御舒号令大行、文武之大典先於講武所講七書、使普

代恩故之諸侯乃至於旗本衆之子弟各出此講席、以極孫具

之真理、以立威伏夷狄之策略、謹再為宰相真言希容愚衷

之万一以為、

幕府益軸忠勤、誠恐誠惶頓首、

元治元年甲子五月十八日 藤原隆都百拜

〔裏表紙ニアリ〕
「風月庵」

冊子原寸 縦二七・三糶 横二〇・二糶 四枚

101 裁許掛園田彦左衛門ヨリ田畑平之丞等へ

異国船長州へ來襲ノ件

〔包紙ウラ書〕
「御家老座
奥掛書役勤

小倉滞在
御裁許掛勤